
大空を飛ぶ者

藍絃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大空を飛ぶ者

【Nコード】

N9832B

【作者名】

藍絃

【あらすじ】

オゾン層の破壊により工業を進めることをやめた世界は排気ガスや燃料の削減と称し空を飛ぶ手段や海を渡る手段を少なくしていた。そんな中変わらない日常につまらないものを感じていた天上翼てんじょうよくと黒神黒深くろがみくしんの住む日本へ未知の薬が降り注ぐ。それは、2人の言うつまらない日常を変える第一歩だった。背にツバサの生えた人々は自らの体に困惑しながらも動き出す。

プロローグ

「これで、世界は変わるのでしょいか？」

研究室のようなどころで1人の若い女性の不安げな声が響く、そこは薄暗いため彼女の周りに何人の人間がいるのかわかない、彼女はそこに誰がいるのかを知っていた。

彼女とは違う、新しい声が響いた。今度は男のようでその声は低く、重い。

「変わる。それでなければわれわれの研究は何だったのだ？ 何の意味があつたと言えるのだ杏よ」

諭すような声、しかし杏はそれで納得できなかつたのか若干大きな声を出す。

「ですが！ ですが……！！」

言いたいことをうまくまとめられず、杏の声が少しずつ小さくなる、今までどのくらい研究していたのかわからない、だが、その年月意味を問われ、意味がないと言ってしまえば自ら削った年月を否定することになるのだ。だというのに彼女は迷っていた。

研究の成果を外へ、極秘としていたものを外へ流出させることに迷っていたのだ。

その結果どうなるのか、彼女はそれを知ることを恐れていた。

「杏、僕も天河さんと同じ考えだ、やっとなつめた真実を外に出さず終わらせることなんてできるかい？」

「祐樹……いいえ、できないわ」

杏の側に寄り添うようにしていた薄汚れた白衣をまとった祐樹はそう言うと彼女の肩に手を置いて安心させてやる。

互いに研究者であり、夫婦である二人の意思は、少しずつ固まりつつあった。

天河はそんな2人を見て重々しく口を開いた。

「ならば行こうか我らの未来のために」

『はい』

答え、研究室から出て行く研究者たちに光が当たる。

その目には、揺らがぬ決意がこめられていた。

これから起こる事実から、目をそむけることを許されぬ研究者たちは、結末を見届ける為にも、光から目をそらさず前に進んだ。

×××××

「オゾン層の破壊の進行、それは私達の工業技術の発達の停止を促しました。そして今ではエコ燃料を使う飛行機や自動車が生まれましたが工場廃液や二酸化炭素のことが考慮され生産量はごくわずか、そのため文明は停滞、退化の一途を辿っています。」

朗々とした声が、教科書を読み上げていく。

今や歴史の一部となった温暖化現象、読む方も聞くほうも耳に夕コができるほどにこの話を聞いていた。

(高校にもなってこんな授業やってもつまんね……)

天上翼は黒板に書かれていく文字を見てあくびをする、丁度今は7時間目、現代社会の時間だった。

現代社会と言っても中学生の社会で教わった内容と被っているところがたくさんあるので、皆それぞれノートをとっていると思わせて絵を描いていたり、ゲームをやっていたり携帯のメールをやりとりしている生徒もいる。

そんな中堂々と携帯をいじっていた生徒に歴史教師が目を留めた。教師の目つきが変わる。

怒られるぞ。これから説教に変わるであろう状況に、生徒たちは静かになる。

一斉に皆の目がそこへと集中し、小声でその生徒に対してドジだ、などと言っている。

自分のことは棚に上げている。バレなければいいんだ、そんな考えの生徒ばかりだというのも原因の一つだろう。

「尾坂さん、授業中に何をやっているんですか？」

歴史教師が翼の前の席にいる尾坂のところまで歩いてくる、授業を聞かないで遊んでいた生徒たちの一部が、驚いて携帯やゲーム機を隠すが、翼はそんなこと気にしないとでも言うようにつつぶせになつて寝始めた。

説教なんてつまらないもの聞く気が起きないという翼の考えだった。

「メール」

「授業中にやることじゃないでしょう？」

まずは優しく忠告することから始めた教師に、尾坂が携帯の画面から目を離し、言った。

「うるっさいなあ！ いいじゃん真由美先生、どうせこんなの聞いてもたまたまなんてなんないんだからさ！！」

「なっ、何を言うの?! これは将来あなたの……」

「ためになんてならないじゃん！ 時代背景なんて知っても仕事に使える?! 文明の退化で何か発明ができる、そんな夢物語甘っちょろすぎなんだよ!!」

しん、と教室内が静まり返る、尾坂はそれを言い切るとまた何事もなかったかのように携帯でメールを打ち始めた。

対する真由美は何を言ったらいいのかわからないのか、口を開きかけてはまた閉じて、という動作を何回か繰り返した。

そしてやっとなんを言うのか決めたのか口を開いた真由美の声に、重なるように校内放送が入るときの独特なチャイムが鳴った。

『全校生徒にお知らせです。至急窓を閉めてください！ 正体不明の粉がばら撒かれています!!』

放送の終了と共に聞こえてきたのはエコヘリコプターの小さなモーター音、そして光を受けて反射する大量の粉だった。

×××

あまり聞かない校長の声と、外の現実を確認した皆がどよめく。

粉が振りまかれるのを見て叫び声をあげた。窓際に座っていた尾坂は、咄嗟に窓を閉めたが翼は寝ていたためその隣に座っていた女子生徒が、窓を閉めながら翼を殴って起こす。

その時粉を吸い込んでいるとも知らず、翼は自分を殴ってきた女

子生徒に起こされたことに対して文句を言った。

「うるせえ、起こすなよな黒神!!」

不機嫌な顔をして怒鳴った翼は、さらに拳骨を喰らった。

次に怒鳴ったのは黒神と呼ばれた女子生徒、その声には明らかな怒りが含まれていた。

状況を知らない翼の言葉が、どうしても気に食わなかったようだ。

「黙れ！ お前放送聞いてたのか?!」

その言葉に不安や、焦りのようなものを滲み出させて言うが寝起きの翼は、わけがわからずにまた怒鳴った。

「何が!!」

「……はあ、説明する気もなくなっ たわ」

知らないことを一から説明するのは疲れる。黒神と呼ばれた女子は、呆れながらも席についてそわそわと窓の外を見た。

クラスの生徒が一応落ち着いていた頃に真由美はもういなく、先生同士での緊急会議に行ったのだろうということ、皆がそれぞれ仲のいい生徒の机へと出かけていった。

黒神自身も仲のいい女子の席へと歩いていった。

「ね、誠」

声をかければ誠は、教科書の下に隠していた小説を片付けながら返事をした。

「何？」

「さっきの放送なんだっただんたろーねー？」

「私には何にも、黒深はどう思う？」

「さあね、てか俺ってば粉吸い込んだ感じがするんですけど」

教室の後ろの方にいる浅葱誠あさぎまことと話しながら黒神黒深くろがみくしんは、今のことで騒いでいる教室を見ながら言った。

今さっきの出来事は、あっという間に会話のネタにされ、少しづつ先ほどの話題に対する熱が冷めてきたようで、ほとんど生徒たちの会話が他愛のない日常会話へと切り替わっている。

ある程度雰囲気落ち着いてきた教室を見ながら誠が言った。

「やばくない？ それ、でも私もちよっと吸った気がするんだよね」

「てかいきなり吸うなってっただって無理だよなあー……数日後俺がいなくなったらよろしく」

「ええーっ?!」

「まあどーにかなるっしょ、多分。それにつまんない日常が変わるってのは怖いけど面白いもんだね」

黒深は目を輝かせながらふざけていると、真由美が難しそうな顔をして教室へと戻ってきた。

皆それを見て自然と静かになる、視線が真由美へと注がれた。

小さなざわめきも何もなくなった教室で真由美は重々しく口を開いた。

「皆さん、先ほどの放送のことでお知らせがあります。撒かれていますのは正体不明、後から入ってきた情報によると、どこの国も研究していないような、未知の薬だそうです。」

いきなりの現実味がない言葉。

それが今、常識ある大人、しかも先生という立場の人から言われるというのは、変な感じだ。黒深は、呆けながらもその説明を右から左へと聞き流した。

「吸ってしまった人は申し出てください、それともうしばらくの間、校内でおとなしくしててください、次に放送がまでそれぞれ校内で部活などをして時間をつぶすか、何かしているように」

言うべきことを言い終え、真由美が教室から出て行く小さなざわめきが少しずつ数を増す。

しかしそれはほんの短い間だけ、皆がそれぞれ移動を始めるよう騒がしくなってくる。

その様子を見ながら黒深は、先生がいなくなった途端に楽しそうな声を出して誠に話しかけた。

「うっわー、本格的にやばそう……どうする？」

「どうするって、何かできることとかある？」

「何も、どーせやることねえし部活行くか！」

よいしょ、と立ち上がり黒深は自分の席へと戻り、誠はそれを見て笑いながら答える。

「そつだね」

肯定すると誠は机の中に入れた教科書や本を取り出した。

教室に残る人は運動部だけだと思われていたが、運動部は校内で筋トレをやるようで体操着に着替えている生徒がたくさんいた。

誠が黒深の方を向くとその本人は、翼へと声をかけている。

「翼ーお前も行くぞ!!」

黒深と誠は、帰り支度を済ませバッグを持って、半ば嫌がる翼を引っ張りながら、美術室へ向かった。

黒深たちがいるのは三階、美術室はその下の階なのですぐに部室とされている場所へと行くことができた。

美術室に到着した黒深たちが見たのは、窓の外を見つめている部長の三崎慎一みさきしんいちだった。

外を見ていた慎一は3人が来たことに気付くと、軽く挨拶をしてまた窓の外を見る。

ぼんやりと窓を眺める慎一が、何やら呪いのような言葉を呟いていたことを、黒深と誠は無視を決め込み、翼も特に気にすることではないと意識しないようにした。

「早いつすね、先輩」

「まあね、俺は天才だから」

天才、といっても自称天才なのだが、慎一は実は結構頭がいいらしい。それなら自称はいらないのだが、黒深はそれを信じようとしたため、自称がついている。

そうしている間にも慎一は、何か思いついたのか、美術室内に置いてある画用紙へと何かを描きだした。

誠と黒深はそれをいつものこととみなし、自分の席として指定した場所に荷物を置いて座る。

今更教室に戻れなくなった翼も諦め、黒深に近い席に座った。

しかし黒深は、絵を描くための道具は机の上に置いたが、何か絵を描いていられるほどのんきな精神はしてはいなかった。それは誠も同じで筆が進まないようだった。

そんな状態の美術室に続々と部員たちが集まってくる、やはりこんなときだからこそ部活で気を紛らわそうとしているのだろう。

お世辞にも広いとは言えない美術室は、少しの時間でほとんどの席が埋まることとなった。

「こんにちわ」

「失礼しまーす」

結局美術部の部員は全員が集まり、先ほどのことについて話すことになった。

話していた時間はあっという間にすぎ、気づけばもう6時近くになり、そろそろ放送が入ってもいい頃だろうと考える部員たちだったが、なかなか放送は入らない。

仕方なく携帯を持っている部員は、メールをして外の情報を手に入れることにした。

メールは、あまり時間が経たないうちに返ってきた。内容は誰もが同じで浮かない顔をしていた。

「えーっと、あ、やっぱり母さんちほつも同じだわ」

「こつちもそうみたい」

「私の方も」

「先輩つちほうはどうですかー？」

「んー、だめみたいだねえ」

「こっちもだめ」

やはり結構な広さで薬がばら撒かれたらしく、室内に拘束状態になっているらしい、だからといって何もしないのもつまらないため何かゲームでも始めようと、部員の一人がトランプを出そうとしたところに放送が入った。

『えー、粉についてわかったことが一つ、毒性はないとのことですが、引き続き粉の除去を行うため、まだ下校はできません、大体下校は7時過ぎになります。』

校長の放送が終わり、それぞれ部活をしているであろうところから騒ぎが聞こえてくる、そして放送の通り7時が過ぎ、8時ごろには粉の除去が全て終わったらしく、放送が入り、外へ出た皆が皆妙に綺麗になった道路に驚いた。

暗くなってしまうた道のところどころに警備員が立っていたのは言うまでもなく、全員寄り道もすることなく帰路に着いた。

粉を吸ったものたちは自分の変化にまだ気づいていなかった。

ACT・1 変化の兆

朝が来ていつもの変わらない日常が始まる。それが、幸せだったことを知らずに。

「翼ー起きなさいー!!」

「ん……」

母親の声に起こされて翼は体を起こそうとしたが体がとてもだるく、動かすのさえ億劫になり、そのまま転がっていようと布団に潜り込み丸くなった。

寝かせておいて欲しい翼の意思をよそに、母親が翼を呼ぶ声が少しずつ大きく、近くなる。

翼の部屋へと母親の足音が大きくなってくる。翼の願いもむなしく、時間が経たないうちに部屋の扉が開かれた。

「翼！ 起きなさいっ!!」

「だるい」

「あなたがだるいのはいつものことでしょう！ 早く起きなさい」

「本当にだるいんだって！」

声が掠れていると自分でも思った翼は、調子の悪そうな顔を布団から覗かせる。

うなじのあたりまで伸ばされた黒髪が汗で皮膚に張り付き、汗で濡れていない部分は手入れをしていない証拠とばかりに跳ねている。

上気した頬、どこか潤んでいる瞳。母親はやっと翼の言うことが本当なのだとわかり翼の額に手をあてる。

翼の額は39度を超えているのではないかと言うほど熱かった。

現実を知り、母親は血相を変えて急いで氷枕と解熱剤を取りに部屋を出た。

その行動の速さは母親として上等なものだろう、

「翼、飲める？」

「多分」

母親に抱き起こされながらどうにか解熱剤を飲むと翼はまた布団に潜り込んで目を閉じた。

この状態では学校に行けそうもないな、翼が考えているとタイミングを見計らったかのように家のチャイムがなった。

聞こえてきた声は翼に覚えのある女の声。

「おはようございます。」

翼の家に来たのは黒深だった。

迎えに来た黒深に悪いが、翼がこの状態では学校に行けるはずもないと母親は玄関へと向かい欠席すると伝えようとした。

玄関に立った翼の母親は、欠席することを告げようと開いた口が、驚きに変わるのをぼんやりとしてきた意識で翼は聞いた。

かなり大きな声で響いた声で翼は、黒深が自分と同じ状態なのだとわかる。

黒深はそれでも学校に行こうとしているため、翼の母親は休む

ことをすすめているようだ。

意識が先ほどよりははつきりしてきた翼は、黒深の声を聞くために耳を澄ます。

「大丈夫、大丈夫ですよ、それにうちそんなに調子悪いわけ、じゃ……」

ふらついた体でくず折れかける体を必死に支える黒深に、翼の母親が目を見開く。

なんつー馬鹿だ。黒深の声を聞いた翼は、確かに自分はだるいとか面倒くさいで簡単に学校を休むことだつてある、それをいちいち面倒かけて迎えに来ている、何故？放つといってくれればいいじゃないか。

翼は栓もないことを、と思いながらも笑い、またぼんやりとした頭で外のことなど気にせず、眠ることにした。調子が悪いというのに玄関に立つ翼の母親を見上げるのは黒深。

「黒深ちゃん、大丈夫？」

顔を真っ赤にして汗までかいている黒深に心配そうな顔を向ける翼の母親に、それでも笑顔で黒深は言った。

「はいー、大丈夫です。えっと、天上は欠席ですか？」

「え、ええ、今欠席届を書くから待っててね」

黒深の気丈な態度に負けて、翼の母親が奥へと消えるのを見ながら黒深は自分の体の異変について考えた。

考えられる理由は一つ、昨日ばら撒かれた粉だ、それ以外に考えられることもない、そう決め付けている黒深は他にもおか

しいところを幾つか脳内で指摘していく、一つはおかしな放送の仕方、何故校長自らが放送したのか、まるでそれを知っていたかのような、それに何故暴動をおこしたのか、毒性がないことはどこから保障されたのか、首謀者が誰なのかすらニュースに流れていない。

もう一つは片付けの早さだ、あれだけの量の粉がばら撒かれたと言つのにあの片付けの速さはなんだったんだろうと考えるとこれは元から起こるとされていたことなのではないか、そう考えてしまふ。

しかし確証のない思考を打ち切るように、翼の母親が欠席届を持ってきて、黒深に渡す。

「じゃあお願いするわね」

「はいーそれでは」

翼の家を後にした黒深は停めていた自転車を動かして、危なっかしい運転ではあったが学校へと着くことができた。

自転車置き場に自転車を置いて靴箱へと移動する黒深は、その最中に後ろから誰かが背中を押されるのを感じた。

急なことではあったが黒深は、いつもならすぐに体勢を立て直せるはずの軽い力にも対応できず転んだ。

受身を取ることに成功したが浅い痛みを感じた黒深が、ワイシヤツから血がにじむのを見た。

知らず、眉をひそめてしまふが誰もそれを見ることはしない。

「誰だ」

地を這うような声で後ろを振り向いた黒深、だが誰もいない、そのかわりに子供張りの低次元な悪口が聞こえてくる。

いつものことだ、諦めよう。仕方なく立ち上がるうとするが体が重い、特に背中が火で焼かれているかのように熱いことに黒深は舌打ちをした。

「ちくしょう」

いつもならこんなはずじゃないのに、黒深は緩慢な動作で立ち上がる。

ふらりと傾ぎかける体を無理やりにも立たせて、歩く。

その目はぼやけた視界で前を見、進む姿はどこか戦場いくさばを進む武士のようであった。

「大丈夫、大丈夫だから」

それはまるで心配する誰かに言うものだったが今、この場にそれを言うべき人はいない、黒深は少しずつ体を引きずるように靴箱へと持つて行き、靴を履き替える。

黒深の通う学校は3つ棟があり、その真ん中にある2棟の最上階たる3階へと登っていく。

よくみれば皆元氣そうで休んでいる人の方が珍しいようだった。やっとの思いで辿り着いた教室へ入った瞬間にめまいがしてがくりと膝をつく、休んだ方がよかつたかも。

黒深の頭に後悔という文字が現れたが来た限りやるべきことはやらないと、自分自身を勇気付けながら黒深は席へと移動する。

今、教室の壁にかかっている時計は8時25分をさしている。朝の読書の時間だ、黒深は机にいつも入れている本を開いて読み始める。

本の題名は「大空へと憧れるのは何故か」、図書室でなんとなく見かけたその本には不思議な魅力があり、それををつい手にとつて借りていたのだ。

本の視点は色々なところから、それが研究者や心理学者、主婦やサラリーマン、果てには中学生や小学生などからの見解が入っている。

それぞれの意見が自由で、どんな風に懂れるのかを知るのが黒深は楽しかった。しかし今の黒深には書いてある文字すら歪んでよく見えなかった。

そして読書の時間はあっという間にすぎ、担任の真由美が教室へと入ってきた。

昨日以上に厳しい顔をした真由美は教卓のところまで来て、皆の方へと向いた。

「皆さん、お知らせがあります。昨日のことについてのことなのでしっかりと聞いてください」

静かだ、黒深はそう感じた。いつもならふざける男子も今日はおとなしい、いつも他の席の人と話している女子も黙って真由美の方へとしっかりと顔を向けて耳を傾けようとしている。

尾坂のいる席は、空いていた。

「粉を吸い込んで高熱を出した人はすぐにも病院で治療を受けてください、中には無理をして亡くなった方もいます。至急病院で治療を受けるように、これで朝のホームルームを終わります。」

「じゃあ毒性がないってという言葉は嘘ですかー？」

男子生徒がふざけて聞いたが真由美は口を閉ざした。何かを知っているのか、あるいは何かを知っているから話せないのか。

あれ？もしかしてうちでは結構やばい？

どうしようか本気で考える黒深の思考に何かが引っかかる。

よく回らない頭が警鐘を鳴らしている。

「治療？」

こんなに早くに治療法が見つかるのだろうか？ いや、きつと違うだろう、黒深は本をよく読むせいか、基本的に頭はあまりよくないというが雑学的なところで頭が回る、新しい細菌やウイルスについてすぐに完璧な治療法が見つかるなんてありえないことだ

そういうことも理解している黒深が思い当たったことは一つ、戦争中などにある“人体実験” 恐ろしいことに思考が辿り着いたため、黒深はかぶりをふると真由美に病院にいくため早退すると伝えて足早に学校を後にした。

元より調子の悪そうだった黒深に、すぐ早退が許可された。

真由美の気遣う言葉をよく聞き取れず、心配していることしかわからない黒深はバッグを持ち、教室から退室する。

自転車の鍵をはずす、自転車に乗る。そしてこぐ、いつもしている行動にいつも3倍以上の体力が今の黒深には必要だった。黒深は自転車を止める、まただ、背中が熱い、背中がどうなっているのか正直知るの怖かった。しかし知らなければいけない気がした。それでも黒深は家へと一端引き返すことにした。

病院には行ってはいけない、そう本能が訴えるのを感じながら。

「あれ？ どうしたんだい？」

近所のおばさんが声をかける、それに曖昧な返事を返しながら家への道を急ぐ、その間どれだけの人が声をかけてきたのか黒深は覚えていない。

帰宅途中一度だけ、電柱にぶつかり薄れかけた意識を強制的に目覚めさせた。

「黒深?! どうしたの?」

「あ、 母さん……」

仕事に行こうと丁度家を出たらしい母親を視界に入れた瞬間黒深は固まった。

何を言えばいいのか、 どうやってたら病院に連れて行かれないかを瞬時に考える。

困った顔をする黒深に心配そうな顔。

「調子でも悪いの?」

「ちょっとね、 仕事、 行ってらっさい」

「しっかりと暖かくして休むのよ?」

訝しげな顔をした母親は、 それでも仕事のために黒深の横を通り過ぎていった。

それを眺めた黒深は苦笑しながらも家のすぐそばに自転車を置き、家の鍵を開けて中へ入っていく、 自分の部屋がある2階には戻れそうもないことを本能的に悟った。

「あつい、 あつい、 よ……」

溜まった息を吐き出すと制服を脱いで背中に手を伸ばす。

背中では何かがどくりと脈打つ、 これは 血管?!

「何、 これ?!」

気持ち悪い、怖い、嫌だ！！ 黒深の心が強い拒絶をあらわすと同時に背中から何かが這い出てくるような得体の知れないものを感じた。

その瞬間、黒深は自分自身の心臓が止まったような錯覚に陥った。

しかし目を開くことも動くことも、もう、できなかった。

×××××

「翼、お仕事休んでき……翼!？」

翼の母親 亜佐美^{あのみ}は翼の部屋へと、替えの氷枕を持って入ってきた。

しかし翼が布団をかきむしるようにして苦しんでいるのを見て、氷枕を放り出して翼の側へと駆け寄る。

暴れる翼の姿は尋常ではなく、亜佐美はこれ以上はないほどに驚いていた。

「翼！ 翼!!！」

「痛い、痛い、痛いっ!!！ どうしてっ、何がっ、あ、うああああっ!!！」

翼の体が仰け反り、目がこれ以上は開けないのではというくらいに見開かれる。

次の瞬間、彼の体は糸が切れた操り人形のように倒れた。

突然動かなくなった息子を抱く亜佐美は、息子の心臓が動いていないことを知り、絶叫した。

それは、ただの始まりに過ぎなかったというのに、誰が気づけ
たというのだろうか？

ACT・2 ツバサ

「お前がやったんだろう！」

「何も、何も知らないよ！！」

男がまだ小さい女の子に何かされたのか怒鳴りつける、しかし女の子は何も知らないようで半ば涙目になりながら抗議するが男は、それを聞かずに「お前がやったんだろう」という言葉を繰り返す。女の子はその言葉を否定するように幼さを残す声で叫んだ。

「違う！ それに何のこと?!」

「うるさい！ お前なんて……」

男の手が女の子の首へと伸び、その首を。

×××××

「いやだあああつ！！」

「うおつ?! 黒神！ いきなり何叫んでんだよ!！」

「は？ え、あ、あれ？」

絶叫して、飛び起きてみるとそこは病室のようなところだった。

白い壁、白い床、白いベッド、全てが白の部屋で黒深はベッドから身を起こす。そして自分の手を見て動かしてみる。

ばきばきと関節が鳴って痛い、だが、痛いということは生き

ている、ということだった。

「い、 たたた……ん？ そっぴやうち死んだんじゃないの？」

「俺に言うな俺に」

先に目覚めていた翼も、何も知らないようでもそばを向く、そして一言

「せめて服を着る」

そこでやっと黒深は家に帰ってきてきて制服の上を脱いだままのことに気づいて急いで自分の上にかかっていたタオルケットを上半身に巻いた。

黒深はどちらかと言うと太っている方なのだがやはり性別で見ても女と男、とりあえず翼は目のやり場に困ったのだ。

対する黒深はというとあまり気にした様子ではなく、むしろ何故目をそらしているのか理解できず首を傾げた。

「あー、びくった。そっぴやここはどこ？」

黒深がきよろきよろとあたりを見回してみるが、場所を示すようなものも時間を示すようなものもここでは見当たらなかった。

仕方なく黒深はスカートのポケットに入れていた携帯を取り出そうとしたが、そこに携帯の硬い感触はなかった。

さらにポケットの奥を探る黒深は他にも入っていたものがないことに気づいて叫んだ。

「嘘、携帯がない……しかもポケットに入れてた生徒手帳まで！」

「何でそんなもんポケットに入れてるんだよ……それよかお前、違和感とかないのか？」

「何が？ ん……あれ?!」

背中が妙に温かい、黒深は恐る恐る背中を触る、血管は浮き出ていないがその代わりに触れたのはふさふさとした。まるで羽毛のような何か。

何かをゆつくりと辿れば背中へと行き着いた。

「これ、何?!」

やっと気づいたか、翼は額を押さえなくなるのを我慢して黒深に背を向け服の背中部分を上へと上げた。

そこには黒深と同じような、まるで白鳥のような白いツバサがあった。

黒深が目を睨り、続けてうらやましそうな声を出す。

「白いツバサだ、うちのは真っ黒だし」

黒深はというとカラスよりも黒いのではないかと思わせる漆黒のツバサがあった。

羽ばたかせ、舞い散る羽は不吉を表す鴉の様で、黒深はその羽をじっと見詰める。

「黒神、お前のツバサも動かせるか？」

「んー、やってみる」

そう言つて黒深は精神を集中させてその背にある漆黒のツバサを動かすことに集中した。

しかし集中させる前にツバサは勝手に羽ばたいてくれた。それどころか黒深の体ごと浮き上がらせる。

安定したベッドという場所から離れた黒深は、急に自分の体が浮いたことに対して慌てたような声を出す。

「う、うわわっ!!」

「おい、静かにしろ！ 誰か来る」

いきなりのことで叫び声を上げた黒深を翼は上から引き摺り下ろし、元いたベッドに戻らせ先ほどと同じような状態で寝たふりをしろ、と呟いた。

静かになつたその場所に、靴音が近づいてくる。そして、靴音が止まり、白い空間にぼっかりと穴が開く。

それを音だけで確認した2人は他の、第三者の気配を感じた。

「目覚めないな、死んだか」

男の妙に冷めた声が部屋へと響く、怖い、何か得体の知れない恐怖を受け2人は内心ひやひやとしながら男が去るのを待った。

しかし男はいきなり2人をベッドから落とした。そのときにうめき声を上げなかったただけよくやったと互いにそう思った。

そして男は憎々しげにこう呟いた。

「失敗作が」

男は一言そう罵ると、先ほどよりも足音を怒らせながら退室して行った。

靴音が遠ざかり、他にこの部屋に近づく気配がないと感じた。人は互いに自分たちの他にも下に落とされた元、人間を見た。恐らく黒深や翼と同じような状況になって連れて来られた者、そして動かないモノ。

「うっ、えっ！」

「ひっ……!!！」

翼は口元を押さえたが吐いてしまう、黒深は込みあがる吐き気を抑えようと努力して最後には、吐き気より涙腺の方が緩んだのか嗚咽が漏れた。

そして時間が経ち、翼の吐き気がおさまったと思われた頃に黒深が口を開く。

「ここから逃げよう」

ただここから逃げなければと感じただけではない、ここにはいけないという思いも黒深にはあった。

翼はそれに頷いた。翼も同意見なようで、逃げ出すには先ほど男の出て行った扉しかないと言った翼は考えた。

考えを黒深に言えば、翼にやりと笑いかけ、床を叩いた。

「こういう建物って大体隠し扉みたいなのが……と、ほら」

黒深が示したのは三角のマークの彫られたところ、そこにどうにか爪を入り込ませて上へと引き上げる、その下に広がる空洞から風が吹き上げてくる。

空洞の先は必ずどこかに行き着いていることがわかった。

そして互いに顔を見合わせて黒深は翼に先に行くように促し、

下りたのを見届けたと同時に自分も下りようとした瞬間に、人の
気配が突然あらわれ、扉が開いた。

「お前!!」

先ほどの男とは違う、しわがれた声、それに振り向いた瞬間に
半ば反射で空洞へと滑り込んでいた。

あれは、あの顔は……!! 下へと降りながらありもしない想
像にかぶりをふり黒深は下の景色を見ようとする。

薄暗い明かりがついているだけで後は何も光はない、そこに得
体の知れない不安を感じたが、もうきつとあの部屋に戻れないで
あるう事はわかっていたので、先に下りた翼の心配をすることに
した。

下へ下へと降下していくのにまだ終着点に着かない、本当に
この先に果てはあるのだろうか？ そんな考えがよぎり始めた時、
誰かが黒深へと声をかけてきた。

（あなた、誰？）

「どこだ？」

（ここ、ここだよ）

小女のようなかわいい声がそう囁く、それを頼り小女の姿を探し
てみるがどこにも見えない、薄暗いこの状態で何かを探せと言わ
れても無理だ。

黒深は少し大きめな声を出すことにした。

「わからない！ もっとはっきりとした場所を言ってよ!!」

「……よ」

声を出した矢先、目の前に現れたのは先ほどの声の主と思われる少女だった。

「うわっ！　び、びっくりしたなあー」

「あなたは飛ばないの？」

「え？」

そういえばそうだ、小女はどうして自分と同じ速度で下へと落ちているんだ？　そしてよく見てみればやはり、小女の背には青白く光る綺麗なツバサがあった。

そのことから小女は黒深に合わせて飛んでいたのだとわかった。

「ねえ、飛ばないの？」

「今飛ばよ」

言われなくとも、といった様子で黒深は背中に意識を集中させた。そして背中に生えたツバサが飛ばたいと同時にタオルケットが羽に押され、下へと落ちていった。

「うわああっ！　ちよっ、あー……」

黒深が取り返そうと伸ばした手は届かせようとさえ届いたはずだが小女をそのままにするのも、と考えるうちにタオルケットは完璧に下へと落ちて見えなくなった。

そして行き場のない手を取りあえずおろすと小女を見る、大体

12、13歳くらいだろうか、少女の顔にはあどけなさはあるのだが、どこか強い信念を持っているかのように強い眼差しをしている。

「あなたは誰？」

「うちは黒神、そっちは？」

「私は神崎愛」
かたむねまな

愛はそう名乗ると黒深の手を取った。そして下を指す。
どうやら黒深に道案内をしてくれるようだった。

「じつち」

「えっ、えっ？」

ただ導かれるままにしている黒深は、愛の迷いのない動きに驚いた。

「来て、皆いるから」

「皆？」

「落ちてきた皆、生きてる人も、死んでる人もいる」

淡々とした口調に黒深はつい不安になって愛へと聞いてみる。

「気持ち悪くないん？」

「2、3日したら慣れたよ」

そう答えた愛の目には悲しみが宿っている、2、3日すぎているということとは黒深はそれだけの間あそこで眠っていたということになり、加えてその間にかかなりの人数がここへ落ちてきているということだ。

不安を募らせる黒深に愛は、そんなこと気にもかけず下へ降りる速度を上げていく。

下へ行くにつれて上にあつた数ほどの明かりはない、今いるところと上の明かりの数を比べればきつと2倍近くは違つだろつと思えた。

下へと降り立った時に残つた明かりはごくわずか、そのかわりに外の、太陽の光がやけに明るく、見せなくてもいい現実と言つ名の地獄を見せた。

見ることを拒絶できたならどれだけ幸せだったのか。

ACT・3 地獄で（前書き）

少しグロい表現があるかもしれませんが。

ACT・3 地獄で

空つてのは人が生身で飛ぶことができねえから憧れるんだぜ!!

『大空へと

憧れるのは何故か』より抜粋 路上のシンガー

まさに地獄と言つべきだろう、目の前に広がるのは腐臭やいくつものうめき声、落とされた人たちは先に落ちていた人をクツションにしてそこへ落ちるが高さが高さだ。

体のどこかを折っているのだろう、そんなこともお構いなしに上から何人もの人や死人が落ちてくる、これを表すにはどんな言葉を使えばいいのだろうか。

案の定何を言えいいのか混乱してしまった黒深が呟いたのは真実を否定したいのか、それとも自分に認めさせているのかわからないセリフ。

「マジ、でか？」

黒深が腐臭に鼻を塞ぐが愛は、そんなもの感じないとも言うように壁にあいた。いくつかある穴の1つへと飛んでいく、地獄のような光景に目をそらし遅れて黒深もついていく。

降り立った先には子供から大人までたくさんの人が座っていた。疲れきった顔をした人、衰弱しきった体を持つ人、赤子を泣き止ませるまだ幼い子供。

元気な顔をしているものはこの集まりの約十分の一あればいいほうだ、愛は無言で中へと進み自らの帰還を知らせた。

「ただいま」

「愛、お帰り」

愛の帰還に気付き、声を上げたのは比較的元気そうな顔をした青年。後から続いてお帰りという迎えるような声がいくつか上がった。

顔には衰弱が見えるものたちは、それでも笑顔で愛を迎えた。

「お帰り、そっちは？」

お帰りと声をかけた何人かが、愛から見知らぬ来訪者へと視点を变える、いきなり注目の的となった黒深は、居心地が悪そうに後ろへと一歩戻った。

「新しい人、名前は………黒神、何？」

「あ？ あー、くろがみこくしん黒神黒深、始めまして」

「始めまして……」

とりあえず自己紹介をした黒深は、一部の男性の目がある一点に集中していることに気づく、それは先ほどタオルケットで隠していた体。

「うおわああっ?!」

咄嗟に隠すがもう遅い、注目を浴びた黒深は顔を真っ赤にしながら蹲る、そんな黒深の状態に愛が、注目していた男性陣を睨みつける。

「変態」

下手に罵倒されるよりも一言で斬り捨てられたほうが痛かったのか、男性陣は次々に視線をそらしていく、愛は軽く溜め息をつくと穴の奥から黒深が着ているのとは違う、制服を差し出してきた。彼女なりの気遣いを感じ取った黒深は蹲りつつもそれを受け取って、着る。

「うう……そっぴや愛、翼ってやつ見かけなかった？ 目つきが悪くて、バカっぽくて、白いツバサを持った。」

「翼……？ いいえ、見かけてないわ」

そっか。黒深は、残念そうにぽつりと言うと、まだ人の落ち続ける方へと目を向けるとまた誰かが落ちてきていた。

落ちる人物が着ていたのは黒深のよく知る学校の制服、黒深はそれが誰なのか確認もせずに飛んだ。それは黒深のよく知った女子生徒。

「浅葱！！」

黒深が落下する誠をしつかりとつかんで飛ぶ、気絶しているようで何の反応もないがとにかく愛のいた穴の方へと戻る。

急に飛んだことによって息切れを起こした黒深を、愛と元からいた人々が見ていた。

何にそんな驚いているのかわからない黒深は軽く首をかしげる。いち早く自らが硬直していることに気づいき、愛が途切れ途切れに言葉を紡いだ。

「いきなり飛んだから、びつくり、したわ」

「あはは、ごめんごめん、っと浅葱、大丈夫か？」

まだ軽く青ざめた顔をしている愛だったが、それに気づいていない黒深は誠の顔を軽く叩いた。

しかし反応が返ってこない、仕方なく少し大きい声で呼んでやると誠が身じろぎをした。よかった。死んでいない、その事実が黒深を落ち着かせる、安堵の溜め息をついて、視点を誠に戻したとき、誠は目を開けてぼんやりと人の姿を捉えたところだった。

「黒深？」

「そっだよー、誠」

ゆっくりと起き上がる誠を見ながら表情を緩ませた黒深が答える。

誠の表情は、まだ硬かった。見知らぬ場所で目覚めた誠にはまだ混乱が残り、不安に体を縮めていた。

「何が、あつたの？」

「んーまあ色々ね、そっだ、翼を見かけなかった？」

「翼？ 翼も来てるの?!」

明らかに驚いた誠、それを見た黒深はまだ翼が降りてきていないことを確認した。

あの馬鹿、一体何してるんだ?! そしてもう一度飛び立とうとしたが誠が服を掴み、愛が視線で制止を促した。

振り切つていこうかと思つたが誠の様子がおかしい、それどころかどこか違和感がある、ただ、それを確認してはいけない気がした。しかし目をそらすこともできないまま黒深は、違和感の正体を確認した。

「な……」

誠の片翼が折れている。折れた翼は痛々しそうに血を流し、黒深を愕然とさせた。

愕然とする黒深に誠が、ふいと目をそらした。自分自身の体の状態を知り、知られなくなかつたという願いを裏切られたような顔をしている。

「黒神、これが失敗作の例よ」

追い討ちをかけるような愛の言葉に黒深はさらに言葉を失う、“失敗作”その言葉がやけに胸に引っかかった黒深は、なんとなくでもここから早く翼を見つけ、立ち去りたいと思つた。

行動に出ようとすると黒深が、間隔をあげて落下してきた者ともノをはじめたように見る。純白のツバサが落ちてきたのだ、いや、落ちると言う表現は正しくないだろう、正しくはゆっくりをツバサを羽ばたかせ、降下してきた。

「翼！ こつちー！」

黒深が大声で名前を呼べば、白いツバサの持ち主はゆっくりとその場所へとはばたいてきた。

降り立った翼は一通り回りの様子を見ると、黒深を真正面に見た。

焦りのような表情の浮かばせる翼は、安堵と怒りを含ませた声

を上げる。

「黒神か！ お前どこにいたんだよ……それに、これ」

口を押させ、鼻まで抑えそうな翼は、落下してきた誰かをつかまえたらしくその背を見せる。

心なしか翼の服が汚れているのはきつとまた吐いたからだろう、翼の見せてきた人はすでに事切れており、ただ背中を見るように示してきた。

その背は血管が破けたようで血が背中一面に広がり、血管のような細い糸がいくつも露出している。

あまりの生々しさに一歩引いた黒深は、しかしそれ以上下がることはなくその背を見つめた。

下に落ちていた人の見えていないところまで見てしまった黒深は、気持ち悪さのあまり顔をそらす。隣で見ていた誠はそれを現実としてとらえられなかったのか叫び声を上げた。

悲痛な、叫び声だった。

その声はまるで生き残ったすべての人の心を代弁するかのよう響き渡った。

「愛、これが本当の“失敗作”か？」

「そうよ、何が原因かはわからない、でもツバサを生やすのに失敗するところなるのよ」

「冗談になってないね……なあま……」

「触らないで……」

誠の肩に触れようとした黒深の手がびくりと跳ね、そして行き場

をなくした。

これからどうすればいいのか、 どうしたら何がどうなるのか、
それがわからない、 だからツバサを持つ人々はここにいるのだ
ろうか？ 黒深は悲しみに沈みそんな心を無理やりにも浮上させ
ようと躍起になった。

そんな中、 翼が呟く。

「外だ」

「外？」

短い言葉にこめられた意味を完璧とはいえないが、 言おうとした
意味を確実にくみとろうと黒深が翼へと聞き返す。

もう一度、 翼が決心をこめた目で、 黒深を見た。

「外へ行こう、 それで、 何かがわかる」

それ以外に手段はない、 そう信じきった翼は止まらない、 短い
といえは短いかもしれない付き合いの黒深は、 翼の言葉に力強く
頷いた。

「賛成だね愛、 ここから外へはどう行けばいい？」

「だめよ、 行っては、 だめ」

愛が震えた声を出す。 他の人々の様子もおかしい、 外に行かせ
たくない何かがあるようだった。 だからといって外に出なければ、
この地獄の中で自らの何か壊れてしまいそんな気もしてくる黒
深はなおさらひけないと感じ、 さらに愛に口調を少しきつくして、
聞いた。

「どうして行っちゃだめなんだ？」

「だめ！ どうしても、皆、捕まえて！！」

愛の年相応に張りのある高い声と共に穴の中で座っていた人たちが一斉に襲い掛かってくる、だが統一された動きはしていない、

行ける、 シュミレーションゲームと同じ原理だ

黒深は呆然としている誠を、何が起こっているのか理解に遅れている翼をつかんで後ろへ、穴の外へと飛ぶ、

「黒神！？」

「飛べ！ 翼、とつとと飛べ、重いんだよっ！！」

そういつて黒深は翼を放り投げてしっかりと誠をつかまえておく、

しかし人数が人数なので黒深は動きを見切ろうとした。

だが、相手は大人や子供、動きがそれぞればらばらなのに戸惑う、ただ捕まえようとする一般人と作戦にしたがって動く軍隊、どちらが強いのだろうかと考えてしまいが腕をつかまれそうになり、思考を一旦富め、急降下後真っ直ぐ飛ぶ。

その時翼がついてきているのかなど考えない、必ずいるものと思っているからだ、目の前に壁が近づいてきたので愛たちのいた穴のある右側へと、急旋回すると急に襲ってくる人が増える。

「ちっ、翼！ 丁作戦！！」

丁作戦？ 何だそれ、そんな声が聞こえてくるが黒深の声をしっかりと聞きとめた翼はその意味を考えながら飛ぶだけで精一杯だった。

そして1つの結果へと辿り着いた。

「了解、 コマンダー黒神」

楽しそうに翼が笑う、 それは翼と黒深がゲームセンターのシューミレーションゲームのときだけに使う呼び名だった。 返事をしたところで翼が笑う。

意思の疎通ができたと確認し、 黒深も同じように笑った。

「いい返事だ天上少尉では、 行くぞ」

その瞬間、 黒深と翼の姿が掻き消えた。 そう思われた次の瞬間には2人ともが別々に正反対のところまで3人を追っていた人の前へと現れる。

それを確認した人は黒深と翼を追うが時々2人は、 速度をゆるめて完全に引き離さないようにしているような感じが見受けられた。 そのことに必死に追ってきている方は気づきもしない、 そして黒深と翼が少しずつ交差するように上へと上昇する。

交差する瞬間、 2人が笑い、 声が重なる。

『トドメだ』

2人は交差する瞬間に互いに腕を掴み、 ぶつからないようにしながら真上へと飛ぶ、 瞬間的なことで交差しそこなつた追跡者たちは、 互いにぶつかり脳震盪でも起こしたのか落ちていく。

ありえないとも思われる光景に、 驚いて硬直した人々の間を一陣の風が通り過ぎてくが誰も止めることなどできなかった。

黒深が先導者となり翼と誠は、 目を開いたまま固まっている愛の横を通り過ぎる、 しかし振り返ることはしない、 振り返ることなんて考えていないのだそして外への道が開けた。

そこには朝日を反射して輝く海があった。海的美しさに、そして光の眩しさに目を瞠る。

「わあ！ きれー、 ってことよ?!」

「……あつちに陸が見える」

海の輝きに目を奪われていた黒深の問いに翼が答える。

翼の示した方向に、ぽつりとゴマのように小さい盛り上がりが見えた。

「よし、 んじゃ行こうか」

「ねえ」

「ん？」

脱出するまでの間一言も話さなかった誠が口を開く、その間にも少しずつ陸の方へと距離を縮めるために飛んでいく。

「私は何？」

「は？ 何言っただよ誠でしょ、 浅葱誠、 自分の名前も忘れてたんか？」

「いや、 忘れてないけど……ありがとう」

黒深の返答に満足したのか誠は頷くと沈黙した。

進むにつれてゴマのようなシルエットが大きくなってくる、同時に黒深と翼は急な空腹感に襲われ、そのせいかうまく飛べずに

ふらふらと真っ直ぐ飛べなくなっている。

砂浜まであと少し、それを支えとして、黒深は誠を水面につけないように飛んでいき、翼がその後ろへと続いた。

「ふ、うおりゃあああつ!!」

「いつ、た……黒深!? 翼も!!」

砂浜を少し進んだところで投げ飛ばされた誠は、黒深に文句を言おうとしたが、その本人も翼も、力尽きたように誠よりも海の方に近い場所で倒れていた。

「2人と……も……」

慌てて2人に近づいた誠だが2人して寝息を立てて眠っていることに呆れ半分、安心半分で2人をもう少し、波に当てられないところまでひきずって行ってやる、

「まったく、ご苦労様」

やわらかい笑みを浮かべた誠の耳に幼い子供の声が届く、

「だあれ？」

そこにいたのはまさに小さな天使と言ってもいいくらいにかわいい少女だった。

改めて出発した外は、思った以上に残酷な現実を運ぶ。

ACT・4 脱出(前書き)

疲れたきつたように眠る黒深と翼、唯一動ける誠は1人の少女、麻奈とその兄と名乗る青年、司と出会う、しかし司の手により翼は黒深と誠と別々にされてしまう。

ACT・4 脱出

空は誰にもおかさねない、不可侵の領域と言う感じがする、だからこそ人はそこへと行ってみたいと思うのかもしれない。

『大空へ

と憧れるのは何故か』より抜粋 天文学部 女学生

沈黙。波が砂を濡らし、海の中へと引き込んでいく音だけがそこにあった。

不思議そうに首を傾げる少女を、誠はただ、どうしようかと混乱するばかりだった。

誠に声をかけた小女は胸にかわいいくまの人形を抱いている。

その瞳に怯えなどというものは無い、あるのは不可解な来訪者への疑念だった。

そしてもう一度、

「だあれ？」

そう聞いた。

混乱した頭で、言い逃れのできる言葉を誠は持っていない、それに加え両隣で眠る黒深や翼の背には漆黒のツバサと純白のツバサが出たままになっている、よく考えればすごく不審である。

困りきった誠が、何か言おうとする前に小女が、疑惑いっぱい、眼差しで問いかける。

「ようせいさん？ それともてんしさん？」

「どっちだと思っ？」

「わかんない、でも……わかんない、教えて？」

自分なりに考えてもわからなかった小女は、素直に聞くことにした。その問いかけの答えは、妖精、天使。そのどちらでもないことを誠は伝えた。

「私？ 私は人だよ、あなたもそうでしょ？」

「うん、麻奈も、人……」

麻奈が頷いたことを確認して、どうにかなったと安堵する誠の耳が、誰かが麻奈を呼ぶ声を聞いた。

どうにかなったと思っただばかりの誠は、冷静な思考を取り戻しつつあったが、麻奈を呼ぶ声に、また頭の中に混乱を招いてしまう。声は若い、それも男の声であるだろうと予測した誠は、この後のことを考え、黒深たちのツバサをしまえないだろうかと考え始めた。

「まな！ まなー！！」

青年の呼ぶ声が小女 麻奈の背後にある林から聞こえてきた。

姿こそないが、もうすぐ現れるであろう方向に誠は、自然と目を向けていた。

麻奈のよく知る声に、振り向いて声を張り上げる。

「おにーちゃんー！！」

「まな！ やっぱここにいたんだね、ん？ 君は？」

林から現れたのは、誠の予想通りに若い男。麻奈の行動からして兄

弟なのだど理解した誠は、それでも警戒は解かずに、男の動きを観察した。

走ってきた麻奈の兄らしき青年が、誠と黒深と翼の姿を見つけて眉をひそめる。

何か言われる前に、とばかりに何か言おうとした誠は、本当のことを言うわけにもいかず、嘘を言おうとした。

「漂流者、とでも言っておきます。」

「おにーちゃん、この人たちあっちから飛んできたの」

警戒したばかりにまともな嘘を作り出せなかった誠は、麻奈の言葉に、嘘を打ち破られてしまった。

焦りを内面に押し込もうとして表情の固まった誠に、固まったままのまことを見た麻奈の兄が一瞬、息を呑んだ。

「あっち？ あっちの方からだって?!」

青年が明らかかな嫌悪と驚愕を表す。そして少し鋭い口調で言う、麻奈の、妹の前だということは完璧に頭から除かれているのか、誠は狂気に満ちたような目を向けられる。

「あそこで何が行われている?! 君たちのような人が何人もここに來ているんだ、知っている限りでいい、教えてくれ」

「何故、ですか?」

「僕は何人もここに辿り着いた人を見ているんだ、皆何かに対して傷ついたり怯えている、どうしてこうなったのか、気になるんだ」

青年の顔はしつかりと誠を見据え、言わなければこの青年に悪いのではないかという錯覚を、誠に与えた。

だが誠は確証がないことを言うのをためらう、苦しい言い訳だとわかっていながら誠は話題をそらさせる。

「その、他にここに辿り着いた人はどうなりましたか？」

「あ……そうだったね、彼らを見たら信じられるかな？」

意外にもすんなりと引き下がってくれた麻奈の兄に若干ありがたいと思い、誠はつい、いつもの癖を出してしまう。

「ええ、すいませ……」

ごとと鈍い音が誠の後頭部から響く、殴られたのだ、と誠が気付いた時には視界がゆがんでいく、そして倒れる際に見えたのは怯えた顔をした麻奈と、おぞましいほどの笑顔を見せる“まな”の兄だった。

×××××

背景のない、真っ黒な空間の中、子供が一人、大人の男女がいた。

人物の周りは、淡い光で薄く包まれていた。

子供は、目に大粒になるだろう涙を溜め、つまずきながらも、一生懸命に走る。

追うのは遠くに立つ女の方へと向かっていく男。

立ち止まりもせず進んでいく背中に、子供がすがりつくように叫んだ。

「お父さん！ 待ってよお父さん！！」

幼い子供が父親の背を追いかけて走る、父親は呼ばれたことに対して立ち止まり、振り向いた。

「何だい、翼？」

優しい笑み、幼い子供である翼は、それを見て何かを感じた。子供ながらに、何か壊れていってしまうような、そんな錯覚に襲われる、だが翼は言わなければいけないことがあった。

それは、子供だから聞ける、純粹とも言える問いかけ。

「どうして、どうしてお母さんを置いてっちゃうの?!」

黒い風景の中、翼の後ろの方に現れた薄い明かりに照らされながら、母親が泣いていた。誰が原因かと言えば優しい笑みを崩さず、目の前で壁のように立つ父親、原因は何か、翼はそれを聞くために追いかけていた。

「置いていくんじゃない、それに亜佐美とは・・・た」

翼の耳にノイズが混ざる、聞いてはいけない、思い出すな
そうだ、俺は何も知らない、何も聞いていないんだ

「祐樹、行きましょう」

淡い光が、女の顔を隠す。

見えない人が連れて行く、祐樹を、翼の父親を、その瞬間翼は祐樹を連れて行ってしまふ人へと体当たりした。

それは、あっけなくよろけ、しりもちをついた。

「杏！ ガキがあっ！！」

そう言った祐樹が翼を見る目は翼の知っていた優しい笑みでも、怒ったときに見せる少し釣りあがった目でもなかった。

ただ、殺意と憎悪と嫌悪がこめられていた。

×××××

「ひっ……あっ……うっ！！」

嫌な夢だ、今更になって思い出すなんて 翼は体中で冷や汗をかいていたのに気づいて不快感に顔をゆがめる、ここはどこだ？ 首を動かしてどこにいるのかを確認しようとしたが見えるものはない、翼の見るそこには、ただ闇があるだけだった。

翼自身覚えているのは、砂浜について倒れたというところまでだったため何があったと言われても何もわからない。

思い出すのも億劫だとばかりに、溜め息をついた。

「そうだ、黒神と浅葱は……」

体が動かない、いや、動かないというわけではない、ただ何かに拘束されて身動きを制限されているのだ、翼が身動きをするたびに自らの身を拘束する何かが軋んだ音を立てる。

かなり古いのか、拘束しているもの的一部分が裂けるような音まてしている。うまくすれば引き千切ることができるのではないか、という考えが翼の頭をかすめる。

そうとなればすぐに実行だと翼は、決心した。

「やってみるか」

息を軽く吸い力を込める、拘束具が軽く軋む、二度目、また新しい、別の一部が千切れる。

三度目、右腕の拘束具が千切れる、そして四度目、力を込めようとした翼の視界が、闇の黒から、何があつたのか知らないまま真っ白になった。

「おきた……？」

急に入つた光によつて目を傷める翼は、誰かが真つ暗な部屋の電気をつけたと知る。

光が目には焼きついたまま、視界をうまく確保できない翼は、耳を済ませて声を聞いた。

それはかわいらしい小女の、麻奈の声だった。

「ねえ、おきて！ おきて！！」

麻奈が翼の頬をぺちぺちと叩く、どうやら敵意はないらしい。翼は、その声に従い素直に反応を返してやる。

「起きたの？ よかつた……おにいちゃん、逃げて」

麻奈は手に持つた鋭い輝きを放つメスで、翼の拘束具を危ない手つきで切つていく、そしてすべてを切り終わった頃に、翼の目も光になれた。

そして視界の戻つてきた目で麻奈を見る、その目には涙がいつぱいにためられていた。メスを持たない左手で抱いているくまの人の形のお腹の辺り、麻奈が抱いている部分がへこんでいる。

何かを恐れている？ 翼はそのことを直感的に理解すると、麻奈へと安心させてあげるためにも笑いかけた。

それが少しでも気休めになればいいと思つて見せた笑みでも、麻

奈を安心させられた。

「わかった。でも、君はどうするんだ？」

「麻奈は、いいの……司おにいちゃんがあたしを」

「あたしを？」

つい口を滑らせてしまった麻奈は、自らの失敗に口をつぐんだ、さらに追求しようとした翼に早く逃げるようにすすめてきた。

「自分はいいい言葉にしたものの、麻奈は何か怖いものから逃げるように走っている。」

そして翼は外まで案内すると走り出した麻奈の後ろを早足で歩いて、ただ、気がかりだったのは黒深と誠のこと。

今、離れ離れとはいえ今のところ頼りにできる人間といったら翼を知る、黒深と誠だけなのだ。

「おにいちゃん、こつち！」

そう考えながらも麻奈の案内により、ありえないほどに広い家の中を進んでいく、いくつ角を曲がったのかもわからなくなったころ、また麻奈が次に曲がるべき角を指差すがその角のところから影がこちらのほうへと向かってくるのを見た。

麻奈が足をすくませ、走るのをやめた。

現れたのは人のいい笑みを浮かべた青年、その顔とまとう白衣、そして手に持っているメスにはまだ乾いていない血が付着していた。

翼は、麻奈の尋常ではない怯え様に、青年を見た。

「司、おにいちゃん……」

少女の顔が恐怖で彩られる。ここまで恐れているのだから何かあるのだろう、しかし兄と言う限り手出しはしないほうがいいのかも、考えた翼は、一応であれ状況を見極めることにした。

麻奈は司を見たままで、まるでその男は、何か重大な罪を犯した人だと言わんばかりの目で見ていた。

「だめだよ“まな”こんなことをして」

「司お、にい、ちゃん？」

司の声を聞いた麻奈の目が、恐怖のあまり目いっぱい開かれる。

司は人のいい笑みを崩さずに、麻奈の細い首に手をかける、それに力が加わり麻奈の喉からかすれた呼吸音が漏れだす。

さすがに危険を感じ取った翼が司の手を振り払い、咳き込む麻奈を背後にかばった。

そして睨みつけ、逃げる算段を立て始めた。

「お前！ 何やってんだ！！」

司の顔が一瞬きよんとしたものになる、そして真顔でこう言った。

「何って、悪い子には“お仕置き”が必要でしょ？」

怖い、司の手をはじいた瞬間感じた怖気、人のいい笑みを司は崩さない、それに対して翼は背中に氷の塊でも押し込まれたかのように鳥肌が立った。

司から得体の知れない何かを感じ取った翼は、あえて正面から突っ込み、司を力強く押した。

よろけたのを見たと同時に、麻奈を半ば担ぐようにして走る。

早く逃げなければいけないということをさらに実感させられ、翼

は少し焦った。

「麻奈、案内を頼む」

「う、うん、こっち！！」

翼の突飛な行動に驚いた麻奈も、すぐに外に出るための案内に専念する、後ろから死の宣告でもするような靴音が響いてくるがそんなもの、2人の耳にはもう入っていないかった。

ただ外へ出なければという本能がそうさせているのだ、そして右へ、左へと走っているうちに出口である扉が見えてきた。

もしこれが翼1人だったら、こんなにも早く辿り着くこともできなかっただろう、翼は内心で麻奈に感謝すると扉を開くと同時に、潮の香りを感じた。

「あつぶなかつたあ……」

「だめよ、おにいちゃん、早くあつちのほうへ！！」

麻奈の鋭い声が響くと同時に翼は飛ぶ、家の中だと狭いので広げられなかった純白のツバサを強く羽ばたかせ、麻奈の示す林のある方へと飛んでいく。

もう後ろから司は追ってこない、いや、こちら側へと来ることができないかのように外へと駆け出した足を止めている。

かすかに見えた司の瞳に宿るのは確かな狂気、今見たことを忘れるように翼はかぶりをふった。

忘れよう。あんな恐ろしいこと忘れてたっていいだろう、翼は恐怖心を打ち消すかのように麻奈に示された方へと飛ぶ。

「おにいちゃん、もういいよ」

風を切る音が声をとどころで分断してしまつが翼は、しっかりと耳を澄ませて麻奈の言葉を正確に聞き取った。

綺麗なお姉さんとおどおどしたお姉さん、か……おどおどした方は浅葱か？

なら、綺麗なほうは？ 誰なのだろう。

綺麗といわれて気にならないはずのなはいばかりに翼は、どんな人物なのか想像する。

「あ、おねーちゃん!!」

林の少し開けたところに見えた黒い2つの点に向かって、麻奈が手を振る。するとその2つの点のうち1つが手を振る、それは近づいていくにつれて点が、人の形になっていく。

ぼやけた輪郭がはっきりとしてきて、手を振った方が誠だとわかった。

ただ、その隣にいたのは翼の見知った人の面影を持つ、しかし一目では誰かわからない瘦身の少女だった。

ちよつと変わったただけで見えないところも見えてくる、それは、誰？

ACT・5 合流（前書き）

誤字、表現がおかしいところを修正しました。

ACT・5 合流

空？ そんなの知らないよ、空なんてどうせ触ることもできないくせに人は求めるんだ、だから、知らない。

『大空へと憧れるのは何故か』より抜粋 外が嫌いな子供

あれは誰だ？

翼はそれを確認するためにも飛ぶ速度を上げる、その隣を遅れることなくついてきている麻奈はすごいと翼は素直に感心した。

飛ぶ先は、林の中でぼっかりと円の形で切り取られている場所、誠はすぐさま麻奈と、翼のほうへと近づく、

「麻奈！ 大丈夫だった？」

「うん、大丈夫、言われてたおにいちゃん、連れて来たよ」

誠に心配された麻奈は、少し恥ずかしそうにすると隣に立つ翼を見上げた。

しかし誠は翼の姿を見ると同時に驚愕に固まった。何だ？
様子がおかしい、誠は翼をじっと凝視している。

まるで古い友人に出会ってそれが一瞬、誰だかわからなくなって誰だと聞いてしまった時のような感じであった。

確認を取るためにも、翼は誠を軽く警戒しながら呼んだ。

「浅葱？」

「え？ や、やっぱり翼？」

戸惑う誠は視線を泳がせる。一体俺の何が違っているんだ？
理由がわからず、翼は素直に聞いてみることにした。

「何かおかしいところでもあるのか？」

自分では気づいていないのだろう、誠は翼のおかしいところを指摘した。

まず始めに指摘されたのは体のこと、翼が誠に指摘されてやっと自分の体を見るとがりがりな状態になりかけていた。

体から軽く骨が浮き出しかけている、前はもっと骨が浮き出さない程度には筋肉も肉もついていたはずなのに、筋肉は残っていても必要最低限の肉までそがれていたのだ、そして次に指摘されたのは顔のことだった。

翼はそれを言われたと同時にぺたぺたと顔を触るが何もおかしいところはない、自分だとわからないことらしく、素直に翼が誠に聞いてみると顔におかしな紋様が浮かび上がっているようで、それを翼にも見せようと誠が砂の地面に書いてくれる、それはまるで炎のような紋様だった。

それが何を意味するのか考え込む。だが、まだおかしいところ、気づいていないことがあるらしく、誠が指摘する。

「他に何かおかしいところが？」

「まだ気づかないの？」

誠に言われるが翼自身思い当たることも何もない、服の上はなく、ズボンだけというところではないらしくおかしいところを探そうとうなっている。痩身の少女が言った。

手を頭の後ろで組んでいる痩身の少女は、つまらなそうに地面の砂を蹴っている。

少女は、無視されることが嫌いなのだ。

「気づかないなんてとことん馬鹿だねえー、くくっ」

頭の後ろで組んでいた手を解き、腕組みをして人を小ばかにするような笑みを浮かべた痩身の少女は、そこまで言うと言つて翼を真正面から見据えた。

黒と言つより茶色に近い瞳、挑むような笑い、あまり手入れがされていないように感じられるくすんだ黒髪。そして何より痩身の少女を特徴付けているのは、首のまわりにまきついたように見せる蔓つるのような刺青、翼は全ての特徴を総合して誰なのかということを考えたが、候補に挙がった人物はただ1人。

「お前、黒神か……？」

「せーかーい！ てか気づくの遅っ！！ そんなに別人に見えんのかなあ？」

手のひらを見て、腕を見て、体を見て、別人に見えるようなところを探す黒深だが、本人自身他の人から見ただけかわっているのか自覚はないようで、いたって自然だともいうようにしている。

体が少し軽いくらいだとジャンプしてみせた。

「うーん、ちょっと腹がへこんで顔が少し細くなっただけなんだけどなあ」

細くなつた腕を触りながら言う黒深に翼は、

「それだけで十分だろ」

そういつて軽く額を押さえる翼に失礼だと思つた黒深が、何か言おうとしたとき誠にさえぎられる。

「これからどこに行くの？」

今一番決めなければいけないこと、行く場所が決まらなければ何を
してどうするのかさえはつきりしてこなくなる。

はつきり、の範囲にも問題はあがあるが、誰もそこに突っ込みをいれ
ない。

「その前にさ、ここってどこなわけ？ 麻奈、知ってる？」

気づけば少し離れたところから黒深たちの様子を見ていた麻奈に、
黒深が問いかけると答えはすぐに返ってきた。

「ここは静岡の方の“囲い”の近くにある島だよ」

「“囲い”だつて?! あの世界規模の大地震の後に出たあれか!

「？」

「そう」

“囲い”その言葉は世界各地で地震が起こったため、どういう原理
でか海底より現れた巨大な土の塊、大陸の周りを囲うかのように現
れた隔たり、船が通れるほどのすき間はなく聳え立つ土の柱は海路
という貿易手段を奪った。

壊そうとするたびに災害に見舞われる国、壊すことのできない巨
大な壁、そのため貿易の手段は全て空路へと切り替わった。

そのかわりにエコ燃料の飛行機しか使えないため、そんなに大量
に便を出すことはできず、ほとんどの国は自給自足になった。

一部の国はそれによって、一時期とても危険な状態に陥りもした。
しかしそれぞれの国は、本来の自活能力を取り戻し、時間はそれな
りに要したが、危険ではないほどには立ち直った。

今ではほとんど外とのつながりが必要としなくなっている。

人類としての凶太さを実感しながらも、その原因を作ったものに
対してつけられた名前はそのまま“囲い”となった。

黒深たちのような成人前の子供でも、それは当たり前前の常識だった。

「“困い”か……せいじゃ外国じゃないわけなんだ」

黒深から安堵の溜め息がこぼれる、それは誠や翼も同じようだった。“困い”ができてからの外の様子を知ることとはあまりない、外国語の授業もなくなっているというのに外国に行ってしまったら、途方にくれるところだった。確認ができた分、黒深は安心した。

しかし“困い”と陸の距離を考えると正確な距離は測られていないが、かなりの時間を要する距離はある。さすがに泳いでいくに辛いであろう。

「うん、でも陸に戻るとき誠おねえちゃんはどうするの？」

悪意のない純粹な疑問、だがその質問で誠は気分が沈みこむのを感じた。

片翼で飛ぶことをすればバランスを崩して落ちてしまうだろう、そうならば両翼そろって飛べる黒深と翼の邪魔になってしまう。それだけは避けなきゃ。強く唇を引き結んだ誠の様子を、隣で見ていた黒深が誠の背中を軽く叩く。

「足手まといはごめんだー、とかって思ってたかったりしない？」

本人自体はなんとなくの直感で聞いたのだろうが、黒深の言葉に誠は驚いた。

本心をそのまま言い当てられてしまえば驚くしかない誠は、すぐさま笑顔を作り心配させないために言葉を発した。

「思っていないよ」

「ふーん？ んじゃいいけど」
「黒神、お前何聞いてんだよ」

失礼なやつだな、と言うのも忘れずに黒深に言う、それを見た誠はつい笑ってしまふ、こんなときでも変わらないいつもの応酬があるということが嬉しかったのだ、そのことが気持ちを緩ませ透明な雲が誠の頬を伝っていく。

突然の涙に、ぎよっとした黒深は、慌てて声をかける。

「誠?! な、何泣いてんの!？」

「浅葱?!」

「おねえちゃん?」

いきなりのことで驚いた3人は何があつたのかと固まる。

だが誠の瞳から流れる涙は止まらない、どうしたらいいの悩む3人の前で誠は泣いた。

いち早く凝固した状態から戻ってきた翼は、黒深の腕を掴んで歩き出した。麻奈も、その後ろへと飛び跳ねながら続いた。

「黒神、行くぞ」

「えっ……え?!」

「いこっ! おねえちゃん」

気を利かせようとした翼と麻奈は何か声をかけようと迷っている黒深をひきずって林の中へと消える。

一方、納得がいかない黒深は、誠の背に、一言言葉を投げかけると、そのまま引きずる翼にわざとらしく力をかけた。

×××××

「祐樹、祐樹はいるか?!」

老人のしわがれた声が白い部屋へと響く、そこにいるのは数名の白衣を着た研究員たちだった。

その中から女性と一緒に話していた祐樹が、顔を上げて老人の方へと向いた。

ミーティングはすでに終わっているため、私的な会話だったのだろう、一瞬にして不快な感情を消して笑顔にする。

「何ですか?」

「ここに運ばれた中で、高校生が何人いたかわかるか?!」

今にもつかみかからん勢いで言う老人に祐樹は、驚いたようにすると女性の方にそのことを聞いてみる。

すると女性は、早くもまとめていたらしい名簿の統計欄を細い指でたどる。その薬指には金色の指輪。

「まだ全員というわけではないけれど、今のところ10人ほどだったわ、それがどうかしたのですか? お父さん」

「杏……いや、お前は知らない方がいい、祐樹、来い」

皆がいるところでは言いにくい話らしく老人は、場所を変えるべく歩き出す。

祐樹は杏に軽く別れを告げ、全てが白い廊下を歩いていくと白い廊下に同化したような白い扉から、うめき声やら叫び声やらが聞こえてくる。

老人と祐樹は気にせず歩き「立ち入り禁止」という、市販のステッカーが張られた部屋へと入る。

部屋の中にはたくさん紙が散らばっており、それを一つずつ見てみると人の顔写真と生年月日や、病歴など事細かに記されている。

個人情報保護法も何もないな。

祐樹はそう思いながらも、個人情報の載せられた書類を落ちていく分だけでも拾おうとするが、老人に止められる。

「いい、それよりも座れ」

すでに椅子に座っている老人は、祐樹にそのすぐ側にある椅子を示す。

祐樹が座るまで待ち、座ったのを見てから天河は、重々しく言葉を発した。

「杏の前夫を覚えておるか？」

何をいきなり。祐樹は眉をしかめた。

祐樹は、天河の意図がわからないが、とりあえず答えることにした。

杏がいなくてよかった。とも祐樹は思った。

「ええ、確か典雅、と言いましたね。お父さん、いえ、確かあなたと同じ読みでしたからね」

「典雅と天河、か……確かに似ておるな、いや、それどころではない」

真剣な眼差しを向けてくる天河の視線を、真っ向から受け止めた祐樹は、珍しく天河に焦りが浮かんでいることを理解した。

何がそんなに天河をあせらせているのか、気になった祐樹は天河に続きを言うように促した。

恐らくそれが本題であろうと覚悟しながらも。

「杏と典雅が子をなしたことを、お前は知っているか？」

「え?! 杏と、子を?」

知らなかった。それを表情に出して驚きを表す祐樹に、天河は続きを話す。

何か、嫌な予感がする。祐樹は直感でそれを感じ取った。

「杏はまだ小さいその子を、典雅と別れる際に親権ごと典雅に渡した。」

それが何だ、何の関係があるというんだ。祐樹は心が苛つきにざわめくのをおさめながら聞く、今ここで天河が言うということは、何か関係があるのだと自分を納得させた。

そう納得させる為に祐樹は、無理やりにも感情を押さえ込んだ。

「それが、どうかしたのですか?」

先を聞いて、後悔してしまうだろうと思いつつも、聞いてしまった以上後戻りはできない。

祐樹は、ただ天河の次の言葉を待った。

天河が重苦しく吐き出した言葉は、祐樹の嫌な予感通りに重く、現実味を持たせていた。

「その子がここで“廃棄処分”されたということが判明した。」

重い溜め息、しかし祐樹の心は今や穏やかではなかった。

廃棄処分したということはこの下にある“処分場”へと落とされたということだ。

あそこから這い上がるなどほぼ不可能だろう、たかが杏の前夫の子供、ならばそんなに絶望感に襲われることなどないはずなのに、祐樹は絶望していた。

そのさまを見ていた天河はさらにもう一つ、祐樹の知らないであろう事実を報告した。

「杏から聞いた。お前には前妻がいてその女と、子をなしていたよ
うだな？」

嫌な予感もここまでくれば外れることなどしない。

天河は、少しためらうがその迷いもすぐに消えたようで、祐樹の
考える次の嫌な予感の中させた。

「その子も“廃棄処分”されたようだ」

結局皆は、自分と、他人の世界に関わりながら生きるしかないんだ
。

ACT・6 “ 困い ” から陸へ・・・(前書き)

誤変換を修正しました。

ACT・6 “ 困い ” から陸へ・・・

空とは地上に住む私たちとは正反対、誰もおかすことができないの、なら憧れるのは当然でしょう？

『大空へと憧れるのは何故か』より抜粋 若き

女子中学生（自称）

嘘だ、何故あいつがここに ？！

今や祐樹の心中は穏やかではなかった。杏と結ばれるために縁を切った前妻との子供、それでも祐樹にとっては息子に当たる。その息子が処分されたことに少なからず驚き、心のどこかで絶望していた。

「それで、あいつ、翼はもう死んだのですか？」

「いや、まだ死亡確認はされていない、杏の方の子供も、だ」

「そうですか……」

溜め息をついた祐樹は、何故天河が自分の娘を抜かしてまで自分を呼んだことを理解した。

杏自身に、研究の責任以外に他の責任を負わせるわけにはいかないからだ、だから祐樹は杏の代わりに呼ばれたのだ。

口が堅く、なおかつ杏に近いものとして。

「それで、杏の生んだと言う子供の名前はなんというんですか？」

「それはな……」

×××××

「それにしても、本当に黒神か？ てまだ聞きたくなるな」

翼が黒深の方を見て、痩せる前の黒深の姿を思い出しているようで、そんな言葉が口から出る。

しかし根本的なところは変わっていないのでなんとなくわかる、といった感じのようだ。

どこで調達しなおしたのか、大きさの合わない制服を着ている黒深は、そんな失礼な視線を無視して、麻奈と話している。

他愛のない会話だが、暇を嫌う黒深としては楽しいものだった。

「麻奈はどこに住んでるん？」

「京都だよ、おねえちゃんは？」

「うち？ ちはー……まあ、色々……かな？」

歯切れの悪いセリフを口にした黒深に、麻奈が頭上に疑問符を浮かべる。

それを見た翼は助け舟を出そうと口を挟む、

「こいつの親は各地を転々としてるみたいなんだ、だから特にこれといった場所はねえのさ」

そのことを翼が言い終わると同時に麻奈は、黒深を泣きそうな目で見つめた。

一つのところでずっと住む、ずっとそこにいる。それが常識だった麻奈にとっては、意外な返答だったのだ。

「どうして同じところにいられないの？」

「親の都合だし、それにさ、いろんなところ回るってのは結構楽しい

もんだよ、楽しいし、な？ あー！ まったく……翼、てめえ余計なこと言つなよな！！」

余計に話がややこしくなる、黒深は強く地面を蹴って翼へと砂をかける。

助けようと思ってやったことを否定され、怒られたので翼の機嫌は一気に悪くなった。

人間理解されないと、自然と人を嫌ってしまう時があるのだ。翼は、拗ねたように軽く砂を蹴飛ばした。

「いいじゃねえか、本当のことなんだしよ」

「だからって……」

「あははは！！」

ここではない、林の、誠のいた方から笑い声が聞こえた。

声が聞こえたと同時に黒深は翼を殴ろうとしていた手を止めて苦笑した。そして小声で

「んな程度のことですんで笑ってんなよ」

そう呟いた。それは、至近距離にいた翼でさえも聞き取れたかどうか、というくらいの小さな呟きだった。

戻ってきた誠の顔はどこかすつきりとしていて、前よりも頼もしく感じさせた。

黒深たちが誠の方へと近づくと誠は、これからについてのことを話し出した。結局後回しにされてしまったことだが、そこが一番重要なことなのだ。

まず、これから静岡 “ 囲い ” の方から静岡へと向かって本当にいいのかということから。

「つつたつて、このままつてのもだめな気がするんだよな」

とりあえず円になって座る4人の中で黒深が言う。会話をしながらも、黒深の手は、砂を指でどかしながら小さな城を作っている。

その隣で、麻奈も便乗して城作りを始めた。

「行かないと私たちは死んだままになる、それはそれで、嫌でしょう？ 翼は、特にそうだよ、お母さんを心配させちゃうしね？」

話題を振られた翼は少し考えるように空を仰ぐ、翼には母親しかいない、父親の方は出て行った。と聞いた誠は、心配そうに聞いてくるが翼は頭を振った。

恐らく大丈夫だ、ということだろうと解釈をした誠は、次に決めるべきものへと話題を変える。

次に決めなければいけないと誠が判断したことは他の、外に出た人についてのことだった。

薬の散布された範囲があれだけ広ければ、たくさんの人を収容していたあの施設でも足りないだろうと考えれば他にもまだ施設はあつて、そこから抜け出した人だっているのではないかと考えるのは普通だろう。

しかしそのことについては、麻奈が口を開いた。

「司おにいちゃんがたまに電話しているのを聞いたよ。でも、外に出た人たちはおにいちゃんみたいな人に捕まっているのがえつと、
“さんわり”くらい、だつて」

「三割？ なんだ、結構緩いじゃんか」

それならどうにか、と考えて笑う黒深だが、

「おにいちゃん他にも、確か“外に出た人の半分は突然死したの

かい？”て、言ってた……」

その時の司の様子でも思い出したのか、くまの人形を強く抱きしめる麻奈の言葉を聞いて3人はその言葉の意味を考えた。

“突然死”外に出れたとしてもその半数が死んでいる、それを考えればここにいる全員はいつ死んでもおかしくない状況にいる。そういうことだ。

怖い、ツバサが生える前の、あの死に誘われるような感覚を思い出してしまっ、そう、あの時ここにいる4人は一度死んだのだ、そして運の良いことに生き返った。

もし生き返れなかったら？ そうしたらきつとただの 失敗作”として処分されてしまっただけだ、ならば今生きていることは奇跡と言ってもおかしくはないだろう。

ただ、その奇跡はたくさんところで起きている、ということが現実味を薄めているが。

考えれば考えるほどややこしくなるような話。

一旦黒深が、誰だって簡単に思いつけるようなことを言った。

「なら俺らはいつか死ぬわけか？」

「わからない、でもどうにかしなければいけないことが増えたね」

「そうだねえー……こうなりやとつと陸の方へ渡って皆の存在を知らせるに限るね」

「でも……」

早速飛ばうとツバサを出した黒深に対して、誠は居心地悪そうにしている。

「ツバサがないことならうちが連れてくよ？」

「そっじゃなくって」

心なしか浮かない表情をしている誠が、次に口にした言葉はこうだった。

「このままだと見世物にされちゃうんじゃないのかな、て……」
「あ」

そういえば考えていなかった、と、黒深と翼が固まる。

麻奈は、見世物の意味がわからないのか疑問符をいくつか浮かべて、成り行きを見ることにしている。

よく考えればわからないでもないことだがすっかり失念していたらしい、ただし今までの間に何もなければそのくらいわかつただろう。

その何かとされるツバサを持った人たちとの出会いによって、それが普通と取るようになっていた黒深と翼にとっては思いもかけないことだった。

そうなるど事件を起こした人物を探す以前に、人の好奇心の的にされてしまう、そして身動きが取れなくなるのはなんとなくでもわかることだった。

「でも、ま、どうにかなるさ！ 決意が鈍らないうちに、行こう！」

それでも何もしないという訳にはいかないだろうと思ひ、黒深は、早くも誠をお姫様抱っこをすると、その漆黒のツバサで羽ばたいた。その後ろからは呆れたような顔をして純白のツバサを羽ばたかせる翼と、まだ見世物の意味がわからないのか疑問符を浮かべ続ける麻奈も、薄桃色のツバサを羽ばたかせてついてくる。

4人は静岡へと向かった。

×××××

うるさい。

電話が何度も鳴るので、電話を取れという声が聞こえてきそう、司は耳を塞ぐ、今司がいるのは赤色で染められてしまった元“白い部屋”。

その部屋の中心にある診察台のところに手をつけていた司は、再度鳴る電話に耳を塞ぎ何も聞こえなくした。

まな、まな　！！

そして司は電話を無視することにして、部屋に置かれている血のついていない写真たてを、血のついた手袋で持つ、そこで笑っているのは3人の子供と、2人の大人。おそらく家族写真であろうそれを司は、おぞましいほどの笑顔で1人、ピースをして笑っている少女のところへと指を滑らせ、もう一度いとおしそうに囁く、

まな、と

昨日見た世界と、今日見た世界は違っていた。

ACT・7 出会い

空が何?! 空なんて見上げていたらおのぼりさんに思われるわ!
! でも、落ち込んだときに空を見るとほっとするわ

『大空へと憧れるのは何故か』 上京中の女性

青く果てしのない海の海面をすれすれに飛ぶ影が3つ、 それに加えて3つのうち1つの影と共にいる影が1つ、 遠くから見れば鳥ともとれるその影は、 人だった。

「果てしねーな」

「結構困いから陸って距離があるんだと始めて知ったな」

声の一つは黒深のもの、 もう一つは翼のものだった。

飛び続ける一行は変わりようもない景色、 海を眺めている。
静か過ぎる海に沈黙だけが支配するのをよしとしない黒深が、
誰ともなしに呟く。

「暇だー……」

「おねえちゃんたちお腹すいてない?」

つまらなそうに無駄に旋回をして誠に怒られた黒深に、 麻奈からの問いかけ。 それと同時に翼と黒深のお腹が同時にぐう、 と鳴る。

2人は互いに顔を見合わせて苦笑した。聞いてきた麻奈は、2人のお腹が鳴ったことに笑うと翼と黒深に対して何かを投げる。その何かは見事に円を描いて飛び黒深と翼、互いの手の内に収まった。

ただ、黒深は、片手で誠を支えなければなくなり、少しふらついた。

彩の豊かな箱は、からんという音をたてる硬い材質の箱。箱の表面にはカタカナでアメ、とだけ書いてあった。

他に書かれていることはないかと探した黒深は、その文字以外見つけられず麻奈に確認を取るように聞いた。

「アメ？」

「お腹がふくれるからって、おにいちゃんがくれたの、あげる」

お兄ちゃん、というのは司のことだろう、黒深は冷や汗を流しながら言った。

「なーんか怖いと思ったりすんのはうちだけ？」

綺麗な箱だけど、とは言うがやはり食べることをためらってしまふ、司にひどい目に会わされそうになったことを考えればそれも仕方ないとは思える、そんな黒深を横目で見ていた翼は、飛ぶのをやめずに箱を開け、中からアメを一つだけ取り出した。

黄色のアメを見つめ、少し考えていた翼は、黒深を呼んだ。

「黒神」

「なん……っ?!」

反応を返すために口を開いた黒深の口に、アメを思いつきり投げ入れた。

翼のコントロールにより、口の中へと入ったアメを飲みこむまじと喉への侵入を防いで、息を詰まらせて、口の中のアメを避難させるといふ器用な真似をして魅せた黒深は、激しく咳き込んだ。

そして再度アメを飲み込みかけた黒深は、恨めしい目で翼を見返すが翼は、すでに前を向いてアメを舐めている。

反論しようとしてもまともな返事が返ってこないだろうと思ひ、黒深も仕方なくアメを舐める。

黄色いアメはパイナップル味らしく、パイナップルのすっぱさが口いっぱいになり、おいしさについ笑顔になる黒深に、翼は単純なやつだな、と呆れたような笑いを見せた。

それが気に食わない黒深は翼を殴ろうとするが、下で抱き上げた状態からぶら下がった状態へと状態を変えた誠が、落ちかけたため結局失敗に終わった。

比較的何事もなく順調に飛ぶ3人は、誠の声で遠くに陸が見えることを確認した。ツバサが生えてからの4人は、身体的能力が上がっていることに気がついた。

近視だった黒深は遠くまでよく見えるようになっていた。翼や麻奈、誠もそうだ、他にも筋力がついていたり頭がさえたりといいことばかりだった。

しかしその半面でお腹がすきやすくなっているのか、あまり時間が経たないうちに誰かしらがお腹を鳴らしていた。

少し速度を上げて飛ぶ3人に、誠は気づかれないようにうらやましそうな目でそれを見ていた。その目には羨望にも近い感情が見え隠れしていた。

3日間、続けて飛んでいる3人だったが何故か疲れず、眠くもなく、といった状態だった。下にいた誠は少し疲れていたが飛んでいる3人と違い、眠ることがきるので、特に問題になる

ほどではないようで、口に出すことはしていない。

「これでもし方向ずれてたら笑ってやる」

またアメを舐めているのか黒深が話す。この3日間でほとんどの会話は黒深から発生している、それに応じている翼や麻奈も恐らく暇なのだろう、音といったら時折海を跳ねる魚の音くらいで、静かすぎるのだ。

静寂を好む翼や誠はいいとして、麻奈は、やはりお話をしたい年頃。そのため黒深の会話に積極的に参加していた。

「夜の間も飛ばうといったやつが悪い」

「でもそのおかげで早く着いたんだよ？」

提案は黒深からでそれを承諾したのは全員だ。

夜の間はどこにも光がないので声を出し合い、居場所を確認しつつ進んだ、しかし方向に対しては不明だった。確認する手段がなかった。ともいえるが、確認する為のコンパスも何も持っていないかったので仕方がないと処理された。

「ん？ ああーっ!!」

唐突に響いた黒深の大声に驚いた翼は、真っ先に黒深の方へと顔を向ける。

ばかりと口を開けて呆けていた黒深は、すぐに正気を取り戻し険しい顔をして進行方向へと顔を向けた。

さすがにおかしいと海面を眺めていた誠が聞いた。

「どっしたの黒深？」

「やばいかも……」

何かを恐れる黒深の言葉に真正面を向く、距離はまだかなりの間があいていたが、その先にあるのは映画でしか見ることでできないような戦艦、おまけに甲板に出されている、これもまた映画で見られないような大砲が黒深たちを向いていた。

黒深は後ろに何かいるのではないか、という考えを持ってこの事実を否定しようとしたが、背後には何もなく、魚が軽く跳ねていった。

後ろを向いて確認をしていた黒深と誠は、そこから前へと視線を戻すと丁度大砲から煙が上がったことに気付く。

「黒神っ！」

いち早くそれに気づいた翼はまず始めに大砲の餌食になるであろう黒深へと叫んだ。

「わかつ、てる！！」

距離が開いている分避けるのには楽だった。しかし事態はよくはならない。

戦艦は確実に空を飛ぶ黒深たちを狙っている。

証拠に、避けた黒深たちの背後で、水飛沫が上がった。

黒深たちの進む先には戦艦があり、戦艦は黒深たちの方へと進んでいる、距離が近くなればあたりやすくなる。

馬鹿でもわかるようなこと、それでも戦艦をすり抜けなければ陸につくことはできない、思考を一旦停止して黒深が冗談を言う。

「制服でも脱いで白旗あげますかー？」

ぶかぶかだからもう着れないし、と制服のボタンに手をかける。
それを眉に皺を寄せた翼が、やめろと言った。

「気持ち悪いだろうが」

「あんだと?!」

こんなときにどうして喧嘩してられるのか、麻奈と誠がこっそりと溜め息をつく。

その間にも戦艦との距離は縮まっていく、砲撃を巧みに避けながら口喧嘩を止めない黒深と翼は大声で怒鳴りあう。

互いにストレスが溜まっていたかのように口喧嘩は急加速していく。

「いつもいつも人が気にするようなことばっか言いやがって!」

「お前こそうるさいんだよ」

「うるせえ黙れ!」

「黒深! 翼!! 今は喧嘩してる場合じゃ……」

『誠は黙ってる!』

喧嘩をしている黒深と翼だが見事に声が重なる。

会話をしている間にも砲撃はやまないのだが、2人とも一度も攻撃を受けることなく戦艦との距離を縮める。

誠は2人を説得するのを諦めて戦艦との距離を推測した。

およそ200〜300mくらいだろう、それなりに近づいたた

め大砲を撃っている人までしっかりと見える、戦艦に乗っている人も、だった。

戦艦の乗組員は距離を冷静に測っていた誠とは違い、双眼鏡を使って、対象である人間を確認した。

「なんだ、あれ?! 子供じゃないか!」

「おい、聞いていないぞ!?!」

少なからずの動揺が戦艦内を震撼させる。

砲撃手も、その姿に動揺を隠せず、上官に一喝を受けてやっと自身を取り戻したくらいだった。

「だいたいね!! あんたは人としてもっと人の気持ちを考えろって!の!!」

あと100mほどで黒深たちは戦艦と接触する、そんなときになってまで2人は喧嘩を続けている。

止めようとしていた誠は、砲撃を避けるため黒深が乱暴に飛んで避けるため目を回している。

あと50m、そこまで来て黒深と翼は喧嘩を止めた。譲歩案を出してきたのは黒深だった。

「一時休戦、また今度決着でどう?」

「賛成、麻奈、大丈夫か?」

休戦案に肯定した翼が一番体力がない麻奈へと声をかけた。

すばしっこく飛んで避けていた麻奈は、いちいち止まって返事をすることをせずに、大丈夫とだけ言って飛んできた砲弾を避け

る。

あと20m、10m、と距離が縮む、黒深たちの速さに対応しきれない船員たちは、子供、ということに戸惑いながらも狙いをつける。

あと5m、3m……。

ゼロ。

「避けてっ!!」

声が聞こえるか聞こえないか、といったところで麻奈の影が戦艦の右側をすり抜けていく。黒深や翼は、左側の方をすり抜けたため麻奈が何を叫んだのかわからず、急に姿を消した麻奈に驚く。しかし止まっていれば狙い撃ちにされる、そう考えた翼と黒深は早く戦艦を背にするために加速する。

飛燕のように飛んでいく黒深に付き従うようにする白いツバサは、それに負けじと加速した。

「麻奈、大丈夫かな……」

「早く抜ければいいんだ」

おお、思ったより頼もしいセリフ。胸の中で感心しながら黒深は前を向いて飛ぶ、あと少しで戦艦を抜ける、そう思った瞬間、強烈な風が黒深と翼、黒深にぶら下がりながら目を回している。誠までも吹き飛ばした。

「ひよわあっ?!」

「なっ、何だ?!……っ!!」

逆向きに吹く風に対して抵抗したときのような衝撃、衝撃からすぐに体勢をとりなおした3人は烈風の正体を見る。それは明らかに敵である戦艦を撃破し、人の命を奪うためにある砲台。

戦艦の横に取り付けられた砲台の大きさに黒深と翼は、一瞬飛ぶことを忘れそうになった。

「黒深、翼！ 上へ！！」

目を回していた誠がはっ、となり叫ぶ、反射的にそれに従った2人は急上昇する。

髪の毛が後ろへと、引っ張られるように流れていくが気にしてもいられない、上へ、上へと昇り、上がり戦艦の高さを越えると即行で陸の方へと飛ぶ、すぐには旋回できない戦艦を背にした頃に麻奈が黒深の隣に並んだ。

額には汗が浮かんでいるものの、どこにも怪我をしたような痕はなかった。

黒深と誠、翼に麻奈が怪我もせず合流できた。そのことが、4人を力づけた。

「あと少し、だねおねえちゃん」

1人にされて怖かったはずの麻奈は気丈に笑う。

その笑みに、麻奈よりも年が上の黒深たちは、自分たちが弱気になってはいけないと強く感じた。

「そうだね、後ろのに追いつかれないよう、もう少し速く飛べる？」

黒深はそういいながらも飛ぶ速さをさらに上げる、今なら車以上の速度が出ているといってもおかしくはない。

急なペースアップに翼は、遅れながらもついてくる。

「うん、できるよ」

飛ぶ速さがあがっているというのに麻奈は、頷き、それを苦にする様子も見せずに黒深についていく。

後ろで砲台が煙を上げて弾を飛ばしてくるが速さは黒深たちのほうが上がった。

戦艦から距離が離れていくにつれて陸が近づいていく、今まで黒い点でしかなかった陸は、少しずつ船の形と、建物の形をはつきりとさせていった。

そんな時、黒深がふざけたような口調で聞いた。

「ではしつもん、静岡に知り合いがいる人？」

「うーんと、わかんない」

麻奈が答えると続けて誠が、残念そうに告げた。

「多分、いないと思います。」

誠が言い終わることを確認してから翼が報告する。

「いる、お前は？」

「いない、で、その知り合い、てか親戚はどこにいるわけ？」

4人の中で唯一知り合いがいるのは翼だけだった。

いるだけ十分、黒深がその知り合いの居場所を聞く、一時的にそこへ匿ってもらうつもりらしい。

信頼ができるかということも翼に聞いた。返事は黒深にとって都合のいいものだったが翼の顔色はさえない。

「説明は苦手だ、ついてきてくれ」

自ら先導者を買った翼は思い出そうと考え込んでいる、歩きや自動車でならわかる道も、手段が変わるだけで全然わからなくなるものだ。

だから誠たちはあえて口を開くことはしなかった。それを見習って麻奈も口を閉ざす。

しかし陸に着くまでに翼は、全てを思い出しきれなかったようで、あたりを見回している。

空を飛ぶ、人々がそれを見あげる。

黒深は下を見る、下ではほとんどの人が携帯を取り出して飛んでいる4人を撮ろうとしている。

“大衆化”

社会で習ったその言葉を黒深は頭に思い浮かべる、くだんね。つまりないことを思い出した。黒深は苦い顔をすると翼の背を追いながら辺りを見回す。政令指定都市となった静岡、にぎやかな場所、だが黒深にとっていい思い出はない、嫌なことばかりだ。

(余所者はあつちいけー!)

(お前、母さんいないんだってな、お前がそんなだからじゃないのか?)

「死ね」

「えっ?!」

しまった。つい口をついて出ていた言葉を運悪く拾ってしまった誠が、驚いて黒深を見上げる。

「ごめんごめん、つい昔の自分を思い出しちゃったもんで」

へらつとした笑みを黒深が浮かべると誠は、疑うような目を向けるが、翼が進む方向を変えたことでこれ以上、進展の見せない会話を打ち切らせる口実を見つけた。

空から見た道を完全に把握した翼は、いっぺんの迷いも見せず飛んでいく、そして人通りの少ない通りで降り立った。

「どこ、どこ？」

「あまり人の通らない裏路地、飛んだままだと目立つだろう？」

それもそうだということ、翼を先頭にして昼なのに暗い路地へと降り立つ、

「天使?!」

突然上がった声、それに驚いた誠や翼、今まさに降り立とうとして麻奈も動きを止めた。

「誰かい……?!」

「黒深!？」

「おねえちゃん?!」

ほとんど人気のないことを知っていた翼や、それを信じていた誠や麻奈は、声のした方を向いて固まったが、黒深はそんな翼の横を駆けて、声を出した人物へと飛び蹴りを喰らわせた。

突然のことで驚いていた人は、二重に驚いた。

身にまとう服はとところどころが破けていて、髪の毛にフケが見えている、伸びっぱなしのヒゲは不潔で、この人物が、このあたりを根城としているホームレスなのではないかと思わせた。

だが余計なことをして人を呼ばれては困る黒深たちとしては、何があるつと一応、取り押さえておく必要があった。

吹き飛んだその人に乗っかかり身動きを取れなくさせ、それから黒深は口を開いた。

「あんた誰？」

「そういうそつちこそ誰なんだ、天使ではないのか？」

こんな時代にも天使を信じる人間がいるとは、黒深は口をゆがめた。

「違う、天使がこんなことすると思う？」

何か黒いものを含んだ笑み、それに対して男は期待がはずれ、それでも納得したような声を出した。

「そうだな、天使がそんな悪そうな顔をするはずがない」

黒深の返答に諦めたような笑みを浮かべた。

「で、あんた誰？」

「ただのホームレスだ、離してくれ」

「却下」

「何？」

質問が終わったので離してくれと思っていたその人は驚いた。

「まだ名前と職業を聞いていない」

職業質問かよ、と小声で言った翼は無視して黒深は聞く、

「そんなことが、俺は天外てんがい芙楼ふうろう 売れない絵描きだ」

芙楼は自嘲気味に笑う、顔はぼさぼさの髪の毛に隠れて見えなかったが、どんな表情をしているのかはなんとなくわかる。

「ふうん、 んじゃ天外、 このことは口外無用でオツケー？」

「この格好で警察に駆け込んだら逆に逮捕される」

おどけた口調で言う芙楼、へえ、あんた結構面白いじゃん、と調子よく黒深がいつの間にか芙楼を立てて背中を叩く。

何でいきなり会ったやつと仲良くしてるんだよ馬鹿かこいつ、翼が強く拳を握り締める。

それを見ていた誠がにやりとして翼の肩を叩く、

「嫉妬？」

「嫉妬？ ふざけるな!!」

どうしてあんなやつに　　！！

思った以上に怒る翼に、　驚くどころかさらに笑みを深めて誠は麻奈のほうを向いて言った。

「面白ことになりそう、　ねえ麻奈」

「うん！　そうだねおねえちゃん！！」

年下の麻奈でもわかるのに、　この2人ときたら　、　誠はこそつと笑うとすっかり意気投合してしまっている黒深を呼んだ、

「ねえねえ！　天外連れてっちゃだめ？」

新しい玩具が売られているのを見て、　目を輝かせる子供のように、黒深は言った。

あまりにもその瞳が輝いていることに翼はさらに苛ついていく、誠は特に考える時間も持たずに返答しようとしたとき、　さえぎったのは翼。

「却下」

「いいですよ、　下手に他のところで話されるのも怖いからね」

「私はいいよ、　おじちゃんいい人だから！！」

「おじちゃん、　か……これでも俺まだ20代なんだけどな」

反対1に賛成が2。　麻奈の言葉にショックを受けた芙楼は呟く。
しかしどう見ても20代に見えず、　30、40代くらいなので

はないかと思わせるくたびれかたをしている。

「知らなかった！ 意外と若いんだ！！」

「おじちゃんとか呼ぶなよ」

「わかってるって！！」

大笑いする黒深を見て笑う誠と麻奈、人をすぐ信じることをしない翼は一人、わけのわからない感情を抱えながら芙楼を睨んだ。人を簡単に信用にして、ひどい目に会う人を見てきた翼は、納得がいかないと言った。

その瞬間に、

「じゃあこの人がうちつちのこと言ってもいいわけ？」

黒深に、そう切り返されれば同行を承諾するしかないだろう、そのことで喜ぶ3人と一緒に笑っている芙楼を、殴りたい衝動に駆られながらも諦め、翼は溜め息をついた。

人は、人だから仲良くできないんだ。

ACT・8 仲間？

さあ、空を見て、綺麗な星を見上げてみましょう、ほら、何か見えてきませんか？

『大空へと憧れるのは何故か』より抜粋 天体観測をする少年

人通りの少ない路地の隅で話し声がボソボソと聞こえてくる。

髪の毛をぼさつかせた芙楼は、手櫛で梳かしながらからまった髪を解き始めた。

「それで、ここからどこにくだい、黒深？」

「うーむ、芙楼の格好がそれだとちょっとやばいかも……」

声はあくまでも若い青年のものだけだな、と黒深がうなる。

芙楼の格好はどこからどう見ても一般時とは言いがたい、翼の知り合いに会いに行くにもさすがにこれではまずいだらうと黒深は考える。

しかしまともな服がすぐに調達できるはずがない、どうしたものかと悩む5人だが一番初めに浮かんだアイデアをあげたのはやはり黒深だった。

いい意見が中々に浮かばない誠や翼は素直に黒深の意見を聞くことにした。

「むむむ……ならさならさ！ 翼と誰か1人一緒に会いに行くってのはどう？」

「何で俺と1人だけなんだ？」

行くなら芙楼こいつを置いていけ、とばかりに芙楼を睨みながら翼が言うが、察しがいい誠は翼にもわかるように解説をした。

「あ、つまり翼とその一人は彼女として、てことだよな？ 黒深」

「当たり前！ なかなか名案だろ？」

浮かんだアイデアを理解してもらい、嬉しそうに笑いながら黒深は親指を立てる。

そんな黒深をほほえましい目で見ていた誠は、問題を見つけたのか険しい眼で翼に言った。

「そうそう翼、麻奈はだめだからね？」

「当たり前だろう」

一瞬にして空気が冷える。

芙楼のことで苛ついていた翼の眉間にさらに皺が増えた。

そんな翼を見た誠は、わかればいとばかりに笑顔を見せた。

ただ、その背後で麻奈が、不穏な何かを感じ取って固まっていたことを翼は、心の中にしまっておいた。

誠の笑顔の裏にある感情が何か、考えるだけでも恐ろしい、そんな中黒深と芙楼だけは楽しそうに話している。

それが翼を苛つかせる一番の原因だと知らずに、ふと視線を感じた黒深が振り向き、翼に聞いた。

「んで、どうすんの、誠？ うち？」

「そつだよ翼、早く決めてよ」

決断を迫られた翼は真剣に考える。

誠を連れて行くのが一番だろうが黒深がその間芙楼と仲良くしているのも気に入らない、しかし黒深を連れて行けば逃げるとき誠が不便だろう、本当にどうすれば。

翼は考えこみ、何故迷うのかわからない黒深は首を傾げ、誠は悩むさまを見て内心ほくそ笑んでいたことを麻奈はなんとなく理解した。

人と人の付き合いが大変なのだと早めに知る麻奈は、それでも口に出すことはしなかった。

考えている翼は置いておくことにして黒深はぼさついた髪を見て、不快そうな顔をした。

「ねえ芙楼、あんたそのボーボーの髪の毛どうにかしたら？」

言いながら芙楼の髪の毛に触れている黒深は、複雑な表情をしている芙楼を見上げた。

「つつたつて金がねえんだよ」

翼が考えこんでしまい、暇になったのか黒深は、芙楼の長い髪の間から顔を覗こうとし、避けようとした芙楼に黒深は俊敏な動きで芙楼の前髪を掻き揚げた。

一瞬のことで対処できなかった芙楼が眼を見開いた。

覗く瞳は日本人ではありえない、澄み切った海の青。驚いたまま動かない瞳が、戻ってきた前髪によって隠れていく。

「う、っそお……」

「え……?」

真つ先にそれを目にした黒深も、黒深の反応を見て興味半分ですれを見た誠や麻奈も、今まで考え込んでいた翼でさえも顔を上げ、それを見て固まった。

その中で唯一、芙楼だけが居心地が悪そうに視線を彷徨させた。髪の毛をがしがしとかき、深く溜め息をつく。

「あなた、外国人だったん?!」

怯えはなかった。ただ始めてみるその瞳の青さに目を丸くしている黒深が聞く。

声音に含まれたのは素直な言葉に、一部の好奇心。

それら全てを上手に読み取った芙楼は隠された前髪の奥で眉をかめながら答えた。

「まあ、一応」

「綺麗な目……」

どこか美しい美術作品を見るような表情を見せる黒深、もちろん誠や麻奈も例外ではないようだった。

つい魅入ってしまった翼は、自分を叱咤し他の事で黒深や誠の意識を惹くことにした。

「誠、行くぞ」

どちらと行くか、その選択で誠の名を読んだ翼は、宣言する。黒深を選ぶとばかり思っていた誠は驚いたように聞き返した。

動揺を隠せない顔で誠は視線を翼へと合わせた。

「えっ？ ああ、私でいいの？」

「いいも何もお前だけ逃げられない、なんてことになったら困るだろうが」

驚きを心の奥へと隠した誠は、意外な選択に驚いたが翼はすでに決心を固めているようで、特に問題もないだろうとそれに従っていくことにした。

黒深や麻奈はいつてらっしゃいと言っただけ言っただけ即座に芙楼を質問攻めにした。

質問をされている当の本人は困惑したように髪の毛をまたがしがしとかいた。

「待てよ、そんなに一気に言われても答えられないぜ？」

「そいじゃあねえ……」

×××××

「そういえば翼の知り合いつて？」

「俺の元親父の兄弟、ろしゅうめいしやうた狼銘将蛇、て名前だ」

人の通らない路地を抜け、それなりに人通りのある通りを歩きながら誠は翼に質問をする、ツバサは収納が可能らしくしつかりと背に収めてある。

さすがに破れてしまった服は復元できなかつたが、目立つツバサがしまえるだけ幸運だと誠は安心したように言った。

通行人も特に気付かず、誠と翼の姿を気にも留めずそれぞれの向かう先へと歩いていく。

ここまで行くと逆に気を張った分つまらないようで翼は、聞かれたことに答えつつも道を思い出しながらも進んでいく。

「狼銘、変わった苗字だね、ろつめいよく狼銘翼、か……結構似合ってるよ」

「嬉しくないな、ととここだ」

誠の素直な感想に気分を悪くしたようにそっぽを向いた翼が、あの建物の前に止まった。

路地を抜けて数分歩いたところに将蛇の家があった。

それなりにいい家らしく和風建築の2階建ての家だった。翼は二、三度深呼吸をすると引き戸の入り口のすぐ横においてあるインターホンを押した。

音は一度だけ響き、反応を待つ。

しかし返事は返ってこない。

「いないのかな？」

「ありえない、あの人は小説家、だっ……！」

言いながら翼は引き戸を強く引く。みしりと軋んだ音を立てながら引き戸は開いた。

ただその時出た軋んだ音が人の泣き叫ぶような声に似ていたのはきつと気のせいだろうと翼は処理をし、家へと入っていく、これでは不法侵入だ。

さすがにいけないと思った誠は制止の声を上げた。

「さすがにまずいでしょ！！」

少し大声を出した誠は、翼が玄関の先を見て、次にあごで誠に示した。

疑問符を浮かべながら視線を示された方へと向ければ、人の姿があった。

「おや？ 翼じゃないか！ 久しぶりだね」

「こんにちわ、 狼銘さん」

翼は挨拶をし、軽く礼をした。

目的の親戚とやらだろう、誠は見上げる形で迎え出た男を見上げた。

「私のことはおじさんでいいと言っただろう？」

出てきたのは和服の男性、それなりに長いらしい髪の毛の辺りでひとくくりしている。目が細く人のいい笑みを浮かべていることが特徴的な男性だった。

これが翼の親戚なのかと一瞬疑いかけた誠は、しっかりと将蛇を見た。

不法侵入については何も言わない将蛇は一度だけ扉を見て調子が悪いのかな、と呟いた。

実際そういう問題ではないのだが、本人がそう言っているのでもいいだろうと処理しきっている翼は早速本題に入る。

「はい、おじさん」

「うん、 いい子だね、 おや？ そちらのかわいい娘さんは誰だ

い？」

将蛇の目が誠をとらえた。

かわいい、 というなれない単語をもらった誠は照れを隠せない様子で答える。

素直な賛辞は誠に対して気分を害するものではなかったが、 逆に気持ちを落ち着かなくさせてしまった。

「あ、 私は誠といいます。 翼の……」

やはり彼女です。 なんて堂々といえない誠は顔を赤くしてうつむいてしまった。

恥ずかしいときに誠は顔を赤くして視線を合わせないようにする、 それを見た翼はなんと言ったらいいか迷った。

困惑しきった二人を見て、 将蛇が驚いたような顔をする。

「もしかして彼女、 ですか……翼もやっとな彼女を持つ気に」

うつすらと涙まで浮かべてみせる将蛇に、 翼が怒りを含んだ声で言った。

「おじさん、 何気に失礼ですよ」

苛立ちを含んだ声で返せば将蛇は、 気にした様子も見せず立っただけでばかりいないで家にかかることを勧めた。

遠慮せずにあがるうとした翼は一応将蛇のほうを見て言った。

「お邪魔します。」

靴をそろえて家へとあがる翼と誠は居間の方へと案内された。

それなりに広い家の廊下を歩いていく途中、 誠は思いついた疑問を翼になるべく小さな声で聞いた。

「そっいえば翼、 ここにほかの人はいないの？」

「いない、 おじさんは独身だ」

それはおかしいとばかりに首を傾げた誠に気付かない翼は、 将蛇が立ち止まったところで自分も足を止めた。
振り向いた将蛇が障子に手を掛けている。

「じゃあここでゆっくり待っててくれるかい？」

私はお茶を入れてくるからといいながら居間を隔てる襖を開けた瞬間に人が、 いた。

結構な人数が難しい顔で話しこんでいたが襖が開けられたのを見ると全員が全員、 こちらを向いた。

いくつもの鋭い目が翼と誠を捕らえた。 それに一瞬怯んだ翼はすぐさま将蛇へと疑問を投げつける。

誠は、 やはりとばかりに身構えた。

「おじさん？」

「あ……」

すっかり失念していたようで額には軽く汗が浮かんでいる、 将蛇はどう説明しようかとあせるがその前に凜とした女性の声が響いた。

「お前は誰だ？」

話し込んでいた中でもリーダー格らしき女性が、翼と誠を睨みながら手を腰のベルトに引っ掛けてあるものへと持つて行く。

その手に収まっているものはハンドガン、子供相手にありえない、しかし下手な回答をすればあつという間にその銃の銃口から煙があがる。

翼は銃口に気を配りながらも尖ったような言葉を女性へと向ける。

「そっちこそ、俺のおじさんの家で何している？」

「おじさん？」

きつめな口調で言う翼に女性が訝しげな視線を翼から将蛇へと移した。

嘘ではないか、それを確認するために女性は将蛇を見た。

その意図を汲んで将蛇は、返答する。

「私の兄弟の子供です。」

「おじさん」

迷いのないその言葉に翼は将蛇を見つめた。

狼銘家から縁が切れてから未だに翼のことを狼銘家の子供と認めるのは将蛇が初めてだったのようで、翼は喜びながらも驚いていた。

女性は確認がとれるとハンドガンを元の場所へとしまう。

しかし周囲の警戒は薄れることをしなかった。

張り詰める空気の中、将蛇だけはお茶を入れると一言告げて姿を消した。

「そうか、ならいいお前、名は？ そっちのもだ」

「天上、翼」

「浅葱誠です。」

いくらか警戒心の薄れたその場で翼と誠は名前を名乗る。

女性は2人の名前をしっかりと頭に記憶させるかのように頷くと口を開いた。

「翼と誠だな、お前たちはこのことを口外にしないと誓えるか？」

一応約束みたいなものなのだが、周りに入る人たちの態度を見ている限り誓えない場合その場でこの世から消えてしまうようだ。

ただ何も知らないまま引き下がるのが嫌だった誠は聞いた。

「あなたたちは……何？」

睨んで黙らせようとした女性は引き下がる気配を見せない誠に溜め息をついた。

少しの間沈黙が降りたが女性は諦めることをしない誠の瞳に負けて、その何かを示した。

「これを見ればわかるか？」

理由はすぐにわかった。女性の背から綺麗な薄紫色のツバサがあらわれていたのだ、理由、と言われれば理由になるだろうツバサを見て誠は納得したようだった。

少なくとも敵ではない、それを確認できた誠は微笑んだ。

「なんだ、あなたも、ですか……ねえ、翼？」

「ああ」

「どういうことだ？」

ツバサをしまった女性がさらに訝しげに翼と誠を見る、そして二人は互いに顔を見合わせて理由代わりにツバサを出現させる。

翼の純白のツバサと誠の片翼の折れた薄黄色のツバサが広がる。

それを見てその場にいた全ての人が息を呑む音が聞こえてきた。

予想だにできなかったことだったようで、明らかな同様がその場に広がる。

「そういう、　　ことか。　　いいだろう、　　話してやる」

すぐに冷静さを取り戻した女性は軽く笑った。

説明を始めようとした女性に、　　誠が思い出したように翼を見た。

「あ、　　その前に」

「何だ？」

「他に私の友達がいるんですけど連れてきていいですか？」

とりあえず確認を取る誠は何故か誠の後ろの方を見て、　　呆れた顔をしている女性が溜め息をつく。

気づいていないのか、　　と呟いたように見えた瞬間に誠と翼は後ろから黒深特有の笑い声が響くのを聞いた。

後ろを振り向けば黒深の後ろで顔を赤くしてうつむいている麻奈、そして黒深の隣で興味深くその場にいる人々を見回している芙楼がいた。

「どうしてここに?!」

気づかなかった翼と誠は驚いて少し後退りした。

その反応に満足したのか黒深は満足げに笑った。ただ先ほどまでいたはずの男が未だに戻っていないことを、その場にいた人々の中に、気づいたものはいなかった。

照れたような笑みを浮かべて黒深はさらっと一言。

「えへへ、尾行してみましたー」

そういつてまた照れたような笑みを浮かべた。呆れて言葉も出ない翼や誠のかわりに女性が確認を取った。

「とりあえずこいつらだな?」

「……そうだ」

答える翼の声は一気に何十も老け込んだような声だった。

疲れきった顔が更に年齢を老け込ませていた。

「お前ら、名は?」

未だに照れくさそうに笑う黒深や恥ずかしそうに後ろに隠れる麻奈、
いまだ興味深そうに周りを見ている芙蓉に女性が聞く、黒深は
それを聞いてにやりと笑った。

「人に名前を聞くときは?」

まず自分からでしょ? そういつて口を閉ざした黒深に女性は今更

ながら名乗っていないことに対して律儀に謝まった。
そして自らの名を名乗る。

「すまない、名乗るのが遅れたな、私は或麻癒羽、お前たちは」

「黒神黒深」

癒羽を正面から見つめて黒深が名乗った。

互いに警戒心を解く気がないのかぶつかり合う視線が闘っているような錯覚をみせる。

「安斎、麻奈です……」

続いて麻奈がおどおどとしながら言い、最期に芙楼が名乗った。

「天外芙楼」

癒羽は自己紹介をした3人を1人1人ゆつくりと見ていく、その眉間に深い皺が刻まれたのは芙楼を見たときだった。

明らかに怪しい、だがこの状態を見られてそのままのけ者にするわけにもいかず癒羽は黒深たちに座るよう促した。

そして全員が座っているのを確認した翼が癒羽へと疑問を向ける。

「何故俺のおじさんの家に？」

「匿ってもらっていたのだ、私たちの拠点、後で案内はするがそこへ行き着く前に人目に触れてな、逃げ回っているときに丁度狼銘にあった。朝早くだったのに迂闊だった。」

「つまりドジったわけね、　んでその匿ってくれた優しい優しい翼の知り合いさんは？　そっちの方が迂闊じゃね？」

黒深の皮肉めいた言葉に翼が掴みかかった。

いきなりの事態にどうしようかと迷う誠が、　妙な違和感を感じ取った。　狼銘の声と、　大勢の人の声。

仕方ないとばかりに溜め息をつきながらも耳を澄ませていた黒深は、　狼銘の家全体を囲うように人が集まっていることを告げた。

一瞬にして癒羽たちは早くも逃走準備に取り掛かる、　少なからず驚きはあつたものの落ちつきは失われていなかった。

落ち着ける時間もありやしなないと黒深が愚痴をいい、　こんな体験なかなかできないなと楽しみながら芙楼が言う。

優しい笑みに騙される馬鹿もいる、　騙された馬鹿をあざ笑うかのように被害者ぶる将蛇の声を拾った黒深が舌打ちをした。

馬鹿の中でも正直にシヨックを受けるやつだっている、　正直にシヨックを受けている馬鹿の背中を黒深が思いつきり、　叩く。

危うく階段を踏み外しかけた翼は黒深を睨もうとしたが、　翼を真正面から見た黒深はまた舌打ちをした。

「アホ、　なんでそんなに悲しそうな顔してるわけ？」

「そんな……顔か？」

自分ではいたって普通だとしても言いいたそうに翼が言つのに黒深は内心で溜め息を付いた。

「あら、　自覚していらっしやらないようで」

わざと挑戦的な言葉を選んで言った黒深に翼はいつものように言い返すことはしなかった。

辛気臭い雰囲気が流れる中、 2階の奥の方にあるところへと辿り着いた癒羽たちが大きな窓を開き、 飛んだ。

いくつもの色が空へと舞う、 その美しさに目を奪われた黒深たちも遅れないように続いて飛んだ。

下では警棒を振り回す警官と逃げていく癒羽たちを憎々しげに見る将蛇がいた。 ツバサを持たない人々はみな、 空を飛んでいく者を見て美しさに息を呑んでいるのが空からでもわかった。

そんな人々を一瞥し、 癒羽は黒深たちについてくるように言うて速度を上げた。

人間は、 裏切りの上に確立された存在だ。

ACT・9 逃走

空はいい題材になるよ、よく見れば色の層がいくつにも重なってる

『大空へと憧れるのは何故か』。若き芸術家

空を飛ぶ、人々が空を見上げるのが見える、

「よおーくうー！！！」

その空を飛ぶ中で1人芙楼と誠の、空を飛ぶことのできない2人をつかんで飛んでいる黒深が恨めしそうに翼の名前を呼んだ、その声に振り向いた翼は見た。

黒深の腕が痙攣をはじめ、今にも芙楼と誠を取り落としそうな光景を。

「芙楼でも誠でもいいから預かってー！！！」

仕方ないとはかりに翼は黒深のすぐ隣に並ぶ。

「仕方ない、浅葱、手を貸せ」

「わかった。」

翼の差し出した手に素直につかまった誠は身軽になり、少し高度を上げた黒深とそれにつかまる芙楼を見た。

相変わらず薄汚れた服装をしている芙楼だが普通のホームレスとは違う何かを感じ取った誠は考える、物腰、言葉遣い、考え

れば不自然な点はいっぱいある。

司のこともあり、警戒心が強くなった誠は眉をひそめた。

「浅葱？」

下で気難しい顔をしている誠に声をかけようとした翼に、黒深が声をかけた。

「やめときなよ翼、誠は一旦集中すると周りが見えなくなるから、なあ芙楼、あんた目、いい？」

唐突な問いかけに芙楼は下のほうへと目を凝らして何か見ている。

癒羽や他の者たちも何かに気づき下を見て、散開する。

下のほうで疾走するそれは軽トラック。荷台に乗っているのは銃を持った男たち。

縁日の屋台で聞くような軽い発砲音ではなくもつと重い、実銃の音、警察ではないが絶対に銃刀法違反に引っかからないであろう者たちが空を飛ぶ者達を狙っているのだ。

音がして、避ける。

その繰り返しをしているうちに人の少ない山の方へと癒羽たちは飛んでいく。

しかし下で狙撃する者たちに応援が増えるばかりで減ることはない。

狙撃手は減らない、逆に増え続けている。癒羽はそのままではいけば確実に囲まれてしまうであろう事を悟っていた。

「まずいな……誰か囷を……」

大人数移動している分不利だとわかっている癒羽は仲間を見渡す。

「私が、或麻」

名乗りを上げたのは黒い長髪の撫で付け髪、ワイシャツに学生ズボンのようなものをはいた、表情の起伏が薄いように思える青年。だが癒羽は首を振り、否定する。

「1人では無理だ」

「うちがやる」

「お前が？ 何故だ」

名乗り上げた青年に続いて立候補したのは黒深、理由を聞かれ少し迷ったように言った。

「うーん、色々と、ね？ それに早くしないと危ない」

空に向かって撃たれる弾は中々癒羽たちに届かず逆に落ちてしまう、しかしいつその弾が人にあたるのか分からない、それならば早く行動を起こした方が得策だと考えた黒深のはじき出した答えだった。

黒深は芙楼を癒羽に託すと青年と共に降下した。

「名前、聞いていいですか？」

「てんま 填間、きょゆう 虚有」

ぶっきらぼうに答えた虚有に黒深が笑いかけた。

「填間さんね、そいじゃ行きましようか」

声を合図に下にいる銃を持った人たちは更に上へと上昇した癒羽たちを諦め、狙いやすい黒深と虚有を狙ってきた。

風を切って飛来する銃弾は、当たれば確実に動きを鈍らせる。

しかし場所は山、したがって木々のたちならぶ場でもある。

銃弾を当てるにはかなりの腕が必要で、簡単に当たるはずもない。

少しずつ山の方へと入っていく、追ってくる人は減っていたが未だに撃つ人がいる、しかもどこから拝借してきたのかトラックの荷台からネットを撃つて来る人まで出てきた。

山の方へ入れば飛んでくる弾は激減し、黒深と虚有に余裕がうまれる。

「このあたりに住んでるんですか？」

銃弾を交わしながら、黒深が質問した。

「違う、私は青森県だ」

「へえー、結構遠いんですねー」

頭の後ろで腕を組み、飛行しながら黒深が間延びした声で言った。

「黒神はどうなんだ？」

虚有が聞けば刹那、黒深の瞳から光が消えた。

気づかない虚有は下を警戒しながらも黒深の答えを待った。

「うちは色々、あんま長く一つどころに留まらずーって感じなん
で」

避けるのが楽になり暇になってきた黒深が填間に質問をし、質問が返され、それに答えてまた質問をする、ということを繰り返していた。

気づくと上空にいた癒羽たちは目的地に近づいたのか高度を落とすてきている。

そんな時間伐でもされた後なのか狙撃に十分な視界のいい場所を飛んだ瞬間。

乾いた音。

銃弾が真っ直ぐに狙ったのは運悪く囷である2人の少し前を飛んでいた翼と、誠。

耳で聞くよりも早く、黒深の体が反射的に飛び出していた。

「まごっ、よくううっ!!」

翼と誠は一陣の風に突き飛ばされたかのようにその場から退いた。

バランスを崩した翼の下で誠が見たのは黒い物体が、鮮血を噴き出しながら落ちていく様、よく見ればそれは人のようであり、

鳥ではない、何かだということを確認させた。

木にあたりながら落ちていくそれを見つけた翼と誠は叫んだ。

「ばっ?! 黒深!!」

「或麻さんっ!!」

翼が黒深の名前を叫ぶと同時に誠が或麻のほうへと声を張り上げた。事態に気づき、癒羽が虚有へと命令をする。

「わかっている! 填間!! 後は任せた。」

バランスを崩し、誠を取り落としかけた翼がどうにか体勢を立て直す。

填間が或麻と位置を変え、或麻が黒深の救出のために芙楼を他の仲間に預け、急降下する。

すでに地面へと落ち、気絶している黒深を運ぼうとする銃を持った者たちに対して癒羽が取り出したのは光を受け鋭く光るナイフ。運ぶ作業に集中していた者たちは驚き、癒羽の姿を確認する前にその刃の前に倒れた。

倒れ伏した者たちの体から流れた血は地面へと吸収され、あまり広がることはなかった。癒羽は冷めた目でそれを見るとツバサをしまい、運び手を下敷きに眠っている黒深を見た。撃たれたところは見つからない、癒羽は目を凝らしてもっとよく見た。

傷は体ではなくツバサの方、黒いツバサのせいで気づかなかっただけだが、ツバサが血に濡れ、黒く光っていた。

癒羽は誰か監視がないか辺りを見回し、黒深を抱き上げて運んでいった。

「癒羽！」

「ああ、ご苦労、填間」

「黒深は？」

本当に人の出入りが無いようなところにある洞窟の入り口に立っていたのは虚有と芙楼、芙楼は聞きながら癒羽に抱きかかえられている黒深を見た。

血の気が薄れ、軽く顔が白くなっているがその寝息は穏やかだ。無事であることを確認して芙楼は知らず、溜め息をついた。

「この通り無事だ、医者は？」

「もう待機中だ」

「医者なんてもんがいるんだ」

「いや、もぐりの医者だ、それでも下手な医者よりは腕がいい」

「へえ」

芙楼はそれつきり沈黙すると虚有と同じように癒羽の後ろへとついていった。

着いたのは洞窟の中だというのに妙に清潔な部屋、そこで待っていたのは白い白衣をまとった人、癒羽は白衣の人と一言、二言かわすと黒深を診察台のようなところへ寝かせると足早に立ち去る。

その場に残ったのは芙楼と白衣の人と気を失っている黒深。

芙楼自身は出て行く気がないように、頭の後ろで手を組んでいる。白衣をまとったその人は険しい目つきをして芙楼を見る。

「出て行って」

「手伝おうか？」

「は?!」

白衣の人は女性らしく高めな声で非難の声を上げた。

「ダメよ、彼女は女、あなたは男、わかるでしょう?」

「……わかったよ、そいじゃ俺は外に出てくるんで伝えておいて」

断った瞬間、 芙楼の周りに黒いオーラのようなものが出たのを感じた女性は、 一瞬断ったことを考え直したがすでに芙楼は外へと出て行ってしまった。

×××××

ある程度時間が経ったところ、 芙楼は外へ出るとあまり人目につかないところで上を向き、 何かを話すかのようなそぶりを見せる。

「ああ、 うん……わかった。」

「芙楼さん」

会話を終えたと同時に誠が芙楼に声をかける。

芙楼は今、 服装や髪型を世間一般で言う『普通の人』にしていた。

服装はTシャツにジーパン、 髪の毛は整え、 前髪も適度に切られていた。

ただ一つ、 違っているのはその瞳、 日本人ではありえない海のごとき青、 それを外気にさらしながら芙楼は笑った。

誠はその海のごとき青の瞳を捕らえた。 その目には疑いという言葉がありありと浮かんでいた。

「どうしたんだ？」

「誰と話していたんですか？」

「話す人なんて一人もいないだろう、 ここには」

おどけて言ってみせる芙楼に誠は無言で睨みつける。

お見通しつてわけか。芙楼はわかっていながらも口を閉ざすことを決めた。

互いに互いが口を開かず時間が過ぎる、さわさわと揺れる木々、のどかなはずのその場は冷え切っていた。

ふいに誠が何事かを呟いた。それは言葉に発せられない何か、芙楼はそれを知ることもなくただ、誠を見た。

呟きが少しずつ言葉になる、誠の強い意志の込められた言葉。

「言わないなら言わないでいいですよ、ただ、私たちを害するようなら容赦はしないですから」

驚いた。人に合わせているような感じを見せる誠が。はつきりと言い切った誠を見て芙楼は苦笑するとすでに背を向けて歩き出している誠の隣まで走り、洞窟へと戻っていった。

「あんなこといつてるぜ？　なあ……」

×××××

「或麻！！　黒深は？！」

「落ち着け、　まずはそこからだ」

あれから数時間、落ち着きなく視線をあちらへこちらへと動かす翼へ強く言い放つと癒羽は翼が深呼吸をし、自分を落ち着かせたのを確認してから話す。

「黒神は無事だ、　ただ今は治療中だから近づくな」

強い口調で念を押す。

「わ、わかった……どのくらいで治療が終わる？」

それでもまだ心配な翼は聞いた。

やはりかばって傷を負った黒深のことが気にかかるのだと感じた癒羽は先ほどよりも口調を緩めて言う、それでもなければ翼が沈み込んでしまっただろうと考えた結果だった。

「わからん、もうすぐ日が沈む、部屋を貸し与えるから今日は休め」

「でもっ！..」

「今日は休みましょう、翼」

誠が慰めるように翼の肩に手を置いた。

「浅葱……」

「疲れてるくせにぼっと突っ立ってんな」

入り口の方から来た芙楼も翼に休むようにすすめる。

有無を言わせぬその態度に翼は諦め、部屋への案内を頼むことにした。

「そういえば浅葱」

「なんですか？」

「どうして芙楼といる？」

芙楼を毛嫌いする翼が少し尖った口調で言うと誠と芙楼は顔を見合わせ、声を合わせ、散歩だと言った。

そして、あてがわれた部屋で翼と誠と芙楼は一息ついた。

それなりに広い部屋で、洞窟の中ということを感じさせないほどに清潔な部屋で3人は互いの顔を見る。

これからのこと、それを話し合うためだった。

「黒深のことは癒羽さんたちに任せよう」

まだ心配そうにして落ち着きのない翼に誠が言い聞かせる。

それに便乗するように芙楼が声を出す。

「賛成、で、これからどうするんだ？ お前ら」

まるで自分は関係ないけど、といった態度をとりながら言う芙楼へ翼が睨みつける、しかしそれを気にした様子を見せない芙楼に憎悪までこめる翼だが芙楼は動じない。

険悪な雰囲気の流れ出してしまっ、どうにか気をそらせようと誠は今思いついたことをそのまま、翼に聞いた。

「翼は一度お母さんのところへ行ったらどうかな？」

「母さんの？」

「心配、するでしょ？」

「あ」

母親しかいない翼はもちろん2人暮らしだ、1人と2人では全然違う、そのことを知る翼は急に母親のことが心配になってきた。

恐らく死んだとされるツバサの生えた人々、下手をしたら葬儀が済んでいるのかもしれない、母さんはそれでもあの家にいるのか？ 翼はある種の不安に狩られた。

今まであった場所がなくなる、それがどれだけ怖いことか、考えるだけで恐ろしい、そんな翼の心情を読んだ誠は慰めるのかのように言葉を発した。

「大丈夫、行ってみればわかることですよ？」

「……ああ」

「今日はもう寝とけ、明日の為にな」

芙楼の言葉で打ち切られた会話は明日に持ち越されることになった。

先に眠った誠や翼を見ながら電気の代わりになっている蝋燭を吹き消して芙楼も眠りに着いた。明日の為に。

真実とは意外と身近にあるもので。

ACT・10 夜、一人

空と海、 そのどちらも青く、 違いがある、 海は大地のもの、
なら空は？

『大空へと

憧れるのは何故か』 空が好きな少年

「んー……むー……」

まだ夜中であろう頃、 ふいに目が覚めた。

病室がわりとなつている部屋なのか他にも包帯を巻かれていたり
止血テープが貼り付けられて眠っている人がいた。 明かりは電気
ではなく蝋燭、 それが部屋全体を薄暗く照らしていた。
軽く伸びをしようとした黒深は背中に痛みを感じてツバサに触れ
る。

漆黒のツバサに正反対な真っ白な包帯、 うん、 不自然だ。

黒深は包帯の巻かれているところに触れた。 少し、 熱いな
、 触れてみて傷口が熱を持っていることを知った黒深だったが、

「さてと」

立ち上がって誰か起きている人がいないか確認する。

しかし起きていない人はいない、 時計がないので黒深は知らな
かったが今は夜中の2時、 起きている人がいるほうが不思議な時間
だった。

足音を立てないようにそろそろと部屋から出て行く、 出口を探
そうと考えていた黒深は部屋から出てすぐに月明かりが通路を照ら

しているのを見た。

部屋から出てすぐ左、そこから光が漏れてきていた。黒深はそれにひかれるように歩いて外へと出た。

「星が、 いっぱい……きれー」

のんびりとした感覚で黒深は空に浮かぶ星たちを見上げた。

結構な間そのままの状態であっていた黒深は足が疲れたのか適当に座れる場所を見つけて座った。

「さて、 と誰？ 呼んでんのは？」

星を見ていた目を閉じて、 そう言うと同時に現れたものがあつた。

しかしそれらは人ではなかった。ただの発光体。どんな原理なのか黒深は知らなかったがただ、 彼らが呼んでいる気がして外へ出たのだ。

発光体はぼんやりとした輪郭を持ち、 人のような形をしていた。違う部分といえば背中、 ツバサのような輪郭を持っているということ、 一般で言う幽霊ってこんなのかな？ 目の前の発光体たち、 普通の人なら悲鳴くらい上げているだろうが黒深はその正反対で、 にたりと不気味な笑いを浮かべた。

「何の用？ 驚かそうとしたって無駄だよ」

堂々とした声で告げると発光体たちは勝手に森の中へと進みだした。それを追いかけて来い、 というように解釈した黒深は発光体たちの後を追った。

乱雑に生えている木でできた森は人を迷わせる。 だからこそ癒羽たちはここを隠れ場所としたのだ。

ただ、 上や遠くから見たら他と変わりない『山』を見つけたらただ癒羽たちは頭がいいのだろう。

「ま、 って……ペース速っ!!」

発光体たちは木をすり抜けながら進み、黒深は木々を避けつつ進んでいる分時間も体力も消費してしまう、それでも発光体たちは前進していくだけ、黒深が文句を言ってみても発光体たちは返事も、止まることさえもしてくれない、仕方なく疲れた体を引きずりつつも黒深は走っていく、発光体たちが止まったのはそれから数十分過ぎた後だった。

息を整えながら緩慢な動きで真正面の景色を捉えた。目の前の景色は一言で言うなら廃棄処分場、もう一言付け加えるならツバサの生えた人の、だ。

真っ青を通り越し、真っ白な顔をした人たちは大きく掘られた穴の中へと落ちていく、落としているのは砂利などを運ぶトラック、そこから落とされていているのは人、ツバサの生えた人を落としていたあの地獄のような風景を思い出し気分を悪くした黒深は目をそらした。

「あんたたちは、これを、見せたかった？」

こくり、一つの発光体が頷くようにしてみせる。

「何を、しると？」

更に黒深が聞くと発光体たちはすでに死んでいるであろうツバサの生えた人たちの落とされた穴に下りていく白衣を着た人たちを示した。

白衣を着た人たちは全員が全員巨大なはさみやノコギリのようなものを持って穴へと下りた。

何をするのかと思っよく見てみると白衣を着た人たちはまずす

で息絶えている人たちに背を向けさせ、 ツバサを 。

「あ、 はは……そういう、 ことね…あなたたちはこれを見せたかったわけね」

こくり、 再び発光体が肯定の意を示す。

「何を、 してるんだ、 あいつらは？」

首を、 振る。

発光体たちはツバサを切り落とすという行動の意味は知らないようだった。

黒深がさらに注意深く観察しているとかなり遠くから見ているはずなのだが白衣を着た人たちの会話が聞こえてきた。

「・れがか・いにか・・・あ・・・？」

「さ・・・、 お・・・ちは・・・命れ・・・し・・・うだ・・・」

途切れ途切れな会話、 それをもっと聞こえたと乗り出した黒深は葉っぱの露ですべり、 転んだ。

前のめりに倒れると同時にガシャンツという不吉な音、

「いたあああああいつ!!」

音源は黒深の足に噛み付いた動物用に仕掛けられた罠、 思わずとはいえかなりの大声を出してしまった黒深は慌てて口を塞いだ、 が、 もう遅く白衣の者たちは声がした方へと寄ってくる。

逃げようと考えた黒深だが右足には深く食い込んだトラバサミ、 逃げようと思っても逃げられるはずがない、 発光体たちはすで

に姿を消し、助けを求めようにも無理があった。

「痛いー、ってか何で俺がこんな目に、だってさあ、うちだつてこんなとこで見付かつて、捕まる気なんて……ん？」

一人称がおかしくなっているのに気づきつつも右足を引きずって穴のある正反対に歩き出した黒深はトラバサミとそれをつなぐ鎖が錆びていることに気がついた。

白衣を着た人たちはまだ黒深のいた場所には近づいていない、いや、近づけないと言う表現の方が正しいだろうか、黒深がいた場所は登るには大変であろう急な斜面、その分時間がかかっているのだ。

力を込めて、黒深が両手で鎖を引っ張ってみると鎖が悲鳴を上げた。

二度目に鎖の一部分がかけた。

立ち上がり、動く左足のかかとで鎖を思いっきり踏んでみると鎖同士がぎりぎり通れるかどうか位に鎖の一部がかけた。

もう一回！！ぼろぼろに砕けた鎖を見て足の拘束が解けたことを理解した黒深は一気に左足で地面を蹴った。

そして向かったのはツバサの生えた人たちの落とされている穴、風が一瞬にして吹きぬけていくかのようにまだツバサのある人と仮眠を取っているのか眠っている白衣の人間をさらうと森の中へと姿を隠した。

×××××

そろそろ朝日が射すであろう時間に翼は癒羽たちの隠れ家とされている場所の入り口で仁王立ちをしていた。

理由は言わずもがな黒深のせいだ。

「あいつは何を考えてるんだ!!」

そんな朝早くから大声で叫ばれても近所迷惑だ、と思っても今、誰も注意する人はいない、いるとしたら誠か癒羽くらいなものだがあいにくまだ2人は眠っているようで起きてくる様子はなかった。

「見舞いに行つてやろうと思つたら教えてもらった部屋にはいない、オマケにどこかに出かけてるときだ。ふざけるなあのパ……」

バカ、そう言いかけたところで誰かが木々の間を通り抜けるような音がした。

一瞬にして意識がそこへと集中した翼が見たのは親子連れの水、黒深かと思つて見たため期待を裏切られたような感覚に見舞われ頭を振る。

もう一度、今度は他の方向から音がした。
次も違つたろうと思いつつも翼はそこへと目を向ける。

「あつれえー? 翼じゃん、どうかしたあー?」

「おまつ……黒深! お前どこに行つて……」

「お空のお散歩。 ついでに狩り」

「はあ??! その両脇に抱えてるのは誰だ!??」

また余計な厄介ごとでも持つてきたと直感で感じ取つた翼は早いうちに不安の芽を摘んでおこうと聞いた。

ただ、黒深からもたらされたのは確実に厄介ごとと思われる一言、

「死体アーンド何か面白そうだから連れてきちゃった研究员!!」

「お、おもしろっ……黒深、こっち、こい」

軽くうつむいた翼、本質的なところで危険を感じ取った黒深は後退る、怒らせたっ！逃げよう、うん、そうしよう
!!

「あつ、黒深！お前えええっ!!」

思いつきり地面を蹴って空へと逃げ出した黒深を翼が追いかける。
ただ、2人も人を抱えていると確実に捕まってしまう、そこで昨日の一件で森の地理に少し詳しくなった黒深はどこどころ障害物のあるところを通っていく、

「ばーっか！追いかけてみやがれっ!!」

「待てよ!……っ?! 黒深！前っ!!」

え、と黒深が翼のほうから前へと視界を戻した瞬間、鈍い音がして、木が揺れた。

反動で仰向けになって地面に落ちた黒深の側に呆れ顔の翼が降り立った。

黒深はというと額を押さえて転げまわりながら痛いと訴えた。

「勝手に逃げた罰だ、それで、覚悟はいいか？」

形相を鬼のようにして翼が問う、黒深自身はまだ逃げる気のように立ち上がるうとした瞬間、足の痛みで立ち上がることを失敗し

た。

「……黒深？」

訝しげに翼が黒深の顔を覗こうとして黒深が顔をそらし、トラバサミに噛み付かれたままの右足を隠した。

その不自然な動作に疑問を持った翼が右足へと手を伸ばす。

「触るなっ！！」

手を弾き飛ばした黒深は、驚いた顔をして一步下がった翼を見た。顔に浮かんだ表情は驚きと、言葉で表すのならば愕然、という表情、気まずい空気が流れ、また目をそらそうとしたが白衣を着た人間がうめき声を上げたため、できなかつた。

「うーん、もう少し、もう少し寝させてくれ……ん？」

誰かが起こしに来た夢でもみていたのかうつすらと目を開けた。そして目の前にあるものを見て、一気に意識を覚醒させた。

「う、わ！ な、なんだなんだ?! ここはどこ……君たちか、僕を攫って何をするつもりだ!!」

「はあ？」

「なんだこいつ」

眼鏡をかけたがりがりな瘦せた男は眼鏡の位置を神経質なくらいに直しながら近くの木の後ろに隠れた。

「さっき言ってた面白そうだから連れてきた研究員」

「そういう意味じゃなくって、何の研究員なんなんだよ」

「け、 けけけ、 警察に訴えてやるうっ!!」

能天気な会話をする黒深と翼を木の後ろから覗いていた研究員が叫ぶ、 2人は顔を見合わせ、溜め息をつくと即行で挟み撃ちにして黒深は首に手を回し、翼は片足を思いつきり引っ張った。それだけで研究員は片足を地面に引きずらせながら浮いた。

「癒羽のところに連れていったほうがはやそうなんだけどなあ……」
「？」

「わかったよ、一応この件は保留にしておいてやる。」

翼から許しが出たところで片手が自由な黒深がすでに死人となったツバサの生えた人を抱え、飛び立った。

結局、知らないほうがよかったかもしれないなんて後悔は後から生まれるんだ。

ACT・11 一時的、別れ

え、空？ 空、 ねえ…… あれってどうして青いんだっけかな？

『大空へと

憧れるのは何故か』 。 通りすがりの大人

「……で、 何故私なんだ？」

腕を組んで、 仁王立ちをした癒羽に言われ、 つい逃げ腰になった黒深と翼に癒羽の溜め息が一つ。

溜め息をつき終わった癒羽が一刀両断。

「捨てて来い」

まるで捨て犬を元の場所へ戻して来いと言う母親のようなセリフ。

対して黒深は「捨てるの？」と問いかけるような瞳を向ける。

これでは本当に親と子供のようにだ、 などと自爆行為的な言葉を翼は、 言わなかったただけまだ助けがあるだろう。

偽親子の子供のほうの後ろではロープでぐるぐる巻きにされ、 口には猿ぐつわをされて芋虫並みに蠢く研究員がいた。

何やら呻いているようだ、 言葉になっっていないため、 誰も聞き取ることがない上に偽親子たちは、 聞こえてもいないだろうと翼は研究員が哀れに思えて、 心のうちで手を合わせた。 だからといって助けることはしないが。

「ここには余計な者を入れておくほどの余裕はない。 それに場所が割れると面倒だ。」

「つつてももうバレてる時点で終わりじゃな……すいません」

ぶつくさと屁理屈を述べていた黒深は、癒羽の極寒の眼差しに貫かれて、何も無いというのに脅された人間のように謝った。

反論の意思をなくした黒深を置いた癒羽は、続けて翼を見る。

癒羽が次はお前だとばかりに見つめる。翼は、黒深と同じくナイフで脅されたかのような錯覚に襲われたが覚悟を決め、言った。

「黒深から聞いた。こいつはツバサが生えていながら死んだ人間たちの“処分”をしていたそうだ。」

「……何？」

癒羽の眼差しに疑いの色が混じる。

疑いの目は翼から研究員へ、研究員はと言うと多少なりとも鋭い目つきの癒羽に見られてさらに暴れた。

しかし猿ぐつわのせいで、何を言っているのかわからない癒羽は、深い皺を眉間に刻んだ。

このままどこかへ放り投げるより、話くらい聞いてから放り出す方がいいのでは、という案件が癒羽の頭の中で議論される。

議論が賛成側に傾きかけている癒羽に、翼が、もう一息とばかりに言葉を付け加えた。

「これから何をするのか、方向性を定めるためにもこいつに何か聞いてみたらどうだ？」

そちらの方が利口であるというように翼が言い切れれば、癒羽はベルトに挟んでいるナイフを取り出した。

血のぬぐいきられていないナイフが、鈍い煌めきをもって研究員に近づく。

得体の知れない恐怖を感じ取った研究員が暴れるがナイフは正確に、猿ぐつわ代わりになっているロープだけを切り落とした。

何をされるのかと怯えていた研究員は、口の拘束がはずれた途端にわめき始めた。

「き、君たちはなんなんだ?! いきなりさらってこんな状態にし……がつ!!」

わめきたてた研究員に癒羽の蹴りが顔面に当たる。

悶絶する研究員を蛆虫でも見るかのような目で見下ろし、癒羽が続けた。

怖っ!! 黒深と翼の内心での声は、完璧に一致した。

「うるさい、はじめに聞く貴様、名は?」

「な、ななな! だ、誰が言うかつ!?!」

それが精一杯の抵抗だったであろうが癒羽はそうか、と呟きつぶせになっている研究員の背中へかかと落としをする。

転げまわろうにも動けない研究員は鼻血をたらしながら癒羽を見上げようとして、髪の毛をつかまれ、反り返る。

背中が軋む音。

研究員がどれだけ苦しもうと癒羽は力を緩めない。

黒深と翼はその光景を見て、自然と部屋の隅へと移動した。見ている方も痛いからだ。

どこでそんな拷問方法知ったのか聞きたくなかった黒深と翼は、知ったら知ったで後が怖いので何も言わなかった。

「もう一度聞く、貴様の名前は？」

「あかん 亜冠……はりす 針巢……」

痛みに顔をゆがめながらも針巢が答えると癒羽は髪の毛を掴んでいた手を離し、黒深のほうへと視線を移す。

「黒神、何を見たか教えてもらおう」

半ば強迫のような視線に知らず、頷いた黒深は自らが見たことを報告した。

「……そうか、そんなところがここの近くにあったのか」

一通り話を聞き終わると癒羽は腕を組んで何かを考えているようだった。

黒深は眠たげにあくびをしながら隣にいた翼をれば翼は、黒深を凝視している。

注目が自分にあることによって、また自分が何かしたのかと焦る黒深がいた。

「な、何？」

「足治療してもらえ、ばい菌が入ったらどうする」

あ、と黒深が思い出したように血のにじむ足を上げた。

忘れていた痛みを思い出してしまったようで、言わなければよかったのと言いたいような黒深の、その表情は痛みを耐えているようだった。

痛みを耐えるような顔は、翼が自分の顔を見てきたことにより

強制的にいつも通りのへらつとした顔に切り替える。

翼は、その一瞬の変化を見逃していたが、顔は傷のことを怪しんでいることを語っていた。

「んー大丈夫。それより……癒羽……だっ、翼……！」

声に癒羽が、振り向いた。それによって黒深が、話を続けようとばかりに口を開こうとしている。

翼の何かがぶつと切れる音。

血によって湿ってしまった足を掴んだ翼が、痛いと叫ぶ黒深を強制連行しているようとしている。

このまま怪我をしている者たちが集まっている場所へと連れて行くこうとしているのだろう。

様子を見て話は後で、と癒羽が告げた時点で黒深は翼に連れられ、部屋から出て行った。

針巢と2人きりにされてしまった癒羽は、ちらりだけ針巢を見て放置を決め込み、自分もこの空間から出て行った。

いきなりのことで呆けていた研究員は、またロープをはずそうとうごうごと動き始めた。

×××××

「いやーだーっ！ 放せええっ……！」

暴れてみても翼は離さない。黒深は再度暴れてみようとしたが足が、また痛み出しているため抵抗を諦めた。

それに付け加え、かなりの注目浴びたことも抵抗し続けることをやめさせた一つの理由だった。

おとなしくなった黒深に翼が嫌な笑みを浮かべる。

「痛いのか？」

ほらみる。翼の心の声が聞こえるようで黒深はいきり立った。

あまり長くない爪をたてるようにして黒深が、威嚇したところで癒羽が指定している治療スペースに到着した。

いたのは黒深のツバサを治療した白衣の女性。

先程の騒ぎが聞こえていたのか、すでに治療の準備は整っていた。

「あら、ツバサの傷はもういいのかしら？」

心配していたと暗に言ってくる表情に安心したのは翼だけ。

手をつかまれ脱出不可能の黒深の顔に浮かんでいるのは恐怖。

よく見ずとも黒深は、女性の額に青筋が浮き出ていることを確認していた。

笑顔で近づいてきた女性が、黒深の目の前まで歩いてきた。

瞬間、表情が豹変し声を出そうとする口からは犬歯が鈍く光った。

それまで女性の近くにいた人は、自主的に避難している。

「怪我人が何考えてるのよ!!!」

「傷が発熱するにもかかわらず抜け出したあげくまた怪我しましたあ？ ふざけんじやないわよ！ 医者 of 気持ちになってもみなさいっ!!!」

よく通る声に怒鳴られ咄嗟に耳を押さえた黒深に、隣で耳を押さえずまともに怒鳴り声をもらった翼は、何故か自分が怒られたよ
うな気分になり目を伏せた。

一息に怒鳴りきった優月尊飴は、肩で息をしながらきつ、と黒深を睨んだ。

蛇に睨まれた蛙がごとく動けなくなる黒深と治療を受け終わった人々。

苺飴は呼吸を整え、先ほどとは打って変わった優しい顔で言った。

「お帰り、よく帰ってきたわね」

「え……うん……」

優しい声と、微笑がセットの苺飴に迎えられ、黒深はしどろもどろになった。

怒っていたと思ったら、優しい声での迎えの言葉、そんなことが一度もなかった黒深は、何故そうなったのかわからない。そんな黒深を苺飴が笑った。

「だめねえ、そういう時は『ただいま』でしょ？」

慈母のごとき微笑で言われた黒深は、ただいまを言わなければいけないように思えてきて、少し間をおいて言った。

「あう……た、ただいま？」

語尾が疑問系になってしまったが、しっかりと「ただいま」と言う、怪我を負った子供に苺飴は、奥のほうにあけてある椅子に座るよう促した。

どこかで打ち捨てられていたような椅子、中に入っているスポンジが出て、見るからに汚い椅子に黒深はおとなしく座った。

その前に膝をつき、足に付いたトラバサミを力づくではずした苺飴が、手際よく消毒液をかけ、丁寧にガーゼで拭いていった。痛みに小さくうめき声をもらしながらも黒深は逃げることをしな

かった。

顔を伏せていた翼は、他の治療の終わった男に座る場所を譲られ、座って黒深の治療が終わるまで待つつもりのような。

程なくして新しくしたガーゼを傷口にあて、その上に包帯を巻き、黒深の治療が終わった。

「ありがとう」

「いえいえ、あ……そういうば貴方の名前、まだ聞いてなかったわね」

「ああ、名前も知らない相手にただいまってちょっとおかしい気がするけど。黒神 黒深、以後よろしく？」

「私は優月 苺飴、本当よく考えずともおかしいわね」

まったくだ。黒深が笑い、苺飴も一緒に笑った。

側で見っていた翼は

「女ってわからねえ」

そう呟きながら2人を見た。

翼は、慣れないことに迷っていた黒深が、苺飴と一言一言でその迷いを消したように見えた。

楽しそうに笑う黒深を見てほんの少し、動悸が早まったことに翼は気づいていない。

他の怪我人が来たところで黒深と苺飴は別れた。

手早く治療を終わらせていく苺飴を、どこか懐かしむような目で見ていた黒深は、気づかれないように軽く溜め息をつき、翼に言われ誠の元へと行くことにした。

誠は、昨日あてがわれた部屋の前で手を祈るように組み、何かを唱えている。

唱えている言葉は、誠の方へと歩くたびに鮮明に、はっきりと聞こえてきた。

それは祈りではなく、切なる願いだった。「早く帰ってきてただ、それだけの。」

「まーことっ！ 帰ってきたよー」

わざとかと思えるくらいの明るい声で誠に抱きつく黒深に、いきなりかかってきた重みによろけた誠が黒深を見た。

いきなりの再会により、誠が驚愕に満ちた声を出す。

「黒深？ 黒深！ よかった……心配したんだよ！？」

「う、うめんごめん」

焦り気味に謝る黒深が「心配する奴がいるなんて思わなかったから」と呟いた。しかし翼も誠も気づかず、再会を喜んでいた。

誠から離れた黒深は、誠を真正面から見据える。

「あのさ、家に帰りたくない？」

黒深の質問。

初めは笑顔だった誠もその質問を理解し、聞き返した。

「どっいっ、いっ？」

「今から家に帰ろうと思ってる。いるか……わからないけどね」

「どうして？ 今帰ってもどうにもならないよ？ それに、 或麻さんに迷惑かけているし……」

受けた恩は返すべき、 と思う誠は、 意図がわからないというように身振り手振りで示した。

黒深は、 それに首を振り、 側で腕を組み様子を見ていた翼が、 腕を解いた。

「お前何、 考えてる？」

「さあ、 何でしょう？ 自分で考えたら？」

挑発するような言葉に翼の目が険しくなる。

また喧嘩を始めてしまわないかと心配する誠は、 険しい眼差しを受けてもどこ吹く風の黒深が、 さらに挑発するようににやにやと笑っていることに不信感を抱いた。

折角戻ってきたというのに、 また喧嘩をすれば迷惑をかけてしまう上に、 今後の行動に支障が出ることを誠は気にしていた。

「今更帰って何になる」

「あんだ、 お母さんが心配じゃないの？」

意外そうに聞かれれば言葉につまるしかない翼に、 黒深がさらにたたみかけた。

「うちが何を考えていようと決めるのは自分、 で、 どうすんのさ」

早く決断を、 と迫る黒深に翼が言う。

神経をすり減らしてまで待つていた黒深が、怪我の治療も済んで安心した矢先、怪我のことも考えずに今度は家に帰ると言っている。翼は、そんな態度が許せなかった。睨みを利かせた目に、向けられた本人は動じず、誠だけが動きを止めた。

対して黒深の目には侮蔑とも取れる色が見て取れた。翼は気付かない、ただ睨み、視線と視線がぶつかりあう。

懐疑心に満ちた瞳に、黒深が諦めたような笑みを浮かべた。それは笑っているようで、泣いているようにも見えた。

翼が怯んだところで体当たりを食らわせた黒深が走り出す。

傷口が開いても気にしないとばかりに黒深は、全速力で走る。

「知りたいならついてこい！！」

言い切った後、ツバサを羽ばたかせ、黒い羽を落としながら疾走していく黒深。

誠は動けないまま、翼も一瞬のことで呆気に取られ、動けなかった。

入り口近くの方で癒羽の叫び声が聞こえたと同時に翼がスタートを切った。洞窟の中を全速力で駆け抜ける。

前に行く黒深は、後ろで追いついてくる翼を気にせず入り口から飛び出した。

黒い羽が地面へと舞い落ちていく。

空へ飛び出した墮天使を目撃した癒羽は、芙楼は頭の中に、墮天使が天使に復讐するかのような光景が浮かび何故、そんな光景が浮かんだのか理解することはできなかった。

続いて飛び出してきた翼は、黒深を追った。

ただならぬ雰囲気を感じ取った癒羽は、黒深と翼を追うべくツバサを出す。

「お前ら！ 何をしている！！」

癒羽の一喝に反応もしない黒深と翼はただ睨み合っていた。

地上の方では芙楼が、どこから出したのか古ぼけた紙に、ペンを走らせている。

こんな光景、一生かかってもお目にかかれないものだということに、今それが目の前で実現されている。芙楼は、その光景を正確に描いていく。

「俺がどれだけ心配したか、しかもいきなり家に帰ろう？ ふざけたこと言っただけじゃねえ！ まずは傷を治せ！！」

「ふざけてなんかいないさ、うちはいたって真剣だよ？」

「お前……！ いつも思ってた。お前はいつだって何か隠している。それが何だったとしても！！」

「へえ、あんたはいつもそう思ってたわけか」

零度の瞳に見据えられた翼が、燃え盛るような瞳で見返す。

癒羽は静止を聞かないまま対峙する黒深と翼に手出し無用と悟り、騒ぎを聞き取ってきた芙楼たちの下へと戻っていった。

その時すでに、芙楼は紙をしまっていた。

虚有も騒ぎを聞きつけ、癒羽に事態の確認を取っている。

「お前は何を考えている？」

「何も、だからこそ聞いた。帰るか、帰らないか……あんたは、どうする？」

一分一秒でも早く返事をよこせとばかりに言う黒深に、翼が急がされる。

「俺、は……」

問う黒深の瞳が、答えないなどと許さないと翼に圧力をかけている。

凍りついた喉で、翼は声を絞り出した。

「俺は……行かない、行けない三手n母さんが、いなくなつて、戻ってきて、またいなくなるなんて許さないだろうから」

母親を悲しませたくない、それが翼の導き出した結論だった。

いなくなつてしまった誰かが戻ってきたら、きつと誰しもが驚き、また手の届くところにいて欲しいと思うだろう。

特に翼の母親は、夫がいないことにより、余計に翼へと依存している。

黒深はそれを侮辱するでもなく、嘲笑するでもなく、ただ一度、笑顔を向けた。

何故か、とても嬉しそうな顔だった。

「うん、あんたららしい答えだ。或麻さん、悪いけどうち、ちよつと家に帰ってくるよ!!」

大声で宣言した黒深は、騒ぎに乗り出してきた人々に別れを告げ、姿を消した。

止めようと声を出そうとした癒羽は、誠に止められ、その姿を目で追うこととなった。

消えていく姿は、いつしか鴉のようにしか見えなくなった。

野次馬と化した人々が引き返していく中、誠は降りてきた翼を

迎えた。

翼の頬は、 湿っぽく、 濡れていた。

人は結局自分のためにしか生きられない。
。

ACT・12 行動前、ある種の始まり

ああ、空を飛んでみたいよね……え、いつかは飛べるようになるって？ 信じられない話だね……

空を飛ぶ黒深が腐臭を嗅ぎ取り眉をしかめた。

足に怪我を負った夜、ツバサのある者たちが処分されていた場所へと向かっている黒深は、腐臭を交えた風を纏いながら降下した。

腐臭のこもったそこには、先客がいた。

黒深の見据えた先に、女性が立っていた。

怪我を負った足をかばいながら地面に足をつけた黒深は、女性の姿を認めそちらの方へと歩いていく。

「久しぶり……母さん」

懐かしむような声が黒深から漏れ、その声を受け止めた黒神綺鬼くろしがみあやみは、無言で拳を突き出した。

拳は黒深の手のひらで受け止められ、離れないよう強く握られた。

これ以上やるなら本気でやると殺気を出し始めた黒深は、綺鬼と向き合う。

「あつぶない、なんてね」

しかし黒深は、鋭い刃のような目を、ぱ、と手を離すと同時に笑いに変えた。その顔は、笑ってはいなかった。黒深は、不器用な笑いを向けたまま綺鬼に背を向ける。

頭の後ろで手を組み、 2、3歩歩いたところでツバサを見せ付けるように広げた。

綺鬼と黒深の間に奇妙な沈黙が降りる。

ぼたぼたと地面を濡らす赤黒い液体に綺鬼が怒ったように言う。

「また怪我をして！ 何度も言っているでしょう、 怪我をするな、
って」

怒りながら黒深のツバサにある傷を見る綺鬼に黒深は、 笑ってごまかそうとした。

しかし誤魔化しは親である綺鬼に通用するはずがなかった。 同じく笑ってきた綺鬼は、 誤魔化しを行った黒深のツバサを容赦なく掴んだ。

「いつ、 つ……！！」

悲鳴と同時に、 逃げようと暴れて黒い羽が何枚も舞った。

そんな様子を見て、 綺鬼は得意満面に、

「ごまかせるとでも思った？」

そして、 更に強くツバサを掴む。

「あだだだっ！ やめっ、 痛っ！！」

勘弁してくれとばかりに、 力の限りに謝罪の言葉を叫びながら黒深が、 暴れた末にツバサをしまい、 涙目になったまま、 綺鬼を睨んだ。

黒深の目は、 涙目のままなので、 迫力はなかった。
完全に警戒してしまっただ娘に、 綺鬼は苦笑する。 それは、

ほんの数秒の間だけで綺鬼は、いつになく真剣な顔になった。

「……そこまでして、守りたかったの？」

何を、とは言わない。自分で解れと綺鬼は、黒深の答えを待った。

早くこの地を離れなければいけないというのに、黒深の答えを何秒、何分と待つ。

「ら、……から」

「ん？」

小声で言った黒深の声を、もう一度と綺鬼が聞きかえす。

「くだらなかつたから」

冷たく、凍えたかのような声が、黒深から発せられた。

らしくない。綺鬼は、その答えに満足しきれない様子を見せたが、とにかく移動を優先させるために、ここまで走らせてきた車に乗るよう促した。

「ホント、くだらないよ、全然知らないのにね……」

呟きは、誰に聞こえることもなく、車のエンジン音にかき消された。

大勢の集まれる広間は、蠟燭の頼り無い光を元に、そこにいた

人物たちを照らし出していた。

広間にいるのは、収容限界である50人の半分。25人程が、広間に集合している。

理由はと聞かれれば、答えられるのは5人くらいだろう。

まず一番に心当たりがあると答えるだろう2人と、様子を見ていた者が2人、面白半分で事情を知ったのが1人、といったところだった。

様子を見ていた2人のうち1人が、広間に人を集めたのだ。

「翼、誠……何故あいつを追わなかった？」

“あいつ”とあえて名前を出さずに癒羽が、聞いた。

翼は、そっぽを向いて発言を拒否。誠は、そんな翼を見てどうしたものかと考えている。

無言の空間で、ただ眠そうにあくびをする芙蓉は、寝ると一言残して退室した。それを誰が止めるでもなく、また沈黙が戻ってきた。

事実を知らないまま集められた人々は、この沈黙をどうにかして欲しいと切に願った。

「黙秘、か……仕方ない、先に会議のほうを始める。虚有」

「わかった。」

黙ったままの翼と誠を置いて癒羽は、部屋の隅に立つ2人から背を向けて、広間に集まった者の方へと顔を向けた。

虚有は、日本とその周辺の地図を広げた。大きさがそれなりにあったので集まっていた内近くにいた数人が、地図を広げる為に手を貸す。

赤丸がついているのは海上の何もない場所だった。

赤丸は、ツバサの生えた人々が大勢いる場所。

背を向けられている翼や誠は、知らない。元からここに夕誰も
もがそれを知っていた。

霧困気は、一気に重苦しいものへと変化する。

そこまで霧困気が重くなると、翼もさすがに気になってきたよ
うで地図へと目を向けた。

誠が、小さな声で癒羽を呼んだ。言いにくいことでもあるの
だろうと考え癒羽は、誠と共に広間から出る。

「何だ」

「黒深のこと……です」

癒羽を呼んだときより小さな声、そこには確証のないものを発言
することに對する遠慮が現れていた。

自分のことを、ましてや人の事情などを話すことを好まない誠
は、戸惑っている。

誠と癒羽の間には沈黙。そのすぐ近くでは虚有が、前々に癒
羽から聞いていた計画を集まった人々に話していた。

たまに聞こえる質問の声やそのことに対する返答、時間だけが
過ぎていく。

これ以上時間を無駄にできない。と癒羽は、広間に戻ろうと
組んでいた腕を解いた。

「聞いて、ください」

「早く言え」

「“RET”という名前、知っていますか？」

癒羽は、微かな反応を示したが、誠はそれに気付かない。続きを促す癒羽は、心中穏やかではなかった。その言葉が、癒羽にとってはとても重要なことであつたからだ。

「黒深は、黒深のお母さんは、そんな名前の組織にいる。と、そしてその組織の一員でもある。と黒深がいつか言つていたと思つんです。もしかしたら、いなくなった理由はそれじゃないかと……」

「なるほどな、つまり黒深の戯言程度の言葉だ、確証はないのだろう?」

否定的な言葉に、誠は俯いた。

話はここまでだと打ち切つた癒羽に、広間には呼ばれず、医務室で怪我人の手当てをしていた苺飴が、現れた。誠と癒羽を交互に見て数秒の後、今までの騒ぎで忘れていた人がいる。苺飴は、その存在を口にした。

「麻奈ちゃん、て知らない? 私は、医務室を離れられなかつたから見ていないんだけど、小さな女の子なんでしょ? 誰も見かけていないって言うの」

「ああ、そんなことか。」

「そんなこと?」

麻奈の居場所を知る癒羽は、麻奈が自分の家に帰りたと言い出したことと、親を心配させたくないということをリーダー格である自分へと告げて、自分の家へと帰つていったことを教えた。

事実を知つてもまだ小女である麻奈を心配する苺飴は、気を紛

らわそうと話題を変えた。

「今、 広間で何を話しているの？ 私は呼ばれていないみたいだけど」

それは、 広間に呼ばれなかった人のうちで、 医務室にお世話になっっている人々が一番気になってのことだった。

代表者として苺飴が来たのは、 癒羽が厳しく当たらない人物の1人だからだ。 その厳しく当たらない、 に該当する2人目は、 広間の中で質問に答えている最中だった。

ある程度の説明が終わり、 虚有に質問をせずとも仲のいい間同士で計画に対する話をしていた。

「これから、 ツバサを持った人々を救出する。 ただ、 私は別行動だ。」

「何故？ 癒羽、 こんな大事な局面の時に何を考えているの？」

苺飴の非難めいた言葉に、 癒羽はだからこそだと付け加える。

「例えば西の方から救出するならばそちらに注意が寄るだろう？ その間に、 他の収容所の様子を見てくる。」

計画遂行に安全性を増やしてやりたいと考える癒羽が、 一步も譲らないとばかりに顔を引き締める。

しかし、 それでも苺飴は納得するわけにはいかなかった。

「だからって、 一人じゃ危険よ！！」

一人であることの危険性、 怪我をする可能性も考慮した苺飴は、

必ず一人で出て行くであろう癒羽を止めたい。

莓飴の必死な表情と、頑として譲らない雰囲気を見せる癒羽。誠は、その結末を見ることをせず、広間へと戻り計画について虚有に聞きに行った。

「莓飴、諦める」

「却下します。そっちこそ一人で行かず、せめて誰かと二人で行くことを約束してください。」

互いの意地の張り合いに、どちらが折れるのか。

莓飴は、自分の失言に気付いていない。

「なら、お前が一緒に来るといい」

「え、私？」

「一人でなければいいんだろう？ それなら丁度暇だろう？」

「駄目よ、まだ怪我人がたくさんいる。私はここに残るわ」

面倒ごと回避した。莓飴は、怪我人を盾に、同行を拒否した。

怪我人というのは、今広場に呼ばれていない者全員のことを示していた。

程度の軽い重いはあるが、立派な怪我人である。それを放っておくわけには行かない、莓飴の強い意志が、表情に現れている。

「……その怪我人、よほど暇らしいな？」

苺飴が固まる。癒羽は、苺飴の背後を示した。
たくさんの声、今は医務室となっているスペースにいるはずの人々が、今の会話を聞いていたのだ。

骨折など、軽度の怪我人に比べれば重い症状の人も、軽症の人に肩を借りて聞き耳を立てていた。

今頃医務室は、空っぽになっているだろう。

「すまねえ、苺飴ちゃんよ。」

しわがれた声の男が、怪我人代表として謝ると、癒羽のほうへと近づいていく。

男は、足に切り傷を負っていたので、怪我をした方の足を引きずりながら歩み寄る。

怪我人たちは、ただその男性が何をするのかに注目した。

苺飴が、男に無理をさせないように、強制的に肩を貸した。

「ありがとうな……癒羽さん、お願いがある。」

「何だ。」

「苺飴ちゃんの変わりに、俺を連れて行ってくれんかの？」

「駄目だ、第一お前は怪我をしている。連れて行くのは危険すぎる。」

癒羽の言い分も最もだった。しかし男性は諦めようとしなかった。

「これくらいの傷どうともなる。正直に言おう、俺はあんたが心配なんじゃない、あんたが一人で行って心配をする虚有さん

や苺飴ちゃんが見ていられないからだ。」

前にもこんなことがあった。男性はそう続けた。

未知の粉騒ぎがあつてすぐ目を覚ました彼らは、元より心配性の苺飴が、情報収集するとだけ言つてどこかへ行つてしまった癒羽を、徹夜で探し続けたことを知っていた。

虚有も、苺飴のことを心配する男性たちをまとめるのに必死で、寝ていないことがあつた。

だからこそ男性たちは、癒羽を一人で行かせることに反対しているのだ。

「……言い分はわかつた。しかし私に誰を連れて行けと？」

先ほどよりも冷めた声、二人以上での行動を余儀なくされた癒羽の、ささいなあてつけ。

男性や怪我人たちは、癒羽の説得に成功したことで喜んでいる。誰を連れて行くのかなんて考えていない、ただ誰かを心配させなくなかつた彼らの勝利だつた。

癒羽は、そんな喜びを見せる怪我人たちをどこか遠い目で見ていた。

誰が同行するのか、考えて真つ先に浮かんだ人物を苺飴が声に出す。

「それなら翼はどうかしら？」

苺飴の提案、癒羽が不機嫌な声を出して反論した。

「あいつは駄目だ。まだ頭に血が上っているだろうからな」

「あら、彼はもう冷静よ？ ほら」

誠が広間に戻ってから翼は、入れ替わりになるように広間の入り口に移動した。

成り行きを見ていたことは癒羽も知っていた。

だからこそ、あえて言葉にして動向の拒否を示したというのに、翼の中で決心は固まっていた。

「連れて行ってくれ、 尊飴は冷静と言ってはくれたが、 もう少し頭を冷やしたい。」

だが足手まといになるつもりもない。 戦力外告知をされないうように言った言葉に、 癒羽は仕方ないとばかりに微笑を浮かべた。

広間の方では会話がやっとまとまったようで、 一人、 また一人と広間から出て行った。

個人個人で準備を始める為だ。

少しずつ人口の減っていく部屋の最後に出てきたのは虚有と誠。

怪我人たちや尊飴の見守る中、 堂々と歩いてきた二人は、 翼と癒羽と向き合った。

「翼、 気をつけてね？」

「わかってる。」

「虚有。 後は任せた。 お前の力に期待する」

「……ああ、 期待はずれにはさせない。」

翼と誠、 癒羽と虚有。 互いに言葉を交わし、 翼は癒羽と出口へと向かっていった。

誠はその姿が消えるまで見送ると、 尊飴や怪我人たちと軽い挨拶

拶を交わし、あてがわれた部屋へと戻っていった。

それぞれが、役目を持ち動き出した。

今は前に進むのみとばかりに、自信を持った歩みで、誠が去っていく。その背中を怪我人たちと並んで見送った虚有も、尊飴に自分たちがいなくなつた後の全権を任せて、計画の開始を待つことにした。

今はただ、振り返らずに進むのみ

ACT・13 行動中、それぞれの

空を飛べたら、遠くへ行っちゃったお母さんに会えるのかな？

会話を終えて医務室に戻った苺飴は、一息つくと周りに怪我人たちがいないうちに寂しさを覚えた。

怪我人たちは、それぞれ部屋に戻って何やら話し合いをしているようだ。

誰もいない医務室で一人椅子に座って呆けている苺飴に、誰も声をかけない。誰もいないから当たり前だ。

「怪我人はいない方がいいのに、いないとしないで……寂しいものね」

困ったものだと思はれ、まだ出掛けていない誠や虚有のところへ行こうと考え始めた。

その方が寂しさを紛らわすことができると思った結果だった。

医務室から出ようと立ち上がった苺飴の前に、黒い影が落ちる。蝋燭でゆらゆらとする炎で揺らぐ影は、芙楼のものだった。

それなりに身なりを整えた芙楼は、どこから手に入れたのか鉛筆やスケッチブック、色鉛筆などを詰めた緑色のバッグを肩にかけている。

何の用なのだろうか、苺飴が訝しげに芙楼を見上げた。

「黒深を追ってくる。」

「何故？」

苺飴の言った何故、には何故現リーダーとなった虚有のところ
に言いに行かなかったか、何故今更いなくなってしまった黒深を追
おうと考えたのか、の二つの意味が含まれていた。

芙楼は、その両方の意味を的確に汲み取っていた。

「理由その一。この大事な局面で人員を逃がすなんざしそもな
いから、その二。あいつに聞きたいことがあるんだ」

「私が虚有に言うかもしれないわよ？」

「それならそこまでさ、で、止めるのか？ 女性に手荒なまね
はしたくないとは思っているが……」

芙楼は、止めるのなら容赦はしないと構える。

今この場に怪我人たちがいれば、事態は違っていただろう、

しかし今この場にこの状況を変えることのできる人物はいなかった。

部屋から出て行こうとした芙楼を、苺飴が呼び止める。

止めるつもりなのか、芙楼が面倒ごとを嫌がるように苦い顔を
した。

ただ、苺飴は、止めるつもりもなく少し待つように芙楼に言
った。

早く黒深を追いかけて芙楼にとっては、苛立ちを募らせるば
かりだったが、今、人を呼ばれるのは望ましくないため、諦
めて待つことにした。

一旦医務室を見回した苺飴は、探していたものを早々に見つけ
ると、それを取り出して芙楼に渡した。

小さいとはいえ、それは救急箱だった。中には、絆創膏や
ガーゼ、消毒液や湿布薬が詰められていた。

「持っていった、怪我をしたら大変だから」

「いない」

「人を呼ぶわよ？」

声を出そうと軽く息を吸い込む苺飴に、芙楼は苦笑するしかなかった。

「わかったよ、持って行く」

かさばってしまう救急箱を、バッグに詰め込んだ芙楼は、早足で歩き出した。

「癒羽には気をつけるといい」

あいつは何か考えている。一言警告すると後は、妙に角ばったバッグを肩に、芙楼は出て行った。

これで外部から来た人は、誠を残し誰もいなくなった。この隠れ家から。

苺飴は、すでにここからいなくなった癒羽と翼のことを考えた。何もかもが突然だった。苺飴にとっても、癒羽にとっても、全てのツバサを持つ人にとっても。

激変した日常に、溶け込めずに否定し、いなくなる人も少なくなかった。

それを救ったのは癒羽、苺飴は、癒羽に救われた人の一人だった。

困惑しきって、人の視線が集まることさえも気付けずに、街を浮浪者のごとく歩いていた苺飴を癒羽は、今の隠れ家へと連れしてきた。

何かできることがないか、考え続けた末に出した結論は、怪我をした人を助けること。
それから苺飴の生活は、誰かを心配し、助けるために日々尽力することになった。

「皆、無事で帰ってきて……」

小声で発した言葉は、意外にも響き、苺飴を驚かせた。
そして、あまり間も空けずに虚有と共に行く人の一部が、出て行くことを告げた。

×××××

木々によつて洗われた空気が、風によつて運ばれる。

天候は晴れ、多少の真っ白な雲があるが、雨が降る前のような灰色はしていない。

外に集まった虚有や誠は、怪我人たちと苺飴に、別れを告げた。

もうすぐ正午を知らせる音が鳴り響く頃だろう。
人から見ればたったの数日、一日に2、3日分を詰め込んだような日々を過ごした隠れ家との一時的な別れ、それでも寂しがる人は少なくはなかった。

緩やかだった風が、一度だけ強く吹いた。

それを合図とした虚有は、薄青色のツバサを出し、先頭になつて飛び立った。

いくつものツバサが、光に透けて綺麗なグラデーションを作り出している。

苺飴は、その光景にしばし目を奪われていた。虚有たちの姿が消えても動かない苺飴を、怪我人の一人が呼んだ。

「ええ、 わかったわ。 私は私のやれることをしないと」

×××××

「填間さん、 これから向かう先は東京側でしたよね？」

上空を高速移動しながら誠は、 確認を取る。

虚有は、 わずかながらも頷いた。

そのわずかな首の動きを見ていた誠は、 どうしたものかと考えた。

移動していることには問題はない、 向かっている先が問題なのだ。

「どうして私たちは海の上にいるのでしょうか？」

ミヤーと能天気な声を出す鳥が誠の上空を通り過ぎていった。

進路が癒羽によって行くことを決められた場所と違っている。

そのことに対し、 誰も文句を言っていないことも、 誠の疑問の一つだった。

虚有は、 苺飴たちと別れてから一言もしゃべっていない、 誰かが話しかけても声は出さず、 頷いたり首を振ったりといったリアクションしか返ってこない。

全員が計画を実行するために行動しているとはいえ、 多少の不満はないとは言えなかった。

しかも、 このまま進めばつい最近危険を冒してまで抜けてきた戦艦がまだいるかもしれない 誠は、 不安感を胸に、 虚有を見た。

目に感情が見えない、 まるで死んでいるかのような目。 癒羽や苺飴と話している時にだけ微かに見せるほんの少しの感情、 これまでの間に何があったのか。

気になる。でも、聞いてはいけないものだと言は自制的だ。

「このまま“囲い”の近くにある施設へ？」

頷く虚有に、誠は続けて聞いた。

「何故、癒羽さんの指示に従わずに行動してるの？」

今度は頷きもせず、首を振りもせず、沈黙が返ってきた。

誠が他の人へと視線をやれば、全員が全員口を閉ざした。

後から来た部外者である誠としては、仕方がないと思えるところもあったが、どうしても納得することはできない。

口を閉ざした者たちも、困ったように視線を交わすばかりだった。

このままついていくべきか、いかないべきか。微妙な線で悩む誠に、誰も声をかけない。

「……一つだけ、教えてください。これはあなただけの独断ですか？」

首を振る。まあもしこれが独断だったら誰もついてくるはずがないか。

もっげもげーによっー！！

「あ………」

この重苦しい沈黙の中、ありえないほどに陽気な声が誠のポケットから響いた。

数名が誠の方へと視線をやり、興味をなくして前を向く。

声は、人気アニメ「もげネコ」の主人公ともいえるもげネコの

鳴き声だった。

ポケットから取り出したのは携帯電話、今まで電源を切っていた携帯を誠は、ついさつき電源をオンにしたのだ。

携帯を取り出したと同時に、携帯につけていたもげネコのストラップや、携帯会社のマススコットキャラのストラップが揺れた。

もげネコの声に、誰もが興味をなくしたと思えた。しかし、一人だけいた。

目を見開きつつももげネコを注視する男がいた。

「そ、れ」

虚有だ。

突然目の前に現れた虚有に、叫び声を上げそうになった誠は、虚有の視線がもげネコ一点に集中していることに気が付いた。

もげネコを見る虚有の目は、どこかうっとりとしていて、はつきりと誠に言わせてしまえば気味が悪かった。

「もげネコ、好きなんですか？」

「……」

こくりと頷く虚有が、誠の持っている携帯にぶら下がって揺れるもげネコをつまんだ。

子供みたい。そんな感想が誠の中で生まれた。

今日の前で柔らかく笑う虚有を、悪い人と見たり人の言いつけを守らないような人として見ることは、誠にはできなかった。

誠は、虚有の手からもげネコのストラップから手を離してもらい、携帯からそれを外した。

「あげます」

「……いい、のか？」

言いながらも、手はもげネコを掴んでいる。
苦笑交じりに誠は言った。

「いいですよ、まだ持っているから」

言い終えた時には虚有は、もげネコを大切そうに握り締めていた。
悪い人じゃなさそうと認識した誠は、今向かっている施設に留
まっているはずの愛の^{まな}ことを思い出す。

自分よりも幼い子がまだあそこにいると考えると、急に気にな
ってきてしまう誠は、一つ気付いたことがあった。

“ 困い ” の近くにある島のことだ。

狂ったような男のいたあの島、麻奈は、どこへ向かったのだ
ろうかという疑問が誠の頭に浮かんだ。

未だ嬉しそうにしている虚有に、申し訳なさそうにしながらも
誠は、虚有を呼んだ。

「麻奈ちゃんのこと、知りませんか？」

「麻奈？ お前たちと来た子供か……癒羽によれば自分の家へ帰っ
たらしい。」

癒羽は、麻奈が自分の家に帰ると報告を受けた後、苺飴や虚有
にいなくなることを伝えていた。

それを知って安心した誠は、帰った、という単語に疑問を持
った。

兄である司と一緒にいたのならば、家はあそこではないのだろ
うか。

しかし、麻奈が、もう一度あの島へ戻るなんて事を考えられなかった誠は、はるか遠くに見える米粒のような島を捉え、先頭に戻った虚有へ近づく為に飛ぶ速度を上げた。

「あそこに、島があるのわかりますか？」

「……ああ」

「結構な距離を飛んできましたし、あそこで休みませんか？ 夕暮れも近いし」

虚有の近くで飛ぶ誠の提案を、近くにいた人々は聞いていた。

反対を示す者が少数ながらもいた。ただ、長く飛ぶことに慣れてない人もいるため、その提案は可決されることになった。

何故いきなりそんなことを言い出したのか、虚有は聞かなかった。誠も、あえて何も言わずに、少しずつ近づいてくる島だけを見る。

夕暮れは、近い。

×××××

癒羽と翼の二人は、今、市街地を歩いていた。

向かっているのは西側、虚有たちが向かっているはずの場所と正反対の場所だった。

飛ぶのは目立つ。という癒羽の提案で、バスや電車を使い継ぎながらも海へと向かっていたのだ。

海は目前ということで、歩きに変えた癒羽に、何も言わずについていく翼。

会話がないのだ。2人とも、どちらかといえば無口な方で、自分から話すことはあまりしないタイプだった。

波の音が聞こえ始めてきたことで、翼は、俯き加減だった顔を上げた。

つい歩く速度を上げてしまった翼だったが、癒羽は気にも留めずに歩くペースを軽く上げる。

砂浜へと降りる自然と固まって出来上がった砂の階段を下る。

周りには誰もいない。夕暮れの近づく海は、光を反射して赤みの強いオレンジ色をしていた。

「誠たちがおびき寄せている間に行かねえとな」

海の彼方を見ながら翼は、純白のツバサを広げた。

ゆっくりと海へと近づく翼に、癒羽は、砂の階段を下りたところまで立ち止まったままだ。

早くと急かそうとしている翼に気付いているのか、癒羽は待つように言った。

「何だ？ 早く行くんだろ？」

「違う、私たちは行かない」

何だと？ 一体なんでそんなことを。翼は混乱した。

今更ふざけているとも思えない癒羽を、呆然と見つめる。

癒羽は、真面目な眼差しで翼を見つめ返す。

そしておもむろに手を差し出した癒羽は、

「SEEKへと来ないか？ 翼」

そう聞いた。

何を、と思った翼は、何のことだか分からずにただ、固まった。

癒羽の隣には、いつの間にか白衣の女が佇んでいた。

何の歯車が抜けたのか、増えたのか、知る者はいない

ACT・14 さらわれ人・待ち合わせ人

空は、子供の頃のあたしにとって不思議がたくさん詰まっていたんだ。

どこかで見覚えがある。この女は誰だ？

癒羽がいきなり何を言い出したかと思えば、見知らぬ女の登場、訳が分からない。

一つだけ、分かっているのは見知らぬ白衣の女が、俺はなんとなく、心の底から嫌いだということだけだった。

「SECなんて名前聞いたこともない、一体何なんだ？俺たちはやるべきことをやるんじゃないかねえのか？」

いきなり話し出したと思えば何だ。

誠や虚有たちが頑張っているっていうのに、俺たちだけ何もしないわけにはいかない今なのに。

海は、あと数歩歩けば届く場所に、ツバサは、一応しまった。

「今、私と一緒に来るか決めることが、今やるべきことだ。翼」

ふざけるな、声には出さないが心の中で怒った。

冷静になれ、俺。とにかく話を聞いてからだ、でなければ何か重要なことを見落とす。

これは、昔誠が俺に言ったことだ、隣には黒深もいて、にやにやと笑っていやがった。

「なら、そのSECってやつが何なのかを教えてもらおうか？」

「……駄目だ」

「はあっ?!」

ふざけるな。誘っておいてそれかよ、ふざけているにも程がある。

勝手な行動をしていなくなった黒深と同じじゃねえか、いや、あいつ程には怒ってないけどな。

元はといえば見知らぬ他人、一緒に行動して、勝手な行動を取る一面を見ただけだ。

それに対してあいつは、元から曖昧で、適当で、人を苛つかせる天才だ。だから余計に苛ついた。

はあ、癒羽と一緒にいるにも嫌になってきた。

誠を残すのは悪い気がするうえに、勝手に離脱したとったら黒深が怒るだろう。て、関係ないか。

「駄目なら、俺は行くぜ」

「どっへ」

静かな声、冷静な目。俺からすればとてつもなく嫌な目。とつとと退散するかな。

「翼、私と来い。貴様の親もいる」

何だつて?!

表面上は冷静さを装いながら、俺の心は動揺していた。

母さんが、何故そんなところへ。

嘘かもしれない、絶対そうだ。子供だからって、そんな言

葉で動揺させるつもりなんだ。

「ふざけるな、俺は行く」

ツバサを再び出して、地面から1メートル以上浮いた俺の足を、

白衣の女ががっしりと掴んだ。

バランスを失いかけ、むちゃくちゃにツバサを動かした。

女は、俺を見上げてきた。

見たことがある。この蛇のような目に、誰もを惑わすような

赤い唇、日焼けのない真っ白な肌。

違う、見たことなんてない、俺はこんな奴、知らない。

そうだ、俺は知らない、こんな女のことをはずがないじゃない

いか。

この時の俺が、どんな顔をしていたのか。女は、真っ赤な

唇を笑みの形にした。

「忘れちゃったのかなあ、あたしのこと? いいえ、消し去って

しまった。のかしらあ?」

妙にのびる語尾、相手を絡める取るかのような声、気持ち悪い。

女を振りほどくにさほど時間はかからなかった。拘束は解けた。

だが、俺の体は動かない、動けなかった。

頭が警鐘を、体は止まれと。

畜生、動けよ、俺。

「覚えていないのねえ……杏^{あんず}、その名前に聞き覚えはあ?」

「あん……………」

呂律の回らなくなった舌で転がした言葉は、俺にとってとてつもなく苦く、嫌な思い出の鍵を外そうと暴れる。

頭痛がする。

早く、ここから立ち去りたい。無理なら、誰でもいい、人さらいでもいいから俺をさらっていつてくれ!!

「おとおさんの再婚相手も忘れちゃったのぉ？ 困った子ねえ、よ・く・く・ん？」

嫌だ ！！

閉ざした昔の記憶が、心をきませた。思い出してはいけない、頭はそう判断したようで、視界は、真っ暗になった。

×××××

「……………翼？」

「どうしたの、黒深？」

車に乗って結構な時間が経った。

窓を見続けていた黒深が、突然人の名前を詠んだことに綺鬼は、疑問を感じた。

車に乗車してからの数時間、黒深は一言も発することもなく、綺鬼が持ってきた予備の携帯 入っているデータは全て同じもの。に入れてある音楽を聴き続けていたのだ。

ヘッドホンを外した黒深は、綺鬼の座る運転席へと後部座席か

ら乗り出した。

危ないという忠告をしながらも綺鬼は、黒深の言葉を待った。数秒間、車の走る音だけだったが、綺鬼のすぐ後ろからぼそぼそとした声が、綺鬼へと届く。

「何でもない……気にしないで、あと車。気付いてる？」

バックミラーに移っている車が先程から全然変わらないことを、黒深は報告した。

綺鬼は、運転しながら何度か複雑に曲がったというのに未だについてくる、赤い車があることを確認した。

目当ては明らか、どうやって撒くか、綺鬼は片手で運転しながら今ではあまり見ることもない、折りたたみ式ではない携帯を取り出す。

それは携帯ではなく、発信機のようなもので走行中の車の近くに一つ、小さな光が点滅していた。

小さな光から伸びている情報は、綺鬼の知る中で最も力を持つ人間のものだった。

ただし、援護は期待できないようで、その小さな光は、車以上の速さを持った乗り物で移動しているらしく、情報を表示する画面の上から消えてしまった。

その情報のログを黒深に預けながら、綺鬼はバックミラーが何かの光を反射していることに気付いた。

「伏せてっ!!」

叫ぶのが先か、伏せるのが先か、響いたのは金切り声にも思える砕けたガラスの破片たちの合唱^{コーラス}。

アクセルを踏み込んだ車が急発進と同時に、大きく揺れた。

次いで響く銃声に、ただの通行人にすぎなかった人物が、ま

るで映画に組み込まれているかのような立場シチュエーションに面することになった。後ろから尾行を続けていた車に乗っている狙撃手は、よほど腕がいいのか、通行人に当ててしまふなどといったドジをかますことはない。

その事実を裏返してしまえば、綺鬼や黒深を正確に狙ってくる。ということだ。

「ちくしょっ、何なんだよあいつら！」

「伏せてて！ あとあまり喋らずに、舌を噛むわよー！」

言いながらさらにアクセルを強く踏む綺鬼、一体今の時速はいくつなんだよ。黒深は、舌を噛まないようにしながら、小声で言った。

座席に座っていた黒深は、今は運転席と後部座席の間にある隙間にしゃがんでいた。

エコロジーのために作られたエコカーは、騒音もなく駆け続ける。騒音、それは車の出す音ではなく、狙撃手の放つ弾丸によって奏でられる何かが破壊される音。

隙間にしゃがんでいたはずの黒深は、座席の下に置かれている黒い箱を開けた。

入っているのは回転式の拳銃。それと弾丸。

弾丸を装填、撃鉄ハンマーを引き起こすまでの時間は約数秒。

一直線に走り続けることなど不可能な道路。時折曲がることによって体が揺れる。

狙撃手が、曲がる瞬間に撃ってしまった無駄弾の数を数えながら、あちら側の銃弾がきれるのを待つ。

黒深は、数回の深呼吸と、銃弾が尽きるその瞬間に、座席から拳銃を構えた両腕を突き出した！

乾いた音が一つ。

その直後に響く車がどこかの家の塀にぶつかる音。
綺鬼と黒深は、もう後ろを振り返ることはなかった。

×××××

人が立っていた。

これだけの表現では誰が、どうして、どこに、
が抜けてい

る。
さらに詳しく表現するとしたら、芙楼が、綺鬼に合う為に、
黒深が司と麻奈に出会った島に、だ。

今、この島に主はいない。
すでに命のない人間を除けば、完全な無人島だった。

「……来たか」

視線を落としていた芙楼は、自分の影の上に別の影が重なると、
顔を上げた。

急速落下してきた影は、顔面から着地する。

痛みからか、驚いているのか、動かない人物の上では、白
いツバサを生やした少女がいた。

不時着した母親から怒られないか冷や汗を流す黒深は、芙楼の
姿を見つけて、絶叫した。

絶叫が芙楼の耳を塞がせる。

砂だらけの顔を地面から離れた綺鬼が、芙楼の姿を認めると素
早く立ち上がった。

「ふ、芙楼、あんなんでこ……いぎやつ?!」

「あんななんて呼ばない！彼は私の上官なのよ?」

黒深の頭に拳骨が落ちる。

綺鬼の言葉に再度驚く黒深に、芙楼は軽く笑って二度目の拳骨を落とそうとしている綺鬼を止めた。

「じよ、上官？え、嘘。 どういうことだ！！」

「どうということも何もなあ」

頭をかきながら芙楼が言う、つい最近に出会った人物は絵描きだったはずなのに、実は親の上官でした。 などといわれて誰が信じられるのだろうか、黒深は混乱した。

黒深の混乱した顔を見ながら、芙楼は異国を思わせる瞳を隠していた長い前髪を掻き揚げた。

「俺、俺様は R E T ^{リト} 諜報部の司令官つて奴だ。 まさかあそこで綺鬼の子供に遭うなんぞ思ってたぜえ？」

獰猛に光る瞳と、犬歯が煌めいた。

今まで見ることのなかった芙楼の意外な一面を、黒深は見た。

芙楼、お前に一体何があったんですか？

しかし納得できる部分もあった。芙楼にはどこか謎な部分が多かったのだ。

「……お前つて、元からそういうキャラ…？」

「だからお前とか言わないっ！！」

結局二度目の拳骨を喰らってしまった黒深は、芙楼へと涙目になりかけている目を向けた。

「元から、つてわけじゃないな、言うなればどんな個性をこなす為に作った幾つかの人格の一つだ」

説明はしたがそのままのキャラクターで通すつもりの方楼は、多
少なりとも落ち着いてきた黒深と、顔についた砂を払う綺鬼へと
移動しようとして提案した。

青かった海は、オレンジ色に染まりつつある。

移動しようとして提案した方楼は、元は司が使用していた家へと歩
き出した。

「あと少し、夜が近くなれば他のお客様もやってくる」

「お客様？」

「すぐに分かる。そういえば……」

先導しながら歩く方楼は、後ろに続く黒深の歩調に合わせて隣に
並んだ。

「お前つてさ、順応力あるよな」

「ん？ まあね。そういや、あんた一体何歳？ 大人なようで
子供なような感じで、よくわかんないんだよね」

「21」

「ええーっ!？」そんな絶叫が、騒がしくなった島へと響き渡つ
た。

今ある夕暮れを、夜の闇が多い尽くすまで、あまり時間はか
からない。

運命など、信じるものより呪うものの方が多いだらう。

ACT・14 さらわれ人・待ち合わせ人（後書き）

最近連載を始めた未来、希望、私たちと並行して連載していきたい
と思っています。 作者は気まぐれ更新をよくしますが、気長にお
待ちいただけるとありがたいです。

ACT・15 役者の退場、展開

空：地上から見上げるところ。天。

空、 とはどこからが空なのだろうか？

無菌室の中、 眠り続ける少年がいた。

少年はうつ伏せにされ、 両手首、 足首には金属の拘束具が、
何も纏わぬ肌へと直接つけられていた。

辺りには誰もいない。

微かな寝息だけしか聞こえてこない部屋の、 自動ドアが開いた。
空気が抜けるような音が響く。

「……目覚めないな」

部屋に入ってきた男は、 他の、 白衣を着て、 ゴム手袋、 マ
スクを着用した者たちへと話しかけた。

無感動を思わせる声だった。

「睡眠薬は使っていません、 何故目覚めないのかも謎です。 し
かし……脈はあります」

死んではいない。

それが重要だというように、 答えた白衣の人間はそこだけを強
調した。

「それならば問題ない。 メス」

銀河は、 回答を求めた人間に、 道具をよこすように言った。
渡された刃物は、 真っ白な部屋の中で、 鋭く煌めいた。

×××××

もうすぐ夜になる頃だろう。

芙楼は、 誰かと熱心にメールをしていた為、 話しかけるのが
ためらわれた。

綺鬼と黒深は、 互いに情報交換をしている。

黒深からは、 連れて行かれた施設の、 見た限りの構造を。

綺鬼は、 自分が調べられただけの、 ツバサを持った人々の家族
についての情報を。

互いに知らない情報を、 頭の中へ叩き込みながら、 綺鬼は、
時折携帯画面を見て笑う芙楼から、 少し離れたところへと黒深
を移動させた。「内緒話？」茶化す黒深に、 綺鬼は拳骨をあげ
た。

「黒深……手短に言うわ、 R E T ^{リット}に行きなさい。そして、そ
のツバサを取り除いてもらいなさい」

「は……?! な…!?!」

一気に混乱して、 困惑した顔をする黒深を見て、 綺鬼は少し笑
った。 よく聞いて頂戴。 そう前置きをして話し始めた。

「そのツバサは普通の人の体の倍以上のエネルギーを必要としてい
るの、 だから、 もし食事をとり忘れた。なんてことをしてし
まったらそこで、 体中のエネルギーを吸い取られて死んでしまう
……そんなこと、 嫌でしょう? それに、 SECの人間たちは
ツバサを持っている人を狙っている…あなたを危険にさらしたくは

ないの、分かってくれるわよね？」

最後の言葉は、どこか押し付けるようなものだった。

エネルギーの大量消費、体内の栄養の喪失。逃げ出した人々の突然死……。黒深の中で、何かが繋がる。そうか、そういうことね。

納得したように、黒深は小さく頷いた。

「でもさ、ツバサこぶさがないと不便だし……」

「移動手段ならこっちで手配しているわ」

「そりゃ手回しのいい事で……てか、ツバサを取り除くって……どうやって？」

「切るのよ」

何のためらいもなく発した言葉に、無意識的に2、3歩ほど後退っていた。黒深は、懐疑的な視線を向けながらも、後退るのをやめた。

逃げたってどうにもならないと知っていたからだ。むしろ、今の内に聞きたいことを聞いておいたほうがいいのだろうと考え、身構えはしたが、懐疑的な視線を送ることは自制した。

「その最中に死んだりしたらどうすんのさ？ てか、何でその方法があると知りながら他の人を助けないわけ？」

2つの質問を一度に答えられないので、綺鬼はまず、最初に聞かれたほうの質問から答えることにした。

「死ぬことはないわ、一瞬で終わる……それと、他の人を助け
ないわけじゃないの」

そこで一息置いて、綺鬼は辺りを見回した。丁度見えるか見え
ないかのところで、芙楼が、携帯の画面を見ては、空を見上
げると言う動作を繰り返していた。

関心がこちらにないと確認してから、綺鬼は、続く言葉を発
した。

「今は“人を傷つ^{ためらわない}ける”力がある人間が必要なよ、彩深^{さいしん}。あ
なたが分かっているはずなんてないでしょう？」

まるで、自分を偽っておきながら何を言う。刺すような言葉に、
黒深の表情が凍りついた。俯く彼女の頭の隅では、眠らせて
いた、自分で閉ざしていた何かが脈動を始めていた。

言い過ぎた。などと思っていない綺鬼はもう一言発しようとし
ていたが、メールでの会話が終わった芙楼が近づいてきた為、
諦めた。

未だ俯いたままの黒深に、あえて声をかけるといふ野暮なこと
はしないで、芙楼は、綺鬼を相手に指定した。

「面倒なことが起こった」

たったの一言だったが、そのセリフに、苦々しい顔をしたのは
綺鬼だけではなかった。芙楼も先程離れた場所にいた時、見せ
られないほどに緩んだ顔をしていた時とは違っていた。

その報告は、間違いなくこの後の行動に何かしらの影響を及ぼ
すだろう。そう考えれば、苦々しい顔になるのは分かる。

芙楼が言う「面倒なこと」は何か、綺鬼は即座に幾つかの
仮定を立てた。1つはSECがおかしな行動を起こしたか。も

う1つは、誰か、計画の主要となっている人物の誘拐。一番確率が低いものとして、SEC側が、兵器を持ち出してきたか。綺鬼は、妥当なところとして、人物の誘拐を想像した。

「翼が攫われたらしい」

翼。その名前を、綺鬼はどこかで聞いたことがあるような気がした。すぐ側で、微かに黒深が肩を揺らした。名前に反応しているのだと、すぐに理解した綺鬼は、その名前が、黒深の友人の名前であることを思い出させた。

諜報活動たしほに全力を注いで、ほとんど放任主義である綺鬼が、その名前を覚えていたのはほとんど奇跡に近い。現に、今にも顔を上げようかと悩んでいる黒深が、その名前に反応している母親に、驚きを抱いているのは確実だった。

「翼……確か、彩深の……」

黒深の顔を見ようと動く、綺鬼の首の動きがぎこちない。

「友達つてか……悪友と言うか……まあ、無関係じゃないのは確かだよ」

翼の、関係の分類に迷った黒深は、どこか遠くを見ながら、言った。

×××××

どうしよう、さつきからリーダーの様子がおかしいんだけど

！！

それは現在飛行中の、かく乱するために分けられたグループの

人々の心の声だった。

リーダー。虚有の背中に、何故だろうか、花やらオレンジ色やら、やたらと喜びを表す効果が見えるのは気のせいだと、彼らは思いたかった。

虚有の近くにいる誠や、副リーダーたるあさきは、すでに何かを悟ったのか、諦めたのか、無視を決め込んでいる。

しかし、実際のところ被害を受けている人間が、一人だけいる。

「もげネコで好きなのは何話目だ？」

「うーん、あ、やっぱり一番初めの話ですかね」

「そうか！」

リーダーをあんなのにした元凶で、一番の被害者たる誠だった。

目的とする島が、近づいてきているというのに、虚有との会話が終わらない。

元より面倒見がいい誠なので、会話はタイミングよく相槌をうち、うんざりとすることもなかった。

終わらない会話。そのおかげで仲間内での不安が募りに募っていた。

「あの……填間さん、島が近づいていますよ……」

あさきの懇願するかのような手振りで、誠は虚有を会話の中から現実へと引っ張り出すことにした。

「あ……そうか……みんな！ 辺りに何もなにか警戒しろ、どんなことでもいい、何か見つけたら報告してくれ」

実は結構前から皆そうしていたのだが、あえて言うことはしなかった。誠も、皆に習い言わないことにした。島が近づくとつれ、夜も近づいてきている。周りの視界は、悪くなるばかりだった。夕焼けが、少しずつ紫に変わり始める中、皆警戒を怠らず、神経を張り詰めさせる。名残惜しい。まだ話をしたいのに。虚有は、仲間の報告がないか気をつけながら思っていた。元より話すことが苦手だが、彼女と話すとあまり苦手ではなくなる。まだ、もう少しでもいいから話をしていたい。

「あ……！ あれは…黒深?!」

虚有のささやかな願いも、誠が島から手を振る友人の存在を発見したことにより、見事に打ち砕かれてしまった。

島の砂地部分からは、3つの小さな灯りが見えた。懐中電灯か、ペンライトだろう、とにかくその光が自分たちを誘導するものだ判断すると、虚有は全員に降下を指示した。

ダイヤのような陣形を保っていた虚有たちは、ゆっくりと三角の形になり、先頭を虚有、続いて誠が順に降下していく。

ペンライトの光が一つだけ、消えた。それは黒深の持っているもので、本人は体を強く抱いて呻いた。

綺鬼は誘導が先だと黒深を見もしなかった。

「黒深！ どうしてここに……黒深……？」

友のいる場所へと、できるだけ近くに降ろして欲しいと誠は、自分を支える人へとお願ひした。

黒深の様子がおかしい。気温が下がり始めていと言うのに、黒深の体からは汗が大量に流れ落ちては砂に水分を吸い取られて

いた。

誠は咄嗟に調子が悪いのだろうと判断し、額に手を当てようとした。

「……近づ…かないで」

小さな声を発し、誠の手をはじく。黒深が、翳りを含んだ瞳で誠を見返した。

背後では、すでに半数以上が上陸を終えているが、誰も黒深の方へは干渉してきてはいない。誠を除いて、誠を運んだ人たちは、すでにリーダーの方へと駆け寄っていた為ここにはいない。誠は、一応とはいえ数歩下がることにした。視線は、外さずに。

「でも、調子が悪そうだよ？ 休んだ方が……」

「いいんだよ……とにかく…離れて……」

身をよじって苦しがる黒深を、誰かに診てもらおうと視線をめぐらせる。誠の視線に気付いたのか、黒深の異変を感じ取った綺鬼は、ペンライトの灯りを消して近づいてきた。

どうしようと困惑気味の誠を押しつけた綺鬼は、何かに取り憑かれたかのように狂った笑いを浮かべていた。得体の知れない恐怖に気圧され、誠は一步後退る。黒深との距離が開いた。二歩、三歩、近づいたとしても黒深のもとへは辿り着けないほどに。

綺鬼も距離をとっている。誠よりは一步前に出ている。黒深が気になる。誠は、やはり一步踏み出そうとした。

黒深が、笑った。両目でウィンクしているみたいで歪んでいた。そして、どこか悲しみを含んでいて、とにかく不思議な

笑い方だと誠は感じた。

「ごめんね……」

誠に向けての謝罪だったのか。黒深は力が抜けたように砂の地面へと倒れ伏した。

一拍置いて弾かれたように走り出した誠が、目を閉じてぐったりとしている黒深の名前を呼んだ。

漆黒のツバサが、誠に見えないところから雫をたらし、赤黒い染みを作り出した。

（おはよう、もう起きる時間よ？ 押さえ込まないで、私はあなたの望む姿なのだから）

×××××

（ごめんね）

「……誰か、呼んだ…か？」

誰かの声が聞こえたような気がした。とても身近で、聞き覚えのある声だった気がする。でも、誰のものなのかは分からない。周りは四方形の真っ白な部屋。無音、無色で、無機質を思わせる部屋で、翼は霧がかかったようにはっきりとしない頭で思考した。

「以前に、ここは……」

人の気配。翼は、咄嗟に眠ったふりをする。

真っ白な部屋に黒い長方形の穴があく。そこから入ってきたの

は、白い白衣を纏った人間だった。

年老いた老翁の後ろに付き従うようにしている、2人の男と、女。それともう一人、ジーパンにTシャツという出で立ちの女性。

「まだ眠ったままか。記録はどうなっているのだ、杏？」

薄目を開けて見た白衣の女性がカルテをめくるのが分かった。翼は、それが杏だと理解、直後に吐き気に見舞われ、小さく身動きをした。

一瞬とはいえ動きがあったことに視線をやった老翁は、ただの寝返りだろうと判断すると、杏と視線を交わし、カルテを読みあげるようにと命令した。

どこから読み上げるのか迷う杏に、初めから読み上げるようにしたのは白衣の男性だった。その目は鬱陶しく白衣を着ていない女性を捉えていた。初めから読み上げるよう言ったのは、彼女が回診に立ち会うのが初めてだろうからという理由だった。

ただし、男性も杏も、不愉快そうに女性を睨んでいる。

「天上翼……男性、血液型はO。誕生日は5月6日、現在に至るまで大きな病はなし、いたって健康体ですね。母親は天上亜佐美、父親は祐樹、あなたよ。これは、DNA鑑定による裏づけによったものです。切除手術の経過は順調、ただし意識は依然戻らぬままです…これでいいでしょうか？」

父親のところで白衣の男に視線を送った杏は、不服そうな視線を癒羽に向けなおし、報告が終わった。小さく肯定を示した癒羽は、衣擦れの音をあまり立てないように歩き、翼の顔を覗き込んだ。

見られていると感じると、どうにも落ち着かなくなるのは気の

せいではないだろう。翼は、癒羽がどんな目で自分を見ているか気になって仕方なかった。

「せめて服を着せてやらないのか？」

癒羽の一言で、かなり大きく翼は身動きをってしまった。癒羽は、してやったりとばかりに笑い、杏は作ったのか、可愛らしいとも思える声を上げると祐樹の背後に隠れた。

老翁は、一切動じずに翼の反応を待った。

もう誤魔化しようがない。翼は自分の自製の甘さに嘆き、数秒後には反省会を終え、開き直ると言う結論が出た。ただし、どういうリアクションをして起きればいいのか、悩まされた。

「おい翼、目が覚めているのは分かっているんだ。起きろ」

「……………うるせえ……」

いかにも不機嫌だとばかりに低い声を出してみた翼だが、癒羽が鼻で笑い飛ばした。

「さて、こいつの始末は私に任せてもらおうか？」

人差し指で翼を示した癒羽は、しっかりと翼の裸を見ないように視線をそらしていた。そちらの方が翼本人にとっては恥ずかしいばかりだった。

始末という言葉に反応はしてみせるものの、翼は司に捕まった時と同じように四肢を縛られていた。違う点と言ったら拘束具が鋼鉄製のものであり、外れる可能性はほとんどないに等しい状態であることくらいだ。とにかく、今の流れからして癒羽が始末を請け負うことを進言しているのは確かだった。

翼としては、自分をはめた癒羽に何か仕返しでもしてやりたいところだったが、自分が全裸だと気付かされそちらの方に気が行ってしまふ。

「始末？ 始末だと……？ そんなことを儂がするとも思つか？」

老翁が口を開く。薄目を開ける必要のなくなった翼が聞いた声と、顔はとても一致していて、威厳あるものだった。皺が目立つと言つのに眼光は鋭く、その一声一声に重く、圧するような何かがあった。

祐樹も、反論しようとしていたが、老翁の眼光一つで黙ってしまった。

「お前たちに従う気のない者などいらないだろう、それならば私に始末させる」

“始末”だけは譲らない。態度で示す癒羽は、人差し指以外を丸めた手の中で、何かをちらつかせた。真っ白な部屋で、煌めく光、それが何なのか翼は考えようとしたが、その間に癒羽が小さな手の振りで翼の少し開いた口へと放った。

数度、指が疲れたと周りに見せるために指と手を振った癒羽は、その手を今度はジューパンのポケットへと滑らせた。

「これを……」

癒羽が取り出したのは小さくたたまれた紙だった。それが何だと言ように、刺すような雰囲気の中、老翁に対しても依然としやんとしている。

格好いいなと感じた。翼は、もし自分が癒羽と同じ立場だったら突っ張ってはみるが、きつとそれが表面上のものになってし

まうだろつと自覚した。

紙同士が擦れる音がする。翼は光の加減で少し透けている紙が、暗号化されて綴られているのだと知った。これでは読めないと言、翼は、視線を彷徨わせ、口の中で異物感を発するものを、慎重に舌の上に運び、さらに慎重に前歯の後ろに隠した。注目は老翁と癒羽にあったので、その行動に不審そうな目をする人間はいなかった。

紙の上に並ぶ文字列を滑るように呼んでいく老翁の顔が、徐々に険しくなっていく。

全てが解読し終え、情報の価値が重いと分かると、杏と祐樹を従え、不承不承とはいえ、退室をしていく。その中で一人、杏のみが立ち止まると、先頭を歩く老翁と、彼の後ろに続く祐樹へと目配せをした。2人は、ゆったりと頷くと真つ黒な空間へと歩き出していった。

「あなたは何を考えているのかしらあ？もしかして翼君を逃がそうなんて……してないわよねえ？」

先程とは打って変わって、怖気のようなソプラノを杏が発した。

鳥肌が立つ。翼は、卑しい杏の視線を必死で避けようとして、自分が動けないという事実には苛立ちを感じた。そうしている間に、癒羽が拘束具を外すリモコンを動かした。

完璧なる無視、凄まじいほどの怒り。癒羽が小さく起き上がるかと思われた。腕を動かそうとしていたはずの翼は、体が動かないと分かると舌打ちをした。癒羽はその様子を見て、手を貸して起き上がらせた。

転がっていた時よりも視界が広い。翼は杏の怒りを感じ取り、身震いをした。

「あらあ、無視かしらあ……？仕方がないわねえ…翼君、君にいい事を教えてあげるわあ」

耳障りな笑い声に、顔をそらした。視界が一段高くなる、癒羽が翼の体を持ち上げていた。プライドの崩壊音と、諦めがなймаぜになった溜め息を吐き出した。

面白いとばかりに笑う杏が、こそりと翼へ耳打ちした。

「“廃棄所”には“窓”がないのよねえ……脱出なんてしようと思わない方がいいわあ…クスクス」

かっとなが昇り、怒鳴り声を上げようとした翼から逃げるように杏は耳に障る音階で歌を口ずさんでいった。

もついいだろう、癒羽が身動きのできないままの翼を、抱き上げた状態から荷物でも担ぐような抱き方に変えると、運動靴のあまり高くない靴音を響かせながら白い部屋から出て行った。

さあ急げ、お前は役者なのだろう？ 遅い登場に全ての人間の注目がそこにある

ACT・16 彼は落ちる、彼女は別人

誰の手も届かない空へ行ける、それはどれだけ楽しいことなのだろう。

「ここは……」

闇の中で瞳を開いたとしても、何も見えるはずもない。 辺りを見回しても、何も見えない。

「起きた？」

唐突に響いた声に、意識は自然とそちらへ注目を寄せる。

そこには、人間がいた。 ただし、淡い光で体のぼんやりとした輪郭しか見えない。

「ごめん、起こすつもりはなかったんだ……でも、もう自分の力じゃ無理だから……後は頼んだよ」

言いたいことだけ言い終えると、人間の輪郭を持った淡い光は、消えていつてしまった。

後に残された、闇と同化しているそれは、黒の中に混じる灰色を見つけると、警戒しながらも歩き始めた。

×××××

どこか息苦しい廊下を、癒羽は黙々と歩き続けていた。 翼は、数

分ほど前まで「どうするつもりだ」とか、「殺されるのか」などと聞き続けていたのだが、癒羽にうるさいの一言と鳩尾に一発で黙らされた。

人通りの少ないこの通路に聞こえるのは、癒羽の靴音と、鈍い機械音くらいだった。

どのくらい歩いたのだろうか、腕も疲れたんじゃないのか。翼は、少しずつ動くようになった腕を少し、上げてみた。

「もう、体は動くのか？」

若干驚きを含んだ声音に、小さく首を振る。翼は、亀並みの遅さで全身を動かして見せた。

「まだ完璧には動かない……か…仕方ない」

面倒ごとを嫌がるそぶりを見せた癒羽は、数秒間翼に黙るよう伝えると目を閉じ、“音”を聴いた。

誰の声も、足音も、気配も感じない。安全だと分かると、癒羽は容赦なく翼を地面に立たせ、半ば引きずるようにして歩き出した。

「なっ……にすんだっ!!」

感覚の戻らない足がまともに地面を踏むことができるはずもなく、引きずられていることもあり、喉が圧迫されていることに翼が抗議した。それを冷めた目で一瞥すると、癒羽はまた黙々と歩き出した。

通路はどんどんと整備がされていないところへと入り込んでいく。翼は首が圧迫されないように、首元を手で覆いながら、施設内標識へと目を向けた。古びた字、古びた標識で、うまく字が読み取れずに、理解できたのは“……所”と言う部分だけで、つまりはほ

とんど分からなかった。

ほとんど分からない代わりに、雰囲気から読み取ることにした。薄汚れたなんてものじゃない、何十年も掃除されていないほどに汚れている。染み付いている赤黒いものは何か、とか、ぎとついた染みはなんなのか、考えることもおぞましい。

「癒羽、俺はこのまま死ぬのか？」

ぼつりと言ったはずの言葉だが、どこか「明日の天気はなんだろうな」と気軽に話しかけているみたいで、翼は一人苦笑した。

「さあな。残念ながら今のお前に価値はないからな」

「価値？」

俺に何かの価値があったのか？

「ツバサだ、今のお前には、それが無い」

「マジかよっ?!」

そつだ、言われてみればあの羽毛を触るかのような感触もないし、違和感も無い。

……違和感？

翼は急に、自分で思ったその言葉におかしな感覚になった。

違和感というものは、しっくりとこなかったり、ちぐはぐな感じを受けた時に使うような言葉だ。

自分が違和感を感じたと言うことは、翼は自分でそのツバサが違和感だと感じ続けていたことになる。

唐突に理解した翼は、つい苦笑をもらした。

「なんだ、まだ……戻れるのか？」

何故だろうか、嬉しそうに笑う翼に、癒羽は一瞥をくれると目的地に到着したことを告げた。

翼の嫌な予感的中した。

そこは、ツバサを持った人々が、なりそこなった人が落とされる地獄。

嫌な記憶を思い出し、吐き気がしてきた翼の鼻腔に、血の臭や、何かが腐ったような臭いが届いた。

「う……えっ……!!」

「情けないな」

「うるさ……っ」

翼が吐き気を抑えることに必死になっていると、癒羽が呆れたように見下した。

下手をしたらお前も同じ末路だったんだ、ほら、喜べよ。そして、この現実を真正面から見つめるといい。癒羽は、言外に語っていた。

吐き気を無理やりに抑えつけた翼は、ふらつく足を殴りつけ、両足で立つ。翼の表情はどこか、諦めが混ざっていた。

「落とされるのか」

「落とされるぞ」

いいだろう、死刑囚の最後の戯言に付き合ってやろう。悠然と立

つ癒羽は、そんな寛大な態度で翼の戯言に付き合っただけでやろうとしていた。

「ツバサ、もうないのか……」

「ない」

「俺、死ぬのかなあ……」

涙声になりそうになる声を、強がりですらに歪んだ声に変えて、翼はか細く、問いかけた。

癒羽は地獄に通じる通路から、誰も来ないことを確認した後に、翼を地獄の入り口に立たせた。

もう、抵抗はしなかった。

ただ弱々しく「死にたくない、ただ普通に帰りたかったんだ」そう繰り返した。

「いい加減、諦めろ」

「諦めろ……？ 俺に、死ねてか?! ふざけんなよ!!」

急に暴れだした翼の瞳に、光は宿っていない。

半ば諦めているのだ、この少年は。

ならば、諦めさせてやるのも仕事の内と考えた癒羽は、容赦なく翼を殴りつけた。

「がつ!!」

簡単に吹き飛ばす体には、人間のもろさを感じた。

まだ抵抗するようなら、動けない程度に痛めつけるだけと思って

いたが、翼は立ち上がらない。ただ、普通だった日を思い出し、ささやくような声で絶望を述べていくだけだった。

壊れたか。癒羽は、この少年のあまりにもあっけない終わりに、憐れみにも似た感情が湧いた。

「憐れなお前に一つ、教えておいてやろう。下には“まな”がいる」

「ああ、もうその言葉すら届いていないのか」癒羽は、俯いて、現実から目をそらし、逃避した少年に、もう興味の欠片も無くなった。躊躇いの心も消えた。癒羽は少年を地獄へと突き落とした。

もう戻ってくることも無い少年に、侮蔑の表情を込めて見送った。癒羽は背を向けた。地獄から囁く声を撥ね退けながら。

「もう二度と会うこともないだろう。残念だ、私はお前に期待していたのだがな」

どこの小説の科白だ。自分で言うておきながら、その言葉の陳腐さに苦笑がもれる。

苦笑はすぐに薄汚れた通路に吸い込まれて消えた。

癒羽の姿も、薄汚れた通路から吐き出されたかのように消えた。

×××××

「……大丈夫か？」

海の彼方の、そのさらに向こう側、どことは分からぬ世界へと意識を飛ばしている誠へと、虚有が顔の目の前で手を振ってみると、誠は焦点の合っていない瞳を、現実世界へと引き戻した。

どこか遠くの世界への旅行から戻ってきた誠は、数秒ほど呆けた

後に、虚有が声をかけてきたことに、返事をした。

「何が……ですか？」

心ここにあらずと言った様子で、誠は気の抜けた声を出した。

暗闇の幕が下り、夜がやってきたこの島で、芙楼と合流した虚有たちは、そこで一夜を過ごすことにした。

今は即席の寢床を、怪我人を除いて、作っている。

「翼……だったか……？ 心配なんだろう？」

「彼は、翼は、逆境に弱いタイプだって、結構前から知っているんです。だから、余計に……それに、黒深も……」

体育座りをしていた誠は、すぐつま先まで潮が満ちてきているというのに、砂の上に文字を書き、小波に消されるという、下手をすれば半永久的に続く作業を始めた。

「浅葱。 浅葱誠」

硬質な女性の声が小波の音に紛れ、誠の耳へと届かせた。

振り返らない誠に代わり、虚有が振り向いた。

固まった。

「お前は、浅葱誠ではないだろう？ 私はその少女に用がある」

いつもへらへらとしていた顔は、真剣な顔へと引き締まり、どこか気の抜けた雰囲気があったというのに、今では威圧感抜群だ。

黒深は、誠の後ろに立つと、彼女の名前を呼んだ。

「誠」

反応がない。

「……誠」

硬質な声が、徐々に苛立ちに浸食されていく。

黒深だというのに黒深らしくない少女に、虚有はどう声をかけたらしいのか、知るはずもなかった。

何度か呼びかけてみた黒深だが、反応がないと分かると、軽く息を吐いた。

「誠！　うちが呼んでるんだから少しは反応してくれてもいいんじゃない？！」

「え……黒……深？」

声に反射的に振り返った誠は、威圧感がありありと見て取れる黒深と対面した。

黒深は、表情も、声も、硬質なものに戻っていた。

「やっとこちらを向いたか。今は寢床の準備をしている、手伝わないか？」

「黒深？　何か……おかしいよ？」

いつもの黒深ではない。そう首を振った。

遠くでは、芙楼が手を貸してくれと呼んでいる。

まだ少しの間動きそうにもない黒深と誠を残し、虚有は手伝いに向かった。

「おかしいか？」

「うん、おかしい」

「即答なのか」

そこでまたうんと頷くのだから、黒深は苦笑するしかなかった。どこか力の抜けた、困った顔に、誠は見覚えがあった。

相手が即座に、あまりにも素直に、もしくははつきりと答えを言ったときに見せる顔だった。

「言葉遣い、いきなり変えると変に思われるよ？」

「まあ、そうだろうね。誠、言っとかなきゃいけないこと、あるんだけど……いい？」

「いいよ？ いきなり改まって、何なの？」

若干の不信感があったものの、真剣に誠を見ている黒深に悪いので、立ち上がって視線を合わせた。

「実は、さ……」

「やめなさいっ！ 黒深、いい加減にしなさい!!」

後頭部に衝撃を受けた黒深が、誠を巻き込んで砂へと衝突した。

綺鬼の拳が見事に決まった。

そろそろ寝床ができるころだというのに手伝わない2人を、不審に感じている者もいるため、綺鬼が代表として呼んでくることとな

ったのだ。

しかし、最初の「やめなさい」は、何かを言おうとしていた黒深を止めるものだったと、誠は気づいていない、砂の上とはいえ無防備なまま倒れた衝撃に、頭が情報を処理し切れていないからだ。

「いきなり何……をつー！」

「黒深、早く来なさい。さもなけば」

親指を立てて、それを首の下へと滑らせた。今度はその手を、真横へと引いた。

行儀の悪いことで。黒深はやれやれと軽く首を振ると、誠の上から退こうとした。その際に、力が入らなかったのか、もう一度誠を押しつぶしてしまった。

蛙がつぶれたような声が出た。

「わ、悪い……」

自分の非を謝罪しながら、誠の耳元に口を寄せた。

「黒深は偽名。私の本当の名前は“綺神あやがみ 彩深さいしん” もしよければ、覚えておいて欲しい」

潜められた声を、うまく聞き取れたかを、黒深は確認しなかった。背後で待ち構えている綺鬼には聞こえていなかった。波の音が掻き消してくれたからだだった。

誠は、綺鬼に気取られないようにしている黒深のためにも、「重いよ、早く退いて」と、いかにも迷惑そうに言った。

闇に覆われたというのに、芙楼たちの作り上げた即席の寝床の近くからは、空へと駆け上る火が、辺りを照らしていた。

再会はもつすぐ、準備せよ、構えよ、“絶望”に

青空を描くには、青と、白の2色で十分だと思う。そこから、どうやって空の微細な表情を描くのか、そこに描いた人の世界が見える。

「ねえ、誠」

全員が火の回りを囲っているというのに、黒深は誠とともに少し離れた林の入り口とも言える境目のところに座っていた。

渡された食料を、黒深は歯で引きちぎって、咀嚼した。

「私は、このまま彼らと行動するのは得策じゃないと思う」

「……それは、今までの経験上から？」

黒深の話した数分の、いや、数十分だったかもしれない彼女の過去を聞いた誠は、火に次々と放り込まれる小枝たちの運命を思っていた。

「そうなる。理由は、聞きたいか？」

堅苦しい話し方だ。誠はそれが不快でならなかった。

いつもの軽口を叩いているような顔ではない、表情は真剣そのものだ。

「いい……それよりも、その堅苦しいしゃべり方をどうにかして」

「仕方ないだろう？ これは私の仕事用の人格だ」

ふいと顔をそむけた黒深は、拗ねているようだった。

「ふーん。で、それとこれとが何か関係あるの？」

刺々しい誠の言葉に、黒深は身をすくませた。

怖いを数回ほどおどけた様子で言いながら、綺鬼の様子を見ている。綺鬼は芙楼たちと今後のことを話し合ってはいるが、明らかに見張っている。

この様子では、何かを話そうとすればすぐに分かっってしまう。黒深は古典の授業で習ったことを思い出した。

「ねえ、いろは歌ってどんなのだったけ？」

話題のすり替えに怪訝そうにした誠は、堅苦しい言葉をやめて、企み顔をする黒深を信じることにして、確かこうだったと砂の上にいるは歌を書いた。

『いろは「いろは」
色は匂えど散りぬるを』

我が世誰ぞ常ならむ』

有為の奥山今日越えて』

浅き夢見し酔いもせず』

「そうそう、そんなだったね！ あとさ」

言葉を続けると同時に、すぐ側に落ちていた小枝で、砂上に書かれ

た文字をゆつくりと突いていった。

「他にも習わなかったっけ？」

(りいと は なにか つばさ について 知っているかもしれない)

分かりやすいように間を空けてくれたおかげで、誠はその言葉を訳すことができた。

“りいと”という言葉を除けば、だったがそのまま読めば

『りいとは、何かツバサについて知っているかもしれない』だ。

「ほら、蜉蝣の話とか」

「そうだね、確かにあったよね」

(りいと て なに)

誠も、同じように砂上の文字で質問を返す。

遠くでは綺鬼が目を光らせているが、日常を懐かしむようにしているようにしか見えていない、黒深は企みが成功したことに喜びながら、話題を探していく。

「そっぴやさ、話題は変わるんだが麻奈は無事かな？」

(ひょうめんじょう は なんでもや みたいなもの だけど)

「確か家に帰ったとか言ってたよね？」

(じっさいは しーく たいこうそしき で けんきゅうとかして

る)

「そう、だね……家に誰かいれば……いいけど」

(しーく)

そこで誠が首を傾げた。

「畏の可能性もあるからなあ……」

いかにも悩んでいますと見せかけながら、黒深は再び小枝をとった。

「多分、家にたどり着くことは難しいと思う。どうして、麻奈を一人で行動させたんだ？」

(こんかい の じけんの しゅぼうしゃたち けんきゅうしゃ
が おも)

『 今回の事件の首謀者たち ” 研究者が主 ” 』

目に見えて誠の反応がおかしくなった。綺鬼が遠くで鋭い目を向けている。

黒深が綺鬼の様子を見て、自然さを装い砂上の “ いろは歌 ” を消した。

「なあ、誰が麻奈を一人で行かせた？」

「分からない。でも、或麻さんが『家に帰った』て」

盛大な舌打ちとともに、黒深は砂を蹴飛ばした。

小さな砂粒が、炎の光で赤く染まる。

綺鬼が黒深の方へと向かってきた。誠は黒深の目を見た。自分に合わせる、黒深は言葉にはせず、唇を動かして教えた。

「彩深、何をこそこそしているの？」

「大変なことに、気付いたんだ……」

声のトーンを落として、シリアスに演じる黒深を、綺鬼は迷惑そうに見ている。余計なことを、と思っているのかもしれないと誠は推測してみた。

「癒羽はSECと繋がりがああるかもしれない！」

「いきなり何を言っているの？ それに癒羽は私たちの……」

狂言を吐いたとしか思えない黒深を、綺鬼は蔑んだ。

黒深が視線を寄越した。どうやら誠の出番らしい。

「或麻さんは、翼の叔父さんの家で仲間と一緒に隠れていた……それも、通報される形で一緒に行かなければいけないって仕組んだのかも……」

いかにも深刻そうに誠が言えば、黒深がそれに乗じて言葉をつなげた。

「それに、子供一人、私らと同じツバサ持ちの子を単独行動に走らせた……今思うと、これは結構怪しい……」

仕事用の顔で深刻ぶれば、綺鬼は目に見えて動揺を表し、焦り始めた。

何年も諜報をやっているのだから、感情くらい抑えるよと内心で親を責めながらも、黒深は次に続ける言葉をすでに考え終えていた。

「かあさ……綺鬼、私は誠と一緒にR E Tに行く、いいか？」
「……それは、私の一存では決められない……」

急に歯切れが悪くなるので、芙楼に直接交渉しなければいけない必要が出てきたが、話す本人は誠の背後に立っていた。

誠は無反応だったが、隣では黒深がオーバーなほどに驚愕の表情で固まっている。

「いいぜ、行ってこいよ。ただ、頼みがある……綺鬼、少し向こうへ行っている」

年下だというのに命令口調で、芙楼は綺鬼に指示を与えた。もとより上官の意思に従うとしてしまったあたりから、従わないわけにもいかず、綺鬼は火にあたりりにこの場を離れた。

綺鬼に声が届かなくなる距離を、芙楼が測った。

「頼みとは珍しいな、お前が」

いちいち仕事用の口調を使う必要があるのか、誠は蚊帳の外になっているような気がして、どうもこの場にいくかった。

「ああ珍しいさ、だがな、俺がこういうときは大抵……」

「面倒ごとの予感、だろう？ 早く言え、蚊帳の外にしたままでは悪いからな」

誠を気遣ったの言葉だろう、しかし、かえって誠に疎外感を感じさせてしまう結果になったとは、思いもしない。

「尾坂鈴おのさかれいという女が本部にいる。彼女に情報収集を頼んでいる、彼

女に会えたら……お前じゃなくすだろうな…誠、これを渡してくれ」
背後で不満たらたならな黒深が芙楼を睨んでいるが、誠は神妙な顔つきでおそらくペアになっている、十字の刻み込まれた片割れのブレレットを受け取った。

綺鬼は、何か言いたげだったが芙楼の決定に反対できるはずもなく、ただ恨みがましく黒深に視線を送っている。

「じゃあ誠、掴まって！ 行こう！！」
「えっ……？！」

すでに闇が支配する時間だというのに、今行動するのはどうしても抵抗があった。

しかし引き継ぎらしきものも終わっている今、明日になるまで待つということにも抵抗があるのは確かで、それを決めなければいけないということが、気だるくさせた。

「早く行って来いよ、追いついてくるんだろ？」

口の端を歪めて笑う芙楼の姿は、不安と、それに相反する安心を人々に感じさせた。

一部の人が眠りについていたが、虚有は遠目から別れようとしている誠に、一言を言うために炎の側から離れた。

「……行くのか？」
「行かないと、いけない。心配、ありがとう」

柔らかい声を出そうと努める誠の声は、不自然に硬かった。

「彩深、これを渡しておくから、あなたが彼女を守りなさい。いい

わね？」

真つ黒のポーチを手渡すが、それはずっしりと重く、金属同士が合わさる音がした。

続けて渡したのは緑の、白抜き文字が入ったTシャツと、紺色のジーパン。着替えて来いと、綺鬼が林の方を顎でしゃくった。

黒深の着ている服は血で薄汚れていた。「じゃあ、ちよつと行ってくる……」意識をしていなかったその分だけ、恥ずかしさが倍増するのか、赤面しながら走っていった。

「黒深のお母さん、黒深に何を渡したんですか？」

「それはあなたが知る必要は、今は、ないわ」

このあと、嫌でも知る羽目になるだろうから、そんな含みのある言葉を、誠はあまり重要視していなかった。

「あなたの分の服もあつたみたいだけど、着る？」

差し出されたのは藍色のTシャツと、同じ色のスカートだった。

「あつたみたい……？」

言われて、振り返ったのは司のいた恐怖の家。

思い出すだけでもぞつとする。誠は、綺鬼の持っている藍色の服が、血で侵食されていくような幻覚を見た。

断ろうと思った誠は気付く。すでに自分の手に藍色の服が手渡されていることに。

虚有が誠の背を押した。

「……着替えておいたほうがいい……」

それだけ言うと、誠を黒深の向かった方の林に半ば突き飛ばすような形で、移動させた。

「誠も、早く着替えたらどう？」

着替えた黒深は林から出て行く、すれ違いざまに誠の背中を軽く押して、独り言のように、誰に向けた言葉でもないように、小さく歌った。

「服はすみからすみまで見ておきな、ほつれがあるかもしれないよん」

ふざけた口調で、今の音よりも少し大きな声で歌の続きを歌い始めたが、それはまた別の、最近有名なアーティストの出した歌だった。釈然としないまま、一応服を調べてみたら、小さな機械が見つかったので、気分は一気に急降下していった。

誠は盗聴器をスカートのポケットに入れると、着替えを終わらせた。黒深は、すでに漆黒のツバサを出して待機していた。

緑色のTシャツに、缺であけられたツバサを出し入れする穴から、闇に同化しようとしているツバサは、未だ燃え続ける炎の光を受け、赤々と燃え上がっている錯覚さえ起こさせる。

「墮天……」

墮天使ではなく、墮天。天を墮ちてきたようなイメージが、誠の頭で焼き付いた。

「準備は？ オツケー？」

いつの間にか、黒深の口調は元のものに戻っていた。誠も、そのおかげでいつものように軽い返答をすることができた。

「オツケー。ごめんね、飛べなくて」

「気にすんなって！ よし……行くよおっ！！」

黒深は右手と誠の右手、左手と誠の左手を離さないように強く握って飛び立った。

風圧が砂を巻き上げる。

砂が目に入らないように、手で目を覆った綺鬼と芙楼は、闇夜に消えていく漆黒のツバサを見ることができなかった。虚有は、闇に飲み込まれていく漆黒のツバサを見守ったあと、目に入った埃で、涙が止まらなくなった。

×××

「盗聴器、見つけたっしょ？」

誠の全体重を片手で支えながら、空いた右手で四方3センチほどの機械を取り出し、強く手で握った。

これで会話は聞こえない。

黒深を見習い、誠も同じように機械を右手で握った。

「これ、盗聴器だったんだ……誰が仕掛けたのかな？」

「綺鬼に決まってる。いいか、これをそのまま海に落とす」

闇にまぎれてうまく見えないが、握られていた手から本当に微かだ聞き取れないほどの落下音がした。

着水した音が聞こえるはずもないが、黒深が盗聴器を落としただ

ろつと信じて、誠もそれを落とした。

「怪我は、大丈夫なの？ ツバサと、足……傷、深かったよね」

漆黒のツバサを濡らす赤黒い液体を思い出し、誠は青ざめた顔をす
る。

足の怪我は、黒深自身が意識して、ずっと引きずったり、痛みを
思い出して表情を変えないようにしていたせいで、気になることは
なかった。ただし尊飴がいたら、きつと無理だっただろう。

「実はさ、あんまり痛くないの」

普段の飄々とした声が、どこか寂しげに独白していく。

「あれ、ツバサ生えてからさ、感覚とかはどこか鋭敏で、それでい
て、エネルギーを大量消費して、全部の感覚がツバサに持つていか
れちゃったような気がするんだ。いやね、全然痛くないとか、全然
感じないわけじゃないよ？」

黒深は大袈裟なことを言った後に少し、慌てて訂正する。それは一
種の癖のようなものだった。

「でもね、俺……いや、私？ うち……かな？ まあいいや、自分ら
は知らないんだ。SECシイクとRETリート。それに綺鬼や芙楼、癒羽の目的
を、知る必要があるんだ」

最後に、黒深は独白をやめ、誠に問うた。

「知らなきゃいけない。戦いはすべて請け負う、だから、一緒に来
て欲しい」

「真剣な黒深つておかしいよね、翼も、でしょ？」

「……あとね、私は戦えないけど、黒深だけに任せっきりにしないよ」

確固とした意思を表し、誠が消息の知れない少年の名前を出すと、
うっかりしていたということ、黒深はおまけのように「翼もね」と付け足した。

知らないならば知ればいい。知るための、資格があるのなら。

ACT・18 火の粉、大火を呼びて

知らないままに時は進む、戻すことなんてできない。

「彩深、よく帰ってきたな」

「お帰り、今日はどんな土産話を持ってきたんだ？」

RETの人々は、人のいい笑顔で黒深に挨拶をしていく。隣で辺りを見回す誠には、挨拶をする人もいれば、すれ違う最後までその存在を気にしない者もいた。

一人一人に挨拶を返しながら、黒深はエレベータの手前まで来た。

「……に、しても今日は人が少ないな」

「少ないの？」

「少ないね。いつもならこの倍の人数はいる」

上向きの矢印の絵が描かれたボタンを押して、今何階にエレベータが止まっているのかを確かめた。

最上階の12階だった。

一番上の階から移動だと、途中で止まる確率が高いので、黒深はエレベータの到着を待つ時間を考え、エレベータのすぐ横の壁に背を預けた。

「この……倍?!」

誠が呆然と辺りを見回した。

1階のフロアだけでもかなりの人数がいたはずで、これがこの建物全体で示すとしたらそれこそ、数え切れなくなってしまうだろう。

壁に背を預けたまま、黒深はのんびりとした顔で近くを歩いていた男性を呼び止めた。

「なんですか？」

「今日は妙に人数が少ない？」

「ああ、そのことですか……あれですよ、ツバサのせいでいなくなっちゃった人がいるので……そのおかげで僕の仕事が増えましたよ」

両手に抱えた膨大な資料を運ぶ男性は、まだ若く見える、まだ新人の域を出ない青年だ。よろけながらも資料を運ぶ足取りが怪しい。

一歩踏み出し、二歩目は自分の足を引っ掛け、見事に転倒した。

資料が一気に床へと羽を広げた。

受身を取れなかった青年を、誠は声をかけて意識のあるなしを確認する。

誠が転んだ青年に手を貸している間、黒深は広がった資料の中から、めぼしいものを探した。拾いながらの作業ではあったが、興味のあるものと、ないものの区別は簡単に済み、全ての資料を拾い終えた頃には、誠が青年を助け起こしていた。

「大丈夫？ はい、これ、重要なんですよ？」

「あ、はい。ありがとうございます」

膨大な資料に顔をつっ込んだのか、青年の顔には赤い横線がついていて、気を抜くと笑い出してしまうそうだった。

資料を持ち直した青年が、一礼して去っていくと、タイミングよくエレベーターが1階に到着した。

「あ」

「げ」

既知の人物を見つけた黒深と、既知の　おそらく会いたくなかった　人物を見て苦々しい顔をする男が、同時に声を出した。

男が、黒深や誠と同じ年くらいの少女の手を掴んでいることを、目聡く確認した黒深は、口元をおさえ、直後に笑い声を爆発させた。

「あーっははははっはっ！　え、何？　二ー……もといおっさ
んってばついにリアルのロリコ……」

「違うっ！　いちいちリアルとか言うなっ！！」

「えー？　だって俺、この前見ちゃったもん、ゲームの美少女コー
ナーにいる……」

「わー！　わー！！　やめろ、こんなところでそんなこと言うな、
言わないでくれえっ！！」

あまりに情けないその姿に、憐れみの心を抱き、慈母のごとき微笑
で男を見るので、男はさらにいたたまれなくなり、閉まりかけたエ
レベータへ一直線に走ったが、無慈悲にも、眼前でエレベータが閉
まった。

「ぐがつ！？」

エレベータに赤い跡を残して、崩れ落ちた男に、追い討ちをかける
ように黒深がはたく。

「あなた、馬鹿でしょ？　そんなに後ろめたいならやめなさい、て
な！！」

中途半端に丁寧な言葉で言われると、何も言い返せない男は、ただ
力なく座り込み、血が少量ずつ流れる鼻を押さえた。

ティッシュでもあればいいのだがと男が思っていたら、誠からテ
ィッシュが差し出された。

「どうぞ」

「……助かった」

「ありがとう」といった素直な感謝の言葉が出せずに、ぶっきらぼうな感謝の仕方ではあったが、感謝しているという気持ちは伝わっていた。

「こいつ、素直にありがとうって言えないんだよな」

「うん、なんとなく分かったよ……黒深、エレベータ見過ぎしちゃったけど？」

「あ、あ……そのことなんだけど……」

「あああああっ!!」

男が連れていた少女が、下品にも大口を開けて、人を指差して、黒深たちを無遠慮な視線で嘗め回していた。

×××××

「杏! 杏!!」

「ん……どうしたの? 確か持ち場に行っ……」

施設の、屋上に腰をかけて、遙か遠くにあるはずの自国を見つめていた杏は、男の声に反応した。

見知った顔だった。

「祐樹」

「少し、抜けてきた。隣、いいかい？」

「どうぞ」

他にも座れる場所はあったが、祐樹はあえて杏の隣に座り、杏が見ていたはずの景色を、祐樹が共有した。

海を眺め、穏やかな気分になっていく祐樹とは逆に、杏の胸中は苛立ちに、この後の出来事を楽しみにしていた心を埋もれさせた。

表面上に浮かべる、能天気な笑顔しか知らない祐樹は、その偽者の笑顔に癒しの効果を見出していた。

「もう、準備は終わった？」

「終わっているわ、あの子、可哀相ね」

何もしていないはずの、哀れな生贄は、今は鎖につながれ、吊るさ
れている。

「……ああ。君もそう思うのかい？」

同意が得られたことに顔を輝かせる男は、杏にとっては愚物にしか
映らない。

「彼女は……運が悪かったのね」

憐れみを含ませて湿った言葉に、祐樹は子供のように首を上下に振
り、賛同する。

自分たちは戻れない場所にいるというのに、まだ救いを求めてで
もいるのだろうか　？だとしたら、こいつはとんだ大馬鹿野郎だ。

「杏……僕は……」

「祐樹」

呼び止める、女。

「その先を言うことが、どんなことが分かっているの？」

子供のように駄々をこねる、男。

「分かっている……分かってるさ……けど、君は知らないから言えるんだ……！」

逆上する祐樹は、勢いよく立ち上がり、足を踏み外した。

フェンスの囲いのない屋上、真下は海。

高いところから水に落ちると、コンクリートに叩きつけられる時の衝撃が襲うらしい。そんなことを思い出している内にも、祐樹は白衣をはためかせながら、助けを求めて手をふらつかせた。

「祐樹、ゆうきいいーっ……！」

顔に焦燥を浮かべ、助けようと差し出した手は、無常にも空気を掴み、祐樹は落ちていってしまうというシナリオ。

エンディングはもちろん、祐樹の死亡が待っているシナリオだったが。杏の想像するシナリオに、祐樹が今ここで死なれるというものは、なかった。

だが、ひとつの事実思い至った。この下には小女が吊るされたまま、もしかしたらという希望と、駄目だったときの絶望を希望で消し、生贄を呼び覚ます。

「助けて、祐樹がっ！ 助けてっ……！」

悲壮な叫び声は、誰であれ同情を誘い、救ってやろうと思わせる声だった。

現に、下の方で聞こえるのは同情を誘われた小さな女の子が、祐樹を助けた声だった。

吊るされただけの小女は、祐樹をとりあえず安全なところへと置く、と見えない誰かに大声を出している。

「まったく、馬鹿な子でよかったわ。さあて、翼君は壊れちゃったかなあ？　ウフフツ」

祐樹と接していたときはまったく違う、心の底からの愉悦で飾られた顔をしながら、杏は軽くスキップをした。

子供っぽい仕草だったが、かえって彼女の心の邪悪さが見える気がしたが、それを指図する者は、ここにはいなかった。

×××××

「だから、何度も言っているでしょう？　私が彩深なのよ」

「うっそだあっ！　うちのこと騙してるんでしょ？　ね、そうですよ誠？」

「違うない、と思うよ」

施設内のカフェテリアに　おっさん扱いされた男のおごりで入った黒深たちだったが、話の主導権は鈴で、会うつと予定されていた人物が、黒深であると信じてはいなかったのだ。

時間も時間で、人がまばらなのだが、黒深たちがカフェテリアに入ってから、しきりの向こうにある、ガムシロップやらストローなどが置いてある場所に立ち続けている人がいる。

遠目に確認しつつ、黒深は鈴の次なる質問に構えた。

「綺神彩深の役割は？」

「情報収集が基本、偶発的なものだと何かしらの事情で姿を現せない人員の繋ぎ、ね」

「っ、次よ次！！」

「少し待って、おかわりしたいの」

質問攻めにされることは、体力を使うのだと、身をもって実感している黒深は、カフェオレのおかわりをしに、席を立った。

コーヒーを機械が注文どおりに流し込む。

ミルクとガムシロップがある場所には、やはり立ったままの不審な人物がいる。

こんにちわ、灰鴉^{カイエ}。何かあったの？

……一応。報告。

そう……貴方の運ぶ情報は黒？白？

いつもの通りに情報が最優先事項か、緊急を要しないものかを聞けば、灰鴉は彼方へと目を向けたまま聞き取りにくい声で応えた。

黒……目的、発覚。

やっと分かったわけね、今、言える？ あと、場所を変えたい。

肯^{こう}。何処へ

ん、ちよつと待ってて

「おっさん！！」と黒深が呼びかけ、「公衆の前ではおっさんつて言うなっ！ 俺は慎^{しんや}也つて名前が！！」と慎也が返す。言葉のキヤッチボールを二、三度して、黒深が歩き出し、数十秒ほど待って、灰鴉も店の外へと出て行った。

何十分もそこにいたはずの存在だったが、誰も気にしない、そこには最初から誰もいなかったという錯覚さえ起こさせるが、それは灰鴉の特技でもあった。だからこそ、気付かれてしまったら彼は別の意味での終焉を迎えてしまう。

黒深が会談の場所として選んだのは、店を出てすぐ左手にある、小規模な会議室だった。

「さ、教えていただきましたでしょうか、あちらさまのご意向を、ね」

窓を背に、影を背負って笑う黒深に、彼は光を受け、光を身に受けることを嫌うように、陰のある場所へと移動した。

×××

「……何処、聴？」

「まずは皆のことからで、いいかな？」

適当な席に座り、その向かいに灰鴉が座るように黒深が促した。

「肯」

「無事な人、あれ、全員感染者でしょ？」

「肯。其、異状？」

「異状では、ないと思う。あれだけ微細な粉を吸い込まないでいられる人間は、多分いないと思うから。聞きたいのはそっちじゃなくて、あの粉に何が仕掛けられていたかを聞きたいの」

「……肯。粉、仕掛け…潜む、爆弾」

とんだ文明の進化だ。くだらない方面に突出してどうするのか、黒深は遠からぬ未来を、自滅した未来を想像し、恐怖を抱かずにはいられなかった。

「……どういう、こと？」

「……粉、異状出現、非ず。物体、兵器」

事の重大さと、遠回りを重ねる言葉に苛々と唇を噛む黒深が見えていないのか、見えていたとしても、気にしないほどの神経の凶太さ

があるのか、灰鴉は明らかな黒深の態度を無視し続けた。

「待つ、破滅。ツバサ、呼ぶ、死、鐘。」

単語単語の言葉を、波立つ心を沈めながら、黒深は解読していく。慣れると意外にも楽しいのだが、黒深はまだその域には到達していない。

「ツバサが呼ぶ、死の鐘？」

「肯……時、接近。警告」

波浪の波を鎮めていた黒深の目の前で、立ち上がる灰鴉が、色素の抜けた白い髪の毛の間からのぞく、灰色に見える瞳が、異様にグロテスク嗤う。無残にも踏み抜かれたガラスが立てる、断末魔にも似た音が、黒深の鼓膜を震わせた。

強化ガラスでできている窓が、ひび割れて蜘蛛の巣を作り出す。

爆炎。

赤い炎が窓ガラスを翳る。

「戦争、店。早急、脱出」

「戦争屋……外交が絶たれた時点でなくなったと思っていたのに……！」

蜘蛛の巣を蹴り破るは迷彩の、屈強な男たち。

警報のベルが鳴る。

慌しくなる空気に、燃える炎の熱が、戦争屋の登場の為のエフェクト効果だった。

「戦争屋たちは敵役、対するは正義の主人公、ていうのはどうかしらっ。」

「否。自身、灰色」

「……そういうことを聞いているんじゃないけどな……」

ただのお遊びにさえ真剣に答える青年に、ノリの悪さ、善さを説いても分からないだろうから、黒深は戦争屋の顔をざっと見渡し、物騒な面を記憶した。

「Hello? こんにちは 或者、それとも さようなら?」

うる覚えな外国語を披露する女に、戦争屋の一人が飛び出してきた。手には折りたたみ式のナイフ、隠すには丁度いいくらいの大きさだ。

「威勢がいいね、何が目的なの?」

平手でナイフを叩き落とし、ナイフを持った男の腕を引っ張り、鳩尾を狙うつもりだった黒深の、腕を掴んだ手が、逆に引き寄せられ、バランスを崩す。自らの失敗を悔いる前に、灰鴉が手刀で黒深の腕を掴んだ男の手を叩き落した。

うまく飛べなかった黒深の手を灰鴉が引っ張り、壁際に飛び退った二人に、スカーフェイス 傷跡顔の男が突撃を合図する。

「Oops、おっと 感到抱歉、すまないとおせつ が。人生の行き止まりってやつだ」

黒深に合わせた返答。

武装した男たちが、平和だったはずの世界に戦火を持ち込む。小さな炎が、むちゃくちゃに散らす火の粉が、大火を呼ぶ。

平和な世界にこそ、危険が潜む。

階へと移動している。

灰鴉は黒深に畏だと伝えてはいるが、黒深も、それが分かっていないはずがない。それでも、ナイフを片手に襲ってくる男達を退けながら、考えることは困難だった。

扉の閉まった部屋を通りかかり、鈴を窓際にして走っていた黒深が、鈴を窓へと押し付けた。

「何すっ……きゃあああっ?!」

赤い炎が目の前の視界を焼いた。衝撃に感覚が追いつかず、混乱している、誰かが鈴の腕を引いた。冷たく、細い手を持つそれは、灰鴉のものだった。

煙を抜けて、喉が軽くやけどをしたのか、咳き込む鈴を気にかけることもなく、灰鴉は無言のまま出口へと向かっていく。

誰がその後ろに続いて、誰が前を走っていたのかも、鈴はただ引っ張る力に任せて、考えなかった。

×××××

「……絶対に、わざとでしょう?」

大人らしく見栄を張った台詞に、男は笑っただけだった。黒深の側に倒れ伏しているのはすすで薄汚れている誠だけだった。慎也は、窓を突き破って飛んでいった。スタンドマンとしての心得はあるのかと聞いてみたかった黒深だが、その本人は今頃逃げ回っている。

建物の被爆率が高くせに、未だに崩れる傾向を見せない辺りは、建築技術が向上しているおかげではあったが、今はそれに感謝している暇もない。

「殺……倒そうと思えば私も倒せたはずでしょう?」

「そうだな」

「だったら、な……」

「杏からの伝言があるんでね」

わざと言葉に被せて発せられたものは、黒深の発言を止めるにはあまり十分な効果は得られなかった。表面上ではそう見せたが、実際黒深の鼓動は早まっていた。

冷静に、判断を間違わないように、それが余計な圧力となるのに、黒深は努めて冷静な声を出した。

「却下。とりあえず話を聞く気にはならないのでさようなら？」

今逃げる算段を立ててるのよ、余計なことに頭を使わせないで。さっきの爆発で棘々とした出口が外へと勧誘している。さあいらっしやい、そこには自由が待ってるよ。

男は引き止める言葉を発するよりも、ナイフを飛ばすことで、足を止めさせた。

「伝言を伝えなければ俺がお叱りを受けるんでな、一寸付き合え」

最後は脅迫だ。聞かなければそこで倒れている奴もろとも殺してやる、わざと見せていなかった殺気が現れ、黒深を脅す。

一般人も関係ない辺りは、彼らたる所以なのかもしれないが、黒深としては大きく舌打ちしたいものだった。

「聞く意思ありと見るぞ」

「仕方ないから、どうぞ」

大人に対する精一杯の見栄を笑うこともなく、男は少し眉根に皺根を寄せたままだった。

誠に一応声をかけてみるが、返答はなく、黒深が男に睨みを利かせながら仰向けにした。楽な姿勢のほうで、気が付いたときに楽だ。

「で、その杏とやらはあなたたちの依頼主、ってどこかしら？」

「近いな、性格には杏の上の人間だ」

「そんなこと、言っているの？ 私に」

聞いたところ、結構怖い人らしいけど、と笑ってみせれば、眉根に皺は寄ってはいはいるが、口元を緩めた。

「確かに怖いな、女つてのもあるだろうがな」

「そうね、女である私も、たまに思うわ」

「ふん……女らしくつてのは、疲れねえか？」

無駄口だ。思った時には、男は視界から消え、背後から突き飛ばされるような衝撃で、黒深は床に転がっていた。

叫び声も出ない、痛みに顔をしかめるよりも、誠の安全を考えたが、男のほうが速い。

「動くな」

男の持つナイフは、今や誠の命を奪う権利を持つ。

遠く、上の階から響いた爆発音と同時に、コードを伸びて垂れ下がっている蛍光灯が、不安げに、ちかり、ちかりと光を発した。

「やめなさい」

できるだけ、平静を装ってはみるが、焦りが声の調子を変化させる。黒深が起き上がるう動けば、背中には足。

男のものではない、だとすれば、男の仲間のものだろうと判断し、

危害を加えるかどうかを窺おうとした途端に、背骨へと掛かる圧力。やせた体に、靴跡が食い込んでいくのが分かり、黒深は顔を歪めた。きしんだ音がしないだけ、まだ大丈夫だろう、黒深の背中を踏みつける男は、加減が分かっている。

「卑怯ね」

侮蔑を込めた言葉を、鼻で笑った男は、誠の折れた翼へとナイフの先を向けた。

ぷつりと、小さく浮かぶのは赤い色。

黒深の中で、感情と理性の、バランスの取れた天秤が、今傾いた。

「やめろっ！」

「そっちが本性、だな。やめて欲しいなら、言わずとも、分かっているだろう？ 貴様は頭が良いみたいだからな」

少しの傷をつけて、刃を引かれたナイフには、少量の血液が赤い炎の光を反射して、その生々しさを演出した。

苛立ちに動かぬ体をむやみやたらに動かしてやりたい。黒深は、自分が痛めつけられると分かっていたが、そうしたかった。

理性は正直で、無駄な抵抗をさせてはくれず、黒深は自分の中に別の、もう一人の自分が邪魔をしている。黒深は、その存在しないもう一人の自分を罵倒した。

「そう、それでいい……連れて行け」

「嘘つき。話だけって、言ったじゃない」

「そうだったか？ まあいい、貴様、名前は？」

空とぼけ、話題を変える男に、何を言っても無駄だと思い、下手な行動を、黒深は起こさなかった。それに加えて、この男の顔には、

どこか見覚えがある気がして、どうにも傷を負わせることに抵抗があった。

「依頼主から聞いていないの？」

からかいを混ぜ込んだ言葉に、男は表情も変えずにこう言った。

「聞いてないな、答えろよ。久しぶりに面白い人材を見つけたんだ、それくらいは許されるだろう」

「そつちから、名乗りなさいよ」

「……そうだな、ジョーカー。俺はジョーカーとでも呼んでくれ」

ジョーカー。冗談、トランプのジョーカー。瞬時に思い浮かんだ二つの関連付けされた言葉に、ジョーカーと偽名を名乗る男を、黒深はなんとも複雑な眼差しで見るとはなかった。

「彩深。綺神、彩深」

「綺神？ 変わった苗字だな」

言いながら、ジョーカーは黒深の後ろに回されたままの両手に、金属製の紐が巻きつけ、束縛する。手錠といった類ではないということとは、錠を開錠する必要が無いが、外す術を考えなければいけないということ。黒深は、立たされ、背中を押されながら、遠のく誠に向かって、自由に動かない腕と手を使って、ポーチを放り投げる。叩き落そうとした男の仲間、ジョーカーの制止に、勢いよく手にブレーキをかけ、大げさに腕を震わせた。

真つ黒なポーチは、澄んだ金属音を立てて、重く、鈍い音を床にぶつかることで奏でた。

ジョーカーは、その中身がどうなっているかを理解していたが、取り上げはしなかった。むしろ、この状況で勝手な行動を起こせる

黒深を危険だと感じながらも、口が笑うのを抑えられない。

誰かが今、笑っているジョーカーを見れば不吉な笑いだと言っただろうが、幸運にも誰も見てはいなかった。

合図に従った男の仲間たちは、次々に鴉色のツバサを出現させると、順に飛び立っていった。黒深の監視は、ジョーカー自身が受け持った。厳重な警護、ともとれる。

「誠、後は頼んだ　っ！！」

黒深の声は、未だ目覚めぬ誠に聞こえるはずもなく、無駄に力を浪費させただけだった。

また、遠くから爆発の音が響き、蛍光灯は繋がっていたコードが切れたようで、ただ一人を残した廊下に、暗闇の幕を下ろした。

×××

「どこに、連れてくつもりなの？」

闇夜を飛び続けているが、その姿をとらえるものなど、空を見上げる人間か、夜行性の動物くらいだろう。

「さあな」

「どうして、こんな体勢でいなきゃいけないの？」

「さあな」

「飛ばせてよ」

「駄目だ」

肩に担がれる形で、黒深は小さな、しかし集まればそれなりの大きさをもつ建物の光を見つめながらジョーカーに頼んでみたが、結果は想像していた通りで、面白くなかった。

「何か話してよ」

あれから長い時が経った今でも、沈黙は嫌いだ。黒深の願いに、ジョーカーは耳を貸さないかと思ったが、口に啜えていた喫煙用パイプを放った。

すぐに闇と光の混ざり合った地上に落ちていくそれと、パイプを落とした本人へと咎めるように黒深は口を開いていた。

「環境汚染」

「どうだっていいだろう?」

「よくないでしょうが」

数秒の沈黙。

羽ばたきだけが耳に届き、地上の喧騒など一つも聞こえない。

「困いの向こうがどうなっているか、聞いたことがあるか?」

「え……? ええ、“一部の国はそれによって、一時期とても危険な状態に陥りもした。しかしそれぞれの国は、本来の自活能力を取り戻し、時間はそれなりに要したが、危険ではないほどには立ち直った。今ではほとんど外とのつながりを必要としなくなっている。”これが、教科書で習わされる内容でしょう?」

模範的過ぎる回答に、ジョーカーは苦笑すら漏らさない。

「正解、だ。そうだな……一つ、聞こう。“外国”へと行ったことがあるか?」

「ない」

よどみの無い返事をしながら、唐突というわけではなかったが、話

題の変換に困惑気味の黒深は、何を言いたいのか、相手の意図を読もうとして、そういつたことが苦手だと思いつ出し、やめた。

「一度、見に行ってみろ」

「全部終わったら、ね。それより、お腹が減ったわ」

腹の虫が鳴く音を近くにいたからだだが、ジョーカーのほうにまで聞こえ、つい肩に密着しているお腹を押さえなくなった黒深だった。

頭に血が上り始めて、背筋を鍛える要領で頭を上げてみるが、首が痛くなった。

「ジェイ、キュー。両腕を片方ずつ担当しろ」

ジョーカーの右翼を担当していた女のキューが黒深の右腕を、左翼を担当していた男が左腕を掴んだ。

拘束されている両手を、狭苦しく掴まれ、支えられ、磔にされている気分を疑似体験した黒深は、そうまでして自分を飛ばせようとしないジョーカーを、自分を見もしない男性に音を出さない声で呼んだ。

おと おさん

きつと、気付かないんだ。だって、覚えていない、知らない。きつと、彼はそう言うんだ。

胸を締め付ける痛みも、襲う頭痛も、食事を分け与えてくれようとする男と女も、今は視界に入らない。

ただ、暗闇が見えるだけ。

どこへ向かっているの、なんて誰に聞いても、一時的な答えにしか
ならない。本当に向かう先など、誰も知らない

ACT・20 墮ちる漆黒

世界に自分と同じ顔をした人間が三人はいるらしい

私の家族は、私の本当の家族じゃない。

仮初の家に、仮初の家族。

表にある光を浴びる資格なんてないのに、光を浴びた。どろどろとした闇は、半ば溶けかけて、醜い容貌をさらした。

裏に戻り、どろどろとした闇を作り出すのが、嫌になった。

逃げたんだ、私は。

×××××

海の上を長時間飛び続けている。しかし、飛ばさせてもらえない黒深は、磔体験から逃れて、ジョーカーの肩に担がれていた。

静かな夜に、魚も静まり返っている。

海を照らすのは月。

何故か星は見えない。

寂しげな月に、黒深は心を同調させながら、水面を眺めてみたが、そこから飛び出す魚がないことに、心に冷たい風を吹かせた。

誰も彼もが無言で、存在を感じさせない。

まるで世界に自分しかいないかのような錯覚に、力なく重力にしたがって垂れ下がっているツバサに触れた。少々の抵抗に開いた傷は、血が表面を固めているため、血は出ていない。

痛みでも何でもいいから、誰かの存在を感じたい。自身を簡単に痛めつけようとしていた自分の思考に、恐怖を覚えながらジョーカーを呼んでみた。

「飛ばさせないからな」

先に、そう言われた。あきれ返っているジョーカーに、話しかけるのは賢くないだろう。

「いい加減に分かってるよ、そのくらい……ね、お願いしても、いいかな？」

聞くほうも聞かれたほうも飽き飽きしているということが分かりきっていた。

黒深が、突然に子供らしく「お願い」などと言うから、ジョーカーの興味がひかれたのは確かなことだった。

「何だ？」

「あたしの……名前を、呼んで……？」

怖々とした様子で言われた“お願い”は、ジョーカーからしてみればどうということもない、面白くもなんともないものだった。

「彩深」

それでも名前を呼んでやったのは何故だろうか。

理由を突き詰める気もなかった黒深はほわっ、と気の抜けた笑みをこぼした。それはほんの刹那のこと。

ジョーカーの耳元に口を寄せて、「ありがとう」と感謝の気持ち述べた。そして、ズボンのポケットへ忍び込ませた冷たい欠片に触れた。冷たい。

「礼を言われることでもないだろう」

「うっん。ありがとう。ね、約束して？」

お願い、の次は約束。黒深の言葉に耳を貸しているが、周りの人間特にキューとジエイ　はいい顔をしていない。

「あたしのこととは絶対に彩深、て呼んで。それと、できればあなたの本当の名をおしえて？」

「……約束、というからにはお前も誓約をつけるんだろっな？」

「うん。絶対に飛ばない。約束する」

まるで親と子のやりとりを、不快な気分で見守るジエイを、キューが宥めている。こういうときは、女性のほうが理性的なのかもしれない。

「いいだろう。彩深、約束だ。分かったな？」

「分かったよ」

念を押してはみるが、ジョーカーは黒深の抱く感情など知るはずもない。ただ子供の、先を深く考えない頭で、自らの行動を制限させているとしか思わなかった。

「一度しか言わないからな」

そうして、誰にも漏れることなどないだろうに、ジョーカーはひっそりとした声を出した。

「俺は記憶がない。覚えているのは……そう」

（ベエスは1万人。お前は違う）

「ただ、それだけだ……俺は、約束を果たしたな？」

後で難癖をつけるはずもないのに、わざわざ確認する辺り、意地が悪い。

ただ一言の肯定に、ジョーカーは先を見つめた。
困いに近づいている。

その巨大な存在が全ての道をふさいでるように見えた。

黒深は、早くなる鼓動が、ジョーカーに伝わっていないかと焦ってもみたが、反応などない。良かった、そう思う反面、自分の変化に気付いて欲しいという子供じみた嫉妬が、胸中で渦巻いた。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい　っ！！

「ありがとう」

ジョーカーの腕に、暖められたガラスの欠片を突き立てた。

痛みに黒深の体を支えていた腕の拘束が緩む。

両足をぐつと縮みこませて　蹴るっ！！

頭から落下。

周りにいたキューやジェイは、落ちていく黒深の姿を追うが、その姿はすぐに広大なる海の中へと飲み込まれ、静まり返り、追うことも出来なかった。

姿の見えなくなつた者よりも、怪我をしたジョーカーの対処のほう先だと判断したのだ。

「ジョーカ、大丈夫？」

「大丈夫なわけないだろう、キュウ。早く消毒液をしてやらないと……」

「いい！　それよりも彩深を追え！！」

何を言うんだ。この人は。

早く手当てをしたほうがいいというのに、ジョーカーは落ちてい

った黒深を追えと言う。

キューとジェイは数秒のみアイコンタクトを交わすと、キューが残り、ジェイが水面ぎりぎりまで降下した。

姿はすでに深い闇色の水の中へと紛れ込んで、見えなくなっていた。

潮の香りが近い。

ジェイは、水の中へと潜ろうかと逡巡するが、徒勞で終わる確立が高い。やめたほうがいいだろう。

「見えない。追うのは無理だ」

戻ってきたジェイの客観的な判断に、キューは頷いた。しかし、ジョーカーは無理を通す発言をした。

「いいから、追え！」

抑え付けるような物言いに、手当てを終えたキューは、ジョーカーの肩から慎重に手を離れた。

「いったいどういうことですか？」

「ヴェル」

一つのキーワードを告げると、ジョーカーは体から落ちた赤い液体を追い越して、水面まで下りた。

泡一つ浮かんでこない。

場所を移動したか、それはないだろう。移動したのならば気泡が上がってくるはずだ。

他の仲間たちもジョーカーにつられて水面まで下りてきている。

「無理よ、ジョーカ。彼女を探すのは諦めて、先に進みましょう」

「あいつがヴェルだとしても、死んだなら問題はないだろ?!」
「問題大有りだ!! お前たちは……いい、やめだ。これ以上時間を浪費していたらあの女に俺がどやされる」

冷酷な女の顔を思い出し、ジョーカーは再び上昇し、進んでいた道へと進路を戻した。

消えていった子供が、泣いていたかもしれないと思うと、勝手に胸が痛んだ。

「面倒なことに……ならなければいいんだが……」

それは叶いもしないものだったが、ジョーカーは懐からパイプを出して啜えると、動揺をすべて身のうちへとしまいこんだ。

×××××

最初に麻奈の姿を見つけたのは、意外にもツバサを持たない芙楼だった。

衰弱しきつた麻奈の体は、かろうじて鎖に支えられていて、鉄のわっかに拘束されていた腕は痩せ細り、痛々しい。

一刻も早く体を休めてやらなければいけない、ということと虚有が麻奈の身を預かると、休憩をした島へと引き返していった。

けたたましく鳴ったのは警報。

畏だと気付く頃には、芙楼は綺鬼のもとから離れて、せり上がる壁の向こうへと消えていった。

ドーム状の壁は、月の光が今しがた潜っていた海の水を反射した。隔絶された施設に、入る術を探そうにも、ドーム状の壁にはいくつかの窪みがあり、それが火を噴いた。

「か、かかか、帰るっ!!! 島まで戻るぞっ!?!」

誰かが逃げ出すと、後は芋蔓式に。

呆然と壁の向こうへと消えていった芙蓉を探していた綺鬼も、退却していく人に引つ張られ、視線はそのまま、島へと戻っていった。ドーム状の壁から放たれる弾は、もう届きはしないが、動揺しきり、生への執着に囚われる人間たちは、気付くことなく逃げていく。無様にも散り散りになるものたちが、情けなくもそれが今使える戦力なのだ、綺鬼は絶望的な気分になった。

×××××

まぶたの表面を朝日が射す。

眩しいな、そう思っていた誠の顔に、鈴が影を落とした。

注目しているのは首。

もう少しよく見えないかと、顔を限界まで近づけたところで、誠が飛び起きた。

ごつと鈍い音が生じ、互いにぶつかった部位を押さえて痛みをこらえる。

「いったあーいつ！ 何すんのよおっ?!」

「ええっ?!」

いきなりのことで驚いたのは誠の方なので、謝る必要はないのだが、つい謝ってしまいそうになったが、暗い声がそれを遮った。

「……否。悪、鈴……」

「うるさいわよっ、何よ、見てたとても言っの?!」

「肯。怒り、醜態」

「しゅ……?!」

醜悪という単語がすぐに思い出せないで、数秒ほど悩み、脳内辞書がその単語を見つけた。

「しっ、失礼ねえっ！！　いいわよ、分かったよ、私が悪かったわようっ！！」

自棄と逆切れを足したような怒り方をする。鈴は、しかしすぐさま話題の転換をした。

くるくると止まらない百面相に、灰鴉は無言のままに背を向け、壊れた建物の中を危うげなく、音もなく進んだ。

「そう、そうよっ！　その首のへんな模様！！　皆の首についているけど、流行っているの？」

「え……首？」

首を触ってみるが、軽くでこぼこな感触を受けるだけの誠に、神経質な猫みたいに鈴は鏡を出してみせた。

首輪のように首にぐるりと巻きついていたのは白い紐のようなもの、喉の辺りは片翼の形を模している。

誠は、鈴の顔を確認するよりも速く、鈴の首に注目した。

白いそれは、誠のものよりも色が薄く、見るに―苦勞するものだった。喉にはよく目を凝らすと見える、十字架の模様があった。

「見える？」

鈴が鏡を下ろした。

「よく、目を凝らせば」

「そ……あ、思い出したんだけど。芙楼から預かってるもの、頂戴」

そつぽをむき出した鈴は、芙楼たちがいるであろう方向へと意識を飛ばしている。目が少し虚ろで、しかし、頬がほんのりとピンク色に染まっている。

呆然とすること数秒。催促の手が出され、誠は芙楼から預かったブレスレットを手探りで探す。

ポケットからずり落ちるような形で地面に接していたブレスレットの近くに、黒いポーチ。それは黒深が預かっていたもの。中身は、誠は知らない。

「これ……黒深の……」

重さを主張する黒いポーチの中は、覗かない。

「そつだ……！！ 黒深は、黒深はどうしたのっ?!」

割れた窓ガラスの側まで歩いていくと、小さくガラスが割れる音が聞こえた。跳ねた破片が、足の表面の皮を軽く傷付けるが、気にせず漆黒のツバサを持つその姿を探しても、姿も形もなく、声も聞こえるはずもなかった。

唯一、痕跡として残っているのは黒い羽に混じる、血を含んだ漆黒の羽。それを誠は、彼女が怪我をしていたとは思わず、ここを襲った人と戦ったのでは、と勘違いさせた。

あながち間違っではないのだが、黒深の傷は数日前につけられたものが開いただけであって、特に怪我はしていない。

「尾坂さん！ 黒深を知らない!?!」

「悪いけど、知らないわ。逃げるので精一杯、あなたまでしょ?」

凶星を指されれば黙るしかない。

鈴は、誠から渡された十字の刻まれたブレスレットを、壊れ物を

扱つかのように触れると、左腕にはめた。芙楼の右腕にも、同じような片割れのプレスレットがつけられていた。

灰鴉から、何か手がかりでも手に入らないかと呼んでみるが、彼はその場には居らず、ある程度の損害を確認して、戻ってきたところだった。

両手に抱えられているのは、灰色の紙の束。

「新聞……記事……見……」

ぱ、と手を離すと、軽いはずの紙の束が重なり、それなりの重量になった。

今までの、数日分の新聞だった。

これを読めと灰鴉は言いたいらしい。誠は、黒深のことで後ろ髪を引かれる思いだったが、灰鴉の言いたいことは、新聞の見出しに使われた写真を見ることで理解された。

他愛のないゴシップ記事の1ページ目を飾る大きな写真には、見覚えのある顔があった。

自分は、誰かは、見ず知らずの他人は、誰の手の上で踊っているのだ？

ACT・21 内側をはめられないパズル

ああ、母の胎内へと戻っていく。

暖かくて、穢れを知らなくて、とても幸せで、でも、生れ落ちたら忘れてしまう感覚を、生きている間に味わってしまったら、きつと戻りたくないと思うのではないだろうか。

×××××

ゆらゆらと波間を漂っていると、それが心地よくて、いつまでもまどろみの中にいるようだ。

誰にも邪魔されない眠りに、最高の幸せすら感じる。

黒深は、自らの体に寄せては引く波を感じながら、ぼんやりと意識を覚醒させた。

「死んだのかな？」

言葉は泡に変わり、未だ自分が水の中にいるのだと、やっと自覚した。黒深は、水の中で息苦しくならぬことに、呆然とした。

ツバサがない。

どこかへ行ってしまったなんてありえない。そう黒深は慌てて探してみる。

ざらり。

人の肌ではありえない感触が、手から感じ取られた。

慌ててもがいてみても、その感触は消えない。むしろ、自分の背に容赦なくあたっているような気がして、気持ちが悪かった。

海から出れば、得体の知れないものの正体も知れるだろうと泳ぎだしてみる。速い。

水面はすぐに近づいてくる。今は、昼のようだった。

「ぶはっ！ あー、まっぶしー！！」

太陽が高い位置にある。水面も、仄かに暖かい。

ようやく目をまともに関けられるので、黒深は背中を、得体の知れないものの正体を突き止めた。

鱗だった。

「うっわ、ぬるぬる……」

ぬめりを帯びる鱗は、鈍色に光を反射し、つい目を細めてしまう。

すでにちよつとやそつとのことでは驚かなくなっているためか、

黒深は冷静にツバサだったと思われるそれについて考えてみた。

「どうしてこんなになったんだろう……状況によって変化する、とか？ 確かどこかのアニメだか小説だか、マンガだかにあったような……」

それは、主人公が思えばどんな形にでも変化するような便利なものだった。

黒深は、自分の背に生える鱗がそうだとは思えなかったが、一応やってみることにした。

やはり何も起こらない。

自分の意思が関わっているのではなさそうだと、黒深は考え直した。

「自分じゃ好きなようにできない？ 一体、どうして」

手を軽く唇に触れさせて考えていると、海の水が急速に汚れていくのが目に見えて分かった。

「ん？ うわ！」

水を汚染していく汚れは、どろどろと粘着質で、黒深を絡めとった。もがけばもがくほど、逃げ出せなくなるようだ。鱗は、その汚れに輝きを失っている。

「くっそ、進めない」

手で水をかいてみる。少しだけ進むので、それでどうにか水の綺麗などころまで泳いでいこうとした時、影が落ちた。

「……壁？」

少し進んだ先には、巨大な影が。

大きな壁と錯覚するそれは、つい数日前に見たばかりの“困い”だった。

汚れは、“困い”の向こう側から来ているようだった。

“困い”は、海の、奥深くまで根付いていないのか、ともかく、外国へ行けるようだ。

好奇心と、仲間と、友達と……いろいろなものを天秤にかけ、しかし、今はそのどれからも遠い黒深は、好奇心に天秤を傾けた。

「よしっ！」

背中の鱗が汚れを弾きながら水へと潜っていく。

目をつぶれば、どうにかなりそうだと、呼吸はする必要が無いことは分かっていたから、すべて鱗の便利な機能に任せ、黒深は海の胎の中へと入っていった。

×××××

「あ！ その変顔なんとかっていう学者じゃない？」

結局、何も分かっていないのではないのか。

誠は、新聞記事を読みながら、写真に写るその顔は変だが、失礼にあたると思ったので頷きはしなかった。

写真に写る学者の、左の目玉の無い空洞を見ていると、その人の壮絶な人生を思わざるを得ない。

その写真には、もう一つ。誠の知る顔があった。それは、世界的に有名だということを知った顔ではなく、身近にいたことで知っていた顔だった。

「これ、翼のお父さんだ……」

「はあ？！ なぁに、それ。あんた知らないって訳じゃないわけでしょ？」

鈴は、翼の両親が離婚していることを、ご近所の情報網により、知っていた。鈴の反応は当たり前のことではあったが、所詮は他人の口から口を伝って紡がれた、一種の作り話フィクションになりかけのものだ。

作り話の中心メインである翼の口から事の顛末を聞いたことのある誠は、否定した。

「うつそお！ なんでよ、ねえ、なんで？」

文字を目で追っていく中、集中力を途切れさせようと必死な鈴を無視し続け、誠は文章を読み終えることが出来た。

事の説明は一言で足りた。

遺伝子学の最先端に行く人間の逮捕。

原因は、没落。

一人が物事の大元を解き明かせば、他のものはそれを足場にさらなる高みへと跳躍する。左目のない彼は、足場を作り、その後上へ跳ぶことは出来なかったようだ。

有名になったからこそその援助が消え、彼をもてはやした者たちも消えた。荒れた生活に、精神を病むのは時間の問題だった。

有名になる人間ほど、急ぎ足で消えていく。

「翼のお父さんは、何故ここに……」

写真は、数年ほど前に撮られた　当時新聞に載っていた　ものだった。しかし、誠が聞いていた翼の父親の職業とは、全く共通点が見受けられなかった。

「黒深……綺鬼……連絡……無」

新聞を運んでからふらりといなくなった灰鴉が、誠の正面に立っていた。

首に巻いたマフラーは、少し焦げて黒くなっていた。

「誰か、連絡を取れる人は？」

誠は、確信はなかったが彼が人と人との間を繋ぐ人物だと思い、尋ねてみた。

灰鴉は、誠をその瞳に移しては居らず、その向こう、廊下のほうへと注意を注いでいた。

「逃げた」

ただ一言、灰鴉が非難を含めて発した言葉は、誠の向こう側にいた男にも届いた。

「逃げてない！　ただ、あれだ。誘導つてやつだよ！！」

全く以って反省していない。

慎也はところどころを擦りむいて、赤と、土の茶色を肌につけていた。

「酷い目に遭ったんだぜ？　これでも俺、頑張ったんだよ」

胡乱げな目つき三対に、無言の圧力を受けた慎也は、冷や汗を垂らしながらポケットを探った。取り出されたのはタグ。

それがなんだとばかりにさらに圧力を受けると、慎也はいくつものドッグタグを取り出して床に広げた。鎖の絡まる音が床から上がった。

「ゼーんぶ目を通してくれ、俺は休む」

堂々と宣言すると、窓際の硝子の破片をどかし、自分ひとりが転がることのできるスペースを作ると、横になった。

「なによお、あいつ。あたしら置いて逃げてったじゃん！」

「感じよくなかない？」一度聞いただけでは理解しがたい言葉を発する鈴は、床に散らばったドッグタグに、興味が無いわけではなく、律儀に拾い、目を通し始めた。

灰鴉は拾い集めることはせずに、素早く目を動かしていった。誠は、まだ床に散らばっているドッグタグを、それに書いてある数字どおりに集めることにした。

×××

ドッグタグは全部数字と、4つのマークと、絶対に本名とは思えない名前が書かれていた。

4つのマークは、身近にあり、見覚えのあるものだった。

「トランプじゃんこれ！ ねえ、そうでしょお!？」

「うん……これは、トランプのマークだね……」

ハート、ダイヤ、スペード、クローバーの4つのマーク。

マークの色は赤と黒のシンプルなもの。

「でも、何だろう、これ？」

「……コード…ネーム」

他のドッグタグを見たい、と灰鴉が手を出し、誠が持っていたドッグタグを手渡した。

数秒ほどで全てに目を通した灰鴉は、確信を得たように一人頷くと、ドッグタグを全て誠の両手の上へ落とした。

こぼれそうになるタグを床へと並べた。

ナイト。

クイーン。

キング。

絵柄のあるカードと同じ数字には、その数字にあつた名前が彫られていた。その横には、1から4の数字がつけられていた。

絵柄のないカードの数字には、外国の数字の読みらしく、片仮名でその名前が彫られていた。

だが、それが何の関係があるのか、パズルに例えるならば枠が出来ただけの状態から始める誠や鈴、灰鴉は、そこにどんなピースがはまるのか解らなかった。

慎也ならば、余計に当てはめるピースを持っているのだろうか。

とにかく、ドッグタグの関連性が解つたのだから、先に話を続けるために、慎也の目覚めを待たなければいけない。

×××××

どろりとした水は、黒深の体をほぼ完全に縛った。

汚染されたような海水は、ひどくなっていくばかりで、手に、目に、口に、刺激を感じるようになったのでたまらない。

わずかながらに動く体でもがき、海面へと顔を出した。嫌な臭いだった。

鼻が曲がる。といった表現はこのためにあるのだろう。

生を許さず、死と、荒廃を表すような風が、腐りきって渦巻いていた。

目は開くことが出来ない。開きたくないというのが黒深の本音だった。

見て絶望するのも、見ずに恐怖を抱くのも、どちらも嫌な結末を招くだろうということは理解していた。

「帰りたい」

腐りきった風は、いつも過ごしていた国、場所では無かったもので死と、荒廃を知ることの無い世界で過ごしていたのだから、それから目をそむけたかったのだろう。

だが、現実目の前にあり、後ろにあるものではない。

「違う、帰っちゃいけないんだ」

返事など期待していない。ただ、自分を奮い立たせるためだけのもの、それでも自己暗示をかけつつづける事で、張りぼての勇気を黒深は手に入れた。

腐った風が喉を痛めつけ、声が掠れていたが、張りぼての勇氣は萎れなかった。

痛む目を、刺激の少ないように、ゆっくりと開けてみるが、余計に目が刺激され、涙がこぼれる。

何度か瞬きをすると、滲んだ視界は徐々に黒深の視力に合った世界を映し出した。

「嗚呼……」落胆の大きい声だった。そして、唇を皮肉げに、笑うかのように、ゆがめた。

「絶望……だ……」

渦巻いた風が、腐りきった水を巻き上げた。

絶望の世界へようこそ……知らないままだったら幸せだった？

ACT・22 後手に。

退廃しきつた場に、清涼なる風は吹かず。
ただありしは濁りきつた情景也。

×××××

「何か……ヤバイ」

確かに、澱んだ空気も、濁りきつた水も、遠くにあるはずの大地も、
ただそこにあるだけで、何も害はなさない。

だが、確かに感じる。生命を脅かす危機を。

「わぷっ」

澱んだ空気が突然動き出して風を生んだ。

どうやら汚れているのはこの辺りのみ。この囲いの中は、偶然に
他の囲いから流れ出た物質に汚染されているだけで、その先は、う
まくいけば人の住む大陸があるようだ。

私の目が捉えたのは、崩れ去る赤く光を反射する、まるでガラス
の滝。

きらりきらりと光りながら落下するそれは、地面へ落ちようとす
る前に消滅していく。

あの光のところに、誰かいるような気がしてならない。

だが、行きたくは無かった。

まだ自分にはやらなければいけないことがある。

「また、後で……」

自然と口にした言葉は、自分ですら理解しかねるものだった。しかし私の頭の中では、その疑問は優先事項ではないとされ、記憶の片隅にしまわれた。

×××

行きをどうしてきたか解らなかったが、とりあえず自分の国の囲いの中へと戻ることができた。

唐突に腹が鳴り、自らの腕がさらに細くなっていることに気が付いた。

荷物はおろか、金すらも持っていない。下手に動けば飢え死にか、自分の背中にあるそのせいで栄養を吸い尽くされるか……どちらにしろ同じようなことで、最悪の結果が待っていると思えない。

「船、ないかなあー！」

自棄に走りそうな自分が、やけっぱちで叫んだというのに、返事は意外なところから返ってきた。

自分の、背後から。

「さ……ん?! ど、ど……?」

声は途切れ途切れに聞こえた。どうしてだろうか、とても、眠い……。

視界が閉ざされる前に、自分は懐かしい姿を見たような気がした。ジョーカーと名乗った彼ではない。もっと、優し……く……て。

とお、さん ?

×××

「う……」

まぶたを通り越して刺してくる日差しが鬱陶しい。

体が揺れている。違う、体ではない、背がついている何か揺らしている。

よく気絶するようになったもんだ。

日常から離れて、もう数度ほど気絶している気がする。単に、自分がドジなだけなのかな……。

「目、目さめっ、覚め、た……！！」

少し起き上がった自分に、いきなりタツクルを決めたのは、見慣れた姿。

「はい、離れましょうねー？ この子はいちおー病人なのよー？」

妙に語尾を伸ばす女が、父さんを引き剥がした。

RETの構成員だろうか。

「熱はないねー、血色も良好。大丈夫みたいね？」

額に手を当ててみたり、脈拍を測っている辺り、彼女は医者だろう。彼女の後ろで父親が心配そうに首をめぐらせている。正直恥ずかしい。

「父さん、恥ずかしい」

私に指摘されても父さんは、目に溜めた涙を器用にこぼさないようにして、私の様子を伺ってきた。

「だ、だって彩深、う、浮かんで、たんだよ……？ 海の上に、し、心配しないはず、な、ないじゃないかあつー!!」

最後は自棄になった。始末に終えない。

「彩深って言うのねー、あなた」

「そうだけど……あなたの、名前は？」

「あ、私の名前ね？ 私は波間陽子なみま ようこ。よろしくねー」

陽子と名乗った彼女は、若く見えた。女性に年齢を聞くのは禁句なので、推測で済ませてみるが、肌のつや、髪の毛のしなやかさや、生気に満ち溢れた様子は、十代か二十代だと思わせる。

父さんは、結局陽子に追い出されて、落ち込みきった犬のようにしょんぼりとしていた。

「心配も、行き過ぎると嫌ねー？」

「確かに」

苦笑しながら、ここが船の中だと言うことに気がついた。

モーター音に、波の音、時折揺れていたのは、海を渡っていたせいであった。

自分はどれくらい意識を失っていたのか、誠は、灰鴉は、鈴は……無事なのか？

「あら、そんな心配な顔して！ あ、お友達のことか気になるー？」

「知ってるの？」

「知ってるから言うのよー？ 聞く？」

即答する。「聞きたい」と。

「無事よ、貴方よりも、ずっと元気。貴方のほうが心配なのよー」
「ほら、傷口が腫れているの、分かってる？」

え、と間抜けな表情をして、傷口を見た。

足も、背中への傷も、妙に熱を持っていて、膨らんでいる。

背中へ、気付けばツバサに戻っていた。状況対応性の、便利なものだと立証された。

「無痛症ね……厄介ねー、貴方」

厄介だ、と言うくせに、顔は全く厄介そうではなく、むしろ仕方が無いことのように言っている。

無痛症なんて聞いたことが無い。だが、名前通りに考えれば、その通りだろう。

「ツバサを持つ人特有の症状ってやつ？」

「当たり前ー、自覚はしていたのねー。偉い偉い」

頭を撫で回される。

髪の毛が、生乾きのままだったみたいで、変な風に跳ねた。

「どのくらい気を失ってた？」

「お昼時を過ぎるくらい」

陽子が言うと同時に、情けなくも腹の虫が空腹を訴えた。

父さんが、待っていましたとばかりに部屋へ突撃してきた。湯気の上がる食べ物のをせたトレイと一緒に。

「ちょうど魚が釣れたんだ！ 彩深、たくさん食べるんだよー！」

少し乱暴に扱われたトレイは、その上にのっていた汁物を波立たせた。

すぐさま姿を消してしまった父さんに、声をかける暇もなく呆けていると、誰も聞いてはいないはずなのに、陽子が声を潜めた。

「貴方が目覚めるまで彼、目を真っ赤にして魚を釣ろうとしていたのよー？ あ、本人にはもちろん内緒で、ね？」

笑う姿は、やっぱり若くて、まだ未熟さが残っているような気がした。自分が言えることじゃないのは分かっているけど。

陽子が、食事の間くらいは席を外すと言ってきかないので、私は一人船室に残された。

お箸とスプーンと、フォークが乗っている。

トレイの上は、無駄に“増えるワカメ”を大量投入したような味噌汁と、刺身だけだった。ご飯があればよかったけれど、空腹を訴える脳は、それでも十分だと、食事を急かした。

30分もあれば、食べ終わるには十分で、箸を置いてから「ごちそうさま」を言った。

「おかわりはいる?!」

タイミングを見計らったの登場は、父さんの特技なのだろうか、きつとそうなのだろう。そのくせ、妙に悟った風があるから時たま苦手だ。

「いらない。てか、いつからそこに？」

そこ、とは扉の向こう側。

「今さっきだよ、もうすぐ到着するからね」

「到着？ どこへ？」
「綺さんのところだよ」

綺さん。とは私の母さんを、父さんが呼ぶときに使う言葉だった。わざわざ船を出している辺り、何か問題があったのかもしれない。多分、いや、絶対にそれは厄介な事態だと思う。

今までの経験上、父さんと母さんが擦れ違うときは、何かある。絶対に。

「あ……」

「ん？ ど、どうかし、した？」

今度のはどもったわけじゃなくて、ただ単に船が揺れただけだった。私は「別に」とだけ返して、今さらながらに後悔した。

誠とか、灰鴉とか……大丈夫かな？

心配だ。怪我とかしてないかな、とか、自分を探してくれないかな、とか、くだらなくも思考はめぐっていく。

そうしているうちに、船は大きく揺れながら、停船した。

“島”に到着したようだ。

×××

「綺さん……」

「典雅……」

うつわ、なんだこの本気で殴られる3秒前な……今時風で言つのならMN3なシーンは！ん、我ながら古いかも。ちなみに、本気と書いてマジと読む。

多分、他の人から見たら多分「愛しい人同士の美しき再会ね!!」
なんて言いそうだ。

しかし、普段の二人を見ていれば、必ずこう言うだろう「何で逃げないんだ？」と。私も同意だ。

目の前で、父さんが吹き飛んだ。

正確に表せば、こうだ。まずは鳩尾に拳が一発。直後に当身、転じて足払い。倒れ行く父さんに止めの一発として、アップ！。下向きだった顔は、上向きにのけぞっていった。まるで格ゲーだ。

周囲で暖かい眼差しだった人たちの顔が、一気に真っ青になっていく。背景として想像されていた花畑が、地獄へと成り代わる瞬間だった。

「あつちやー……」

駄目だ。完全に人の話を聞いていない。

当分の間これは続くだろうから、私は数日前に誠たちと相談をした。少し開けた場所から離れることにした。

×××××

「もーっ！ まっじありえないっつーか!! ちよっとお！ この男起きないんですけど?!」

日も暮れてきたというのに、慎也は依然眠り続けている。鈴の我慢も、もう限界だった。

誠は、黒深と翼の安否を除けば心配することも無いので、ある程度の余裕を持って慎也の目覚めを待っていた。灰鴉は、何も言わないので苛立っているかは不明であったが、彼なりに建物の損傷などを調べまわっているので、暇はしていないはずだ。

夕刊を持った灰鴉が戻ってきた。

「面倒……事件…ツバサ」

相変わらずの単語のみの言葉ではあるが、大体面倒ごとであることは理解した誠は、前日よりはまともにつく電気に照らした新聞を読み始めた。

『ツバサ狩り急増』

全国「ツバサ狩り」

数日前、全国的に起きた謎の粉撒布事件より数日経過した今。謎の粉により、突然変異を起こしツバサを持つようになった人々が続出した。彼らはそれぞれに姿を隠していたが、謎の粉撒布事件より数日後の、警察調べによりツバサを持つ人が被害者となる、傷害事件が多発していることが発覚した。

さらに数日経った現在、ツバサを持つ人間を殺害するという、殺傷事件が多くなってきていることがさらに発覚した。それと関連してか、「ツバサを持つ人間が羽ばたくと人が死ぬ」と思い込み、殺害するというケースも増えてきている。警察は、ツバサを持つ人間を見かけたら積極的に注意を促すことを前提として、パトロールをしている。

血の気が下がっていく。誠は、灰鴉の持ってきた記事が、正に面倒事であると実感してしまったのだ。

「これで……どこにも行けなくなっ…た？」

紙がこすれあって、規則的でない動きをしながら床へと落ちた。

今まで悪態をついていた鈴も、誠のただならぬ様子に気付いて、床に落ちた新聞を拾って読んだ。

「うつそお……何よお、これ！」

喚いたとしても、事態は変わるはずもなく、無駄に反響する声が、その意味の無さを強調している。

「面倒になっちまったな！」

いつの間に関目覚めたのか。慎也も新聞を覗き込んで、憎々しげに吐き捨てた。

鈴は、慎也に怒声も、声も投げつけなかった。ただ衝撃を受けて、例えるならば真っ白になってそこにいた。誠も、そうだった。

灰鴉と慎也は互いに視線を交わし、どうしようもないことに言葉は出ずに、数秒だけ視線を合わせたまま。そして、視線は自然と外された。

人間は、自分の許容範囲を超えた物事に出会うと、何も考えられなくなる。どうにかする術が無い、から？

ACT・23 何が。

壊れた歯車はからからと廻る。

正常な歯車すらも巻き込んで。

それでもなお動く、壊れた歯車が壊れたならば ?

×××××

恨んでいるか、お前は。

謝罪などはしない、不可抗力だったのだから。だが、護る。

できるだけ傷付けずに、お前の元へ届けるために尽力しよう。

×××

「どうするよ?」

慎也が、誰に問いかけるでもなく聞いた。

喧騒から切り離された場所で、たった数人が輪になってどうにかなる話ではない。

割れたガラスの向こうから、うるさいくらいにクラクションが鳴り響いていた。

「……逃走…ツバサ、危険」

下が騒がしくなっている。ただのビルだったはずのここは、今やツバサを持たない人間達の格好の的。灰鴉は誠を示した。

「確かに、そうだけど……私だけ逃げるのは嫌だよ」

「えー!? でもお、狙われるのってツバサのある人だけじゃ」

鈴の頭に拳骨が飛んだ。

「デリカシーのねえ奴だなあ、おい。いい加減にしるよ、どちらにしるここは危険なんだよ、分かってんのか?！」

騒がしい足音が幾つも近づいてきている。鈴は黙り、一人で駆け出した。

「あ、おい!!！」

「いいわようっ！ 芙楼に助けてもらうんだから!! 芙楼ならあたしを助け……！」

突然の炸裂音。

「きゃああああっ?!！」

絶叫。

戦慄が駆け巡る。

軽々と吹き飛んでいく体。燃える周囲。

「伏せる!!！」

慎也が、呆然と鈴が吹き飛んだ方を見続けていた誠を伏せさせた。誠は、素早く黒いポーチを手元に寄せていた。

慎也よりも早くに伏せた灰鴉は、即座に二人の方へと近付く。

「……飛ぶ……降りる」

『え?』

誠と慎也の声が重なり、疑問を投げかけたが、灰鴉はすでに、二人を両脇に抱えて割れた窓から飛び出していた。

絶叫マシンで上げるような声を上げながら落下。

灰鴉の背中から、服を突き破って灰色のツバサが外へ晒される。

羽で視界が一杯に埋め尽くされる。

「喋るな……舌を…噛む」

力強く羽ばたくツバサは、誠の片翼だけで見ても明らかに大きく、倍以上の大きさはあった。

ツバサの大きさは何処に影響するのだろうか、誠は目を回しながら、動きがある程度安定するまで大人しくしていた。隣では、無様な叫び声が聞こえた。

×××

ぜー、はー、と途切れ途切れの呼吸音が、澱んだ空気の中で木霊した。

灰鴉が誠と慎也を両脇に抱えて降り立ったのは、ツバサをなくした人々の“埋葬地”だった。そこは、数年ほど前に打ち捨てられた土地で、人の気配などは無かった。

すでに大きく掘られた穴をのみだしてまで、蠅の集る死体やら、途切れそうな息を吐き出す人間たちが堆く積み上げられていた。

あの施設での経験からか、誠の頭は麻痺しているのか、哀れとは思えど吐き気などは無かった。灰鴉は、眉をひそめてはいたが、一度何かを振り切るように目を閉じるとここなら 当分は 大丈夫であることを告げて以来、一言も喋ってはいない。

慎也は、その光景を見てすぐに誠と灰鴉の目に付かないところへと駆けていった。口をおさえるのも、忘れてはいなかった。

「あ……あ……」

微かな声。無様に潰れている声。

灰鴉は視線をやりはしても、そちらへと近づくことは無かった。助けを求める声に、誠は声の聞こえた方を真っ直ぐに向いて、跳ね上がる心臓と、乱れる呼吸を整えた。

「誰……?」

「あ……う……」

声を出そうとしている。

しかし、その声はあまりにもざらつき、苛立ちを覚えさせるほどに聞き取りにくかった。

「手を、あげられます……か?」

今度は返事が無かった。動こうとしているのか、それとも疲れきったのか。

「あそこだ」

灰鴉が口を開きかけたところで、未だに顔を青くしている慎也が、蠅の集っていない場所を示して、また口元を押さえて穴から遠ざかった。

「声を出せますか」

腐敗臭が酷い。

手で鼻をと口をおさえて、耳を澄ませば、確かに聞こえる声に、誠は下を向く。

「う、こおー……い……だい」

何を話したいのかわからない。だが、「ここ……痛い」そう言っているように聞こえなくもない。

誠は慌てて、人と人の中から漏れる微かな声を頼りに、目をそむけながらも動かない人々を左右へと転がした。

ずるりと剥ける皮膚。半ば崩れかけた顔。
腐食が早い。

「あー、あ……うう……」

声が少しずつだが、大きく聞こえる。

何度も喉までせり上がってくる吐き気を抑え、誠は声の主を見つけて出すことに成功した。

それは、斑に内出血の痕を見せる、全裸の女性だった。

×××××

「お久しぶり、かしらあ？」

着地に失敗して、蹲る芙楼の頭上から、声が降ってくる。

霧雨のようにじつとりと体に染み込み、体力のみと言わず、気力すらも奪っていきそうな、変に力を持った声。

「祐樹が捕まったそうだな？」

「あら、どこから聞いたのかしらあ」

いたって、平然である。別段驚かなかつた杏は、芙楼の情報源だと思われる携帯を見つけていた。

「耳が早いよねえ？」

「一応、な……何を言いたいか……わか」

「分かってるわよお、翼くんのことでしょう？」

違う、とも、当たっている、ともとれる複雑な表情で、芙楼は取り出していた携帯電話を開閉させた。

「ふふつ、ハズレ……かしらあ？」

「遠からず、近からず」

それでも芙楼が渋い顔をするので、杏は困った親のような顔をする。子供の心を理解できなくなってきた親の、戸惑いの表情にも似ていた。

「お前の息子はとうだってい……」

「失礼ねえっ!？」

突然の絶叫。

耳に響く、子供の頃によく悪戯した、黒板を引つ掻いた時の音のように不快になる、金切り声。

「私に息子なんていないわ!! それに、もしそうだったとしても、あんな情けない子はいららないわ」

言葉が終わるにつれて、冷静さを取り戻していく杏に、芙楼は「……そうか」とだけしか言葉を返せなかった。

返事の返し方に困ったのだ。

他人であれ、その言い方は酷いだろう。芙楼は、どこかにいるはずである翼に同情した。

冷静になった杏は、熱くなってしまった自分を恥じて、気を取り直すようにヒールを鳴らした。

「まあ、いいわあ……彼のこと、聞きたいかしらあ？」

のんびりとした、しかし艶めいた声が芙楼の耳にまわりついた。

「ああ、聞きたいな」

「彼は死んだわ」

「へえ……死んだのか」

あら、冷たいのね？ 杏は芙楼の反応が大きく変わるのだと期待していたらしく、軽く落胆した。

芙楼は、ほんの数日を過ごした男を思い出し、血に塗れてその姿を掻き消してしまう残酷な想像を打ち消した。

「さて、私からは1つ、あなたも1つ、どうかしら？」

情報の等価交換を求める杏は沈黙した。相手の反応を待っている。

携帯を開いて、閉じる。

その作業を繰り返し、そうしてやっと芙楼は携帯を開いた。

互いに相当重要なポストについている、下手な情報はすでに知られている。

「あなたの娘のことで、何か知りたいことは？」

「あらあ！」

意外だったらしく、大げさに口を開け、その口を手で隠した。

笑い出す杏の口元は、芙楼には見えなかったが、笑ってはいなかった。

表情は驚きを演じ、隠した口は、今にも舌打ちを漏らしそうだ。

「そうねえ……興味ないわ」

「仕方ないな、じゃあどんなことが聞きたいんだ？」

身内ならば興味も湧くかという芙楼の淡い希望は、目の前で砕かれた。

「そう聞かれると……困るわあ」

口元を隠していた手を頬に当て、はにかむような笑顔。よくある女の照れ隠し。

時間を惜しむことの無い芙楼は、閉ざされた施設の天井を見上げ、根気よく待つことにした。

×××××

数分後、母さんによる父さんへの一方的虐待が終わった頃、周囲でフリーズしたまま動かなかった人々は、真っ青を通り越して漂白されてそこにいた。

幻覚の煙を上げて倒れる父さんに、声をかけたくはなかった。

「彩深」

名前を呼ばれた。母さんだった。

「何」

平手打ちの音。

痛む頬。殴られた。

八つ当たりだ。

「勝手に外すなど、いつも言っていたでしょう?!」

声は静かではあったが、そこに隠れる怒りを抑えきれていない。

殺気に近い怒りの気配。

ここに虚有も、麻奈もないのか。いたのなら、きっと何か言ってくれたはずだと思う。それよりも、そっちが勝手にやったことなのに、人のせいにするのは筋違いだと思う。

「ヒスはやめてよ。ところで、芙楼は？」

気がかりその1について、母さんは海水をそのまま飲んでしまったような顔をした。

「いないわ」

それだけ。でも、何かがあったことは分かった。

雰囲気からしておかしい。

癒羽のところで見かけた面々は、施設のあったはずの方向をそわそわと見ては、怯えたように視線を外し、時間が経てば今度は癒羽や苺飴と過ごしたあの山の方へと視線を投げて、数秒ほど経てば重苦しい息を吐き出し、エンドレス。

「何か、あった？」

棘々しい気配のときの母さんに声をかければ、その不機嫌さに寂しさを覚えながらも、声をかけられなくなるけど、今日だけは違う、鈴のところにいる誠や灰鴉、慎也……いなくなった翼にも関係しているような直感的な部分がうずいた。

「黙りなさい」

「えー、嫌」

たまには子供らしく、茶化すように言えば、見下す綺鬼の鋭い視線。

「黙りなさい！」

沈黙。乾いた平手打ちの音。

漂白された人々は、今度は青色に染められたらしい。

そこへ、父さんが慌てて間に入った。

「綺さん、いくらなんでもそれは……」

「黙りなさい」

一瞥。

しょぼくれる父。駄目な大人の見本に見えなくもない。

「綺鬼さんのバーカ。勝手に行動してやるうっ！」

すねたときの決め言葉。

いい大人がやつちゃ駄目だよなー、なんて。まだ子供だけど。

うん、都合のいい言い訳。いい子供が、と今度は言われそうだ。

くるりと背を向けて、浜辺までダッシュ。飛びはしないし、飛んじゃいけない。

「待ちなさい！！」

「彩深！ 駄目だ！！」

何が駄目なのか、よく分からないけれど、足から海水に突っ込んで

いって、飛び込み台からスタートするように、強く踏み込む。足に誰かの暖かい手が触れた気がするけれど、引きずられなかったから、きつと綺鬼ではない。

ばしゃん。

腹うちはしなかった。こういうときは、頭を上に向けちゃいけないところがポイント。

息苦しくなりながら沈む。

背泳ぎの格好になれば、歪んだ空が見えた。

まだ昼下がりに入るくらい。もうすぐ夕方になる。そうすれば、進む道は分からない。

「皆が……いればなあ……」

こぼ、こぼ、こぼ　泡が徐々に少なくなる。

声を掛け合って陸を目指した数日前を思い出せば、どうしてこうなったのか疑問に思わずにはいられない。

「あれ……」

泡が出なくなった。落下も止まった。

視界は相変わらずゴーグルなしで潜ったプールの様だ。

動かせば進む。陸地を目指して泳ぐ。

鱗が　肌が粟立つように　逆立った。何度目かの嫌な予感。

父さんの、駄目だと言った意味を、この後現実として実感するま
では、まだ時間があった。

狩りは、獲物が逃げ回るからこそ、のたうち、悶えるからこそ愉しいという人もいる

ACT・24 狩は始まり

逃げる逃げる。

混乱した人間の頭に正しい情報なんて入らない。

×××××

「さて、始まったか……私の役目はここまでか？」

女が男に振り向いた。

男は黙したまま、一度だけ首を縦に動かして、奥の見えぬ深淵の瞳で女を射る。

「何だ？ 言いたいことがあるのなら、今の内に言っておけ」

「奇跡的に次があり、会うとしたらおそらく……全てが終わった後だ」

女はそれだけ言うと、視線を戻し、その先にあるはずの騒乱を見詰めた。

何を言うかは分からないが、聞いてからでも遅くは無い。女は、全てが終わるまで舞台から降りている気で発言していた。

「お前を“そこ”から引き摺り下ろすのは、ヴェルだ。覚えておけ、お前は傍観者であり続けることは不可能だ、観念しろ」

最後の言葉は、どこか子供じみていて、冷めた目で見つめた女は、男の瞳に鋭い光が宿っていることを確認して、ふ、と短く苦笑すると、「覚えておく」そう言ってその場から去っていった。

残された男は、懐から携帯電話を出すとメールを打ち始めた。

×××××

命が、転がっている。

今にも消えそうな命だ。

その弱々しい呼吸は、小動物の呼吸にすら似ていた。

自らの血に塗れた体は、ここが平和ではない、少し昔に国民たちの見た“困い”の外の様子を、戦時中の様子を、知りもしないのに実感させられた気分になる。

「無惨な……」

灰鴉が珍しく口を開き、細々と命を繋げる霊長類を見下ろした。彼は決してそちらには近づかない。死を予測した鳥のようだ。

「止血……しないと」

致命傷とされるのは背中。薄く切り開いた傷に手を突っ込んで、無理矢理に引き裂いたかのような傷だった。

目を背けようにも、誠の踏み入れた場所からは、同じようなしかしその違いは明らか。ものばかりが見える。

半ば途方にくれていたが、誠は卒然自分の服を裂こうと、力任せに引っ張り始めた。

死者への冒瀆はしたくもないし、する気も無い。

簡単に裂けない服に苛立ちよりも涙がこみ上げてくる。誰か助けて。

「い……の……ありがと……う。」

血塗れの女は微かに笑う。

どうして、何故。理不尽な現実ばかりを責めながら、誠は服に齒を立てた。埃や血で汚れた服は、吐き気がすることに気付いた。空いた片手で抱き起こせば、それは人の体重が感じられて、しがみつき続ける命を感じた。

「病院に行こう」

「無理……事件」

若干ためらいがちな灰鴉の言葉に、誠は埃や血で汚れた顔で、まだ大丈夫と言ってみせた。

「莓飴さんが、います」

×××××

ちよつと、待て。

呆然と立ち尽くして呟く。

人が人を……人がツバサのある人を引きずり倒し、殴り、蹴り。何人かが抵抗する気力も無くなったのか引きずられていく。死んではいけない。殺されていない。それだけが救いのようにも思えた。

一体、何があったのか。ふと視線を逃がそうとしたら、タイミンが悪く、残っていた青痣だらけのツバサをもつ人と目が合った。

「たすつ、げつ……！ 助けてえっ……！」

こういうときに思い出すのは、やっぱり日常で見るドラマやなんかのことで、みつともないといつもは思っていたけれど、実際に直面してみれば怒りが湧いた。

男の人に暴行していた人々が揃って私を見た。興奮に任せた、危

険な目つき。

あなた、口出しすんの？ そんな顔をして私に問いかけないで欲しい。

「何、してるんですか？」

一応、聞いてみた。男の人の腫れたまぶたの下にある目が、絶望に染まった。お前馬鹿だろとか言外に言われた気がして切なくなった。暴行を加える大人のうち一人が、苛々しながら子供に紙の切れ端を私、その子供まで苛々しながら私に紙のきれはしを抛って暴行を再開した。

男の人は背中にある薄汚れたツバサをかばい続けながら、目の端から透明な雫をこぼしている。

「……いい加減に、しなよ」

記事に目を通した。普段の速読術が役に立ったのだ。でも、嬉しくは感じられなかった。

いい加減にしるよ、ふざけてんのかっ？！

男の人が腹を蹴られて吐いた。中学生くらいのガキがそれをはやし立てた。

頭に上った血が巡ることをせずに沸騰していきそうだ。

暴力は犯罪になる。でも、そう、私には大義名分つてやつがある。“犯罪者”から“被害者”を助けるという“名目上の暴力の理由”が輝いている。

誰かが間違っていると私を怒れば止まったかもしれない。なんて、今さらだし、間違っているなんて分からないはずが無いっ！！

「いい加減にしゃがれっ！！」

男の人を囲っているのは10人ぐらい。人の間を縫って男の人をかばう。

邪魔だ、とか、消えろ、だとか。他にも色んな罵詈雑言を聞いた気がする。

ただ、そのときの私に宿っていたのは怒りと憎しみという、二文字で表せる単純で複雑で暴力的な感情だけだったから、よく覚えてはいない。

私すらも蹴ろうとした大人を、足払いをかけて転ばせた。がら空き。

転ぶ様は不様。人がいたので頭が地面と結婚するなんて事態は避けられたらしい。ひっくり返った男の腹に踵を落とした。

倒れたままのツバサをもつ男の人を背負う。

「大丈夫？」

小声で聞けば微かな頷きが、背中できすぐったいと思わせた。

鈍い痛み、視界が大きくぶれた。誰かに殴打された。

すぐさま視界を取り戻す優秀な人間の目が見たのは、得意げにフアイティングポーズを取る男。苛立ちをそのまま力に変えて得意げな男の面を張つ倒した。

怯む男に頭突きをして、股間をフルキック。普通はやっちゃいけないのだけど気にしない。でも、あれって男でも女でもかなり痛い。時計の秒針が半周するかしないかの間の出来事に、口を大きく開けた犯罪者たちは標的を私に絞った。確かこういうときに三十六計逃げるにしかずって言うんだっけ？

「飛んで!!!」

今度は回りに聞こえるように。

瞬間よりも速い刹那の逡巡が走る一般人を無視して私たちは飛ん

だ。

一般人の手には届かない空へ。

「ど、どくへ……」

男の人が安全圏へ入ってから右往左往する。目が廻りそう。

私は誠や灰鴉たちと別れた場所に一旦行こうと考え、その旨を男に伝えた。「知り合いがいるかもしれないから」と。

×××××

「うっそお」

ここまで酷い襲撃を受けたのだろうか。黒深は間抜けな声を出していたが、その横では先ほど助けた男も啞然としてビルを見上げていた。

黒深の予想以上に破壊されたビルは、未だに小さな火が消されまといとゆらゆらと動いている。明らかにビルは機能していない。

「じ、こじってRETのビル……ですよ、ね？」

口の中が痛むようで、男の言葉は少し途切れがちだ。

返事を返すことも忘れて、黒深は最悪の想像をしてしまい、脇目も降らずに駆け出した。

「ちょっと、待ってくださいよ……！」

こんなところに取り残さないでくださいと男は黒深の背中を追いかけた。

嘘だ、嘘だ、嘘だっ！！心のうちで暴れまわる不安と焦燥が身

を焦がしそうだった。それに
加速させられ、黒深は最後に誠たちと会話していた場所へと駆け上
がろうとした。しかし、階段が平気だと、誰が思うのだろうか。破
壊され、今にも崩れそうだった。

「誠、灰鴉、慎也、鈴……誰もいないのかっ!？」

声を張り上げ、崩れかけた階段を上る。二階、三階と。
そこで足場が崩れた。

「うわっ」

崩壊を免れた階段だったものに縋った。下に落ちていくコンクリー
トが、重く、鈍い音を立てて崩れていくのだからと思わせた。

目の前で雫が落ちた。それが、自分のものだど気付くのに、かな
りの時間が掛かった。欠片で傷付けたのか、小さくて丸い赤い球が
崩れて赤い筋を手に残していた。

「大丈夫ですか?!」

「あ、ごめ……」

追いついてきた男の人が私を支えて、崩れそうも無い踊り場に下ろ
した。

「ありがとう」

「いえ……あ！ さっきはどうもありがとう。子供に助けられると
は、思ってた無かったよ、あ、悪い意味じゃないからね？」

慌てて言い直したり、少し照れるところが、島で別れた父さんにち
よっただけ似ているかもと思うと、微笑が漏れた。

男の人は、栗田松夫くりたまつおと名乗った。なんだか出会いの多いここ数日。

「私は綺神。綺神彩深です」

「変わった名前、だね？　どんな字を当てるの？」

「綺麗の綺に、神様の神。彩りの彩に、深いっていう字を当てます」
「ふむ」

頭の中で私の言った漢字を当てはめているのか、数秒ほどして

「綺麗の“き”は奇妙、じゃない方の？」

「そうです」

そもそも奇妙の奇はあや、と読むのか知らない。

「うーん、変わっているというか、珍しい、ね？」

「よく言われます」

「そういえば、君、ここに誰か知り合いがいるの？」

「友達が……います」

そうだ。

「誠……！」

呼ぶ、でも返事は返ってこない。静かで、寂しさすら覚える。

身の内側から焼きつけてくる焦りが、腹への痛みが変わった。締め付けるような痛み、ストレスかもしれない。

「もし……その子がいるとしたら、何階にいるの？」

「6階の、カフェテリア」

「飛んでいったら速いと思うよ」

ゆっくりと、諭すように言われても、約束を破りたくない私は、ツバサを広げて、傷口を示した。顔色が変わり、協力者の顔になって、私の体を抱えた。

薄く血の色の見える羽が痛々しく、何度か謝ろうとしたけど、結局何も言い出せなかった。

「着いたよ」

「ありがとうございます」

早々と礼をすると6階周辺を歩き回った。会議室はプラスチック製の机やら椅子やらが溶けて不快な臭いを発していた。カフェテリアの方を覗いてみたが、やっぱりと言うべきか、元は食べ物の載せられていたはずの皿が焦げて其処にあった。

会議室から逃げて、何階まで降りたのか、記憶に無いがここから一階ずつ降りていけばおのずと分かるだろう。

「酷いね」

破壊された場所を歩くのは、どうにも陰鬱な気分になる。誰もいない、何か得体の知れないものがあるような気分になる、とにかくプラスに向かうような要素が無いせいかもしれない。

「異常だ」

それしか言えない。

「うん、異常だ。ところで、僕はこれからどうしたらいいかな？」

何を今さら、というかいきなりなんだって言うんだ。

「このままどこかに隠れ続けることは無理だろうし、だからといって飛び続けるのも自分の命が危険で、どうしようもない」

「まあ、確かに」

曖昧な返事を返して一つ下の階へ降りる。石橋を杖で叩きながら進むように、慎重につま先でこれから踏む階段を一段ずつ調べながら進むというのは、どうもRPGのダンジョンの中にいるような感覚だ。

一つ降りた階での収穫は無く、代わりに明らかに人の手で命を絶たれた魂の抜けた塊がいくつも見られた。いつからか感覚が狂ったみたいで、あまり動じなかった。

「何、してるの？」

始めに見つけた死体を通り過ぎた時だった。自分の足音だけしか聞こえないことで足を止めた。栗田さんが、手を合わせていた。弔いのつもりなのだろうか？

「何って、手を合わせているだけだよ」

いや、それは分かっているから。

「何で？」

「普通じゃないかな？ 死者の前で手を合わせるのって、ほら、墓前でだって手を合わせるよね」

「でも」

「まだ彼らは発見されていないから、誰も弔わないだろう？ だから、こうしているだけだよ」

死体の前で手を合わせたままの栗田さんは一度目を閉じて黙祷した。いつもなら、誰もが忙しく働く場所に、喧騒はなくなっていた。これは、誰なのか。

頭を掠めていった疑問に、私は未だ黙祷する男の横を通り抜けて赤く染められたカードに目をつけた。

黒い線が描かれていた。カードの裏側だ。

黙祷を終えた栗田さんの目は、きつと私のしている行為を咎めているのだろっけど、私は気にすることもなくプラスチックのカードを裏返した。

救うのか、救えるのか、どうするのか、考えるのは自分であって他人ではない。

ACT・25 半歩

歩き出そうと考える。何が始めの一步目になるかなんて分からない。

×××××

一番無惨な状態だったのは3階だった。

その階だけ、真っ黒焦げで、燻る火も多かった。

「物騒な……どこで、こんなものを……」

松夫が足元に落ちていた拳銃を拾った。しかし、すぐに怖くなったのか、元の場所に置いた。

黒深の見たところ、それは既に撃鉄がひしゃげていたので、使い物にならないだろうということは分かった。

「何か、いっぱい落ちてる」

煤で汚れた銀色を、黒深は拾って服で磨いた。ボールチェーンまでは磨かなかつたが、磨かれた部分は元の輝きを半減させてその姿を現した。

「……トランプ？」

黒深の感想がそれだった。

ドッグタグと類されるそれを、次々に磨いてみると、黒深の言葉は現実味を帯びてきて、拾ったそれを全て磨き終えた頃にはほぼ確定となった。

ある程度の輝きを取り戻したタグ達は、順に並べるとAからKま

であり、全部が揃っているわけではなかったが、スピード、ハート、ダイヤ、クローバーの4つのマークが刻まれていた。

「何の意味だか」

全然分からない。黒深は手に持っていたタグを抛ると、先程松夫が手にしていた拳銃を確かめた。松夫はタグに注目していて、黒深の方へ視線は向けなかった。

弾倉を確認すれば、まだ弾が残されており、おそらく自分の持つものと同じ弾だと判断すると、弾のみを懐へと忍ばせた。使えない拳銃に用は無い、が、何故か拳銃が気になった黒深は拳銃も拾い、ズボンのベルトへ挟んだ。

「君、拾い癖でもあるの？」

いつの間にやら松夫の注目は自分だったことに気付かず、半ば本気で言われた言葉に、むっとした黒深は、松夫を無視して拾えるだけタグをしまいこんだ。

×××××

「んー、いい天気！」

雲ひとつ無い空。息を吸い込めば、体の隅から隅までが浄化されたかのような気分になる。

葛籐は、怪我の状態が快方へ向かっている怪我人たちに言われ、一休憩を取るために外へ出ていた。

街の中では感じるこの出来ない、柔らかな日差し。これでビールシートでも敷いて転がって昼寝が出来たら、どんなに幸せだろう。

「少しくらい、いい、かしら…?」

久しぶりののびやかな時間。苺飴にとってこれほど嬉しいものは、今は無かった。

しかし怪我をした彼らの様子が気になるのも事実で、あと数分ほど休んだらまた戻って様子を見ていようと決めた。

「苺飴さんっ!!」

遠方から響く声。そんな声を出したら見付かってしまうかもしれないという一瞬の判断に、苺飴は反射的にその声の元を辿っていた。

灰色のツバサ。見慣れない男。その見慣れない男の両腕が支えているのは見知った女と、まだ苺飴のいる場所からはよく見えない何かだった。

誠の姿は認められた。徐々に鮮明に見えてくるその姿が抱いているのは、到底人とは見えぬ程に赤く、黒く汚れていた。

苺飴の休もうとしていた能天気な思考は排除され、即座に治療する場所などを考え始めた。

「そのこの2人！ 今すぐ場所を確保、そこで固まっている人は何か運ぶものを持ってきて!!」

こっそりと休息するはずだった苺飴を覗きにきていた者に指示を出し、慌てて走り出した男達をすぐに思考から締め出した。

降り立った誠からひったくるように女を預かり、運ぶものを持ってきた男と共に女を乗せ、場所を確保させた1人がその場所へと案内した。

担架に乗せられた女は、担架が必要ないほどに軽く、すぐに担架は女自身の汚れと女の体にこびりついている固まった血が剥がれて、

赤黒い染みを作られた。

「こつちです！」

脚に包帯を巻いた男が、部屋へと誘導してきた腕に包帯を巻いた男と頷きあった。

女を運び、診察台の上へ乗せた時点で2人の男が邪魔にならないように外へと控えた。

一気に騒然となったため、野次馬が何人も集まってきたが、弱りきって目を閉じたままの女の姿を見て、引っ込んでいった。

「消毒液！ ガーゼ、タオルいっぱい！！ お湯も！！！」

葎飴の大声に反応した人々は慌てて動き出した。

女をうつ伏せにさせた葎飴は、その背中で呼吸をしているように動く突き出た骨を見て軽く吐き気を覚えた。

「何よ……これ……」

ぐぱり、ぐぱりと女の背中が上下するたびに赤い粘液が伸びては縮んだ。突き出た骨は、おそらく元はツバサだったのだろう。

割れた骨が呼吸に合わせて別れ、接着したかのような状態に……その繰り返し。

後から部屋へと飛び込んできた誠は、悲鳴を飲み込み、ただ呆然とそこに立ち尽くした。

「葎飴さん！ ガーゼとタオルここに置きますね！！！」

「お湯持って来ました！！！」

到着した男たちとはにかく邪魔にならない場所に葎飴から頼まれた

ものを置くと、異様な雰囲気から遠ざかるようにそそくさと部屋を後にした。

「聞こえて……いますか？」

苺飴がうつ伏せにされた女と視線を合わせる。

血塗れの顔から覗く焦げ茶は、苺飴に焦点を合わせていなかったが、返答はあった。

「聞……聞こえる」

かすれきつた声は、苺飴が必死に耳をそばだてて聞き取った。

絶望的な状況だった。

生きているのが不思議なくらいだった。

急ごしらえの診察台にうつ伏せにされた女が生きているのが。

「信じられないわ……こんな…状態で……」

「……苺飴さん。治り……ますか？」

治せるか、ではなく治るか。

誠は彼女が元のようにになれるのか聞いた。

苺飴は返答の代わりにゆるゆると首を振った。

「生きているの不思議なくらいなの。彼女は」

傍らで必死に生きようとする彼女に、その声は聞こえているのだろうか。

信じられない。それが苺飴の素直な感想だった。

手は尽くすつもりで、タオルを湯にひたし、血塗れの体を拭いていく。途中、ボロの服を脱がせた。

その場には灰鴉もいたが、退出を願われることもなく、部屋の入り口で野次馬が覗くのを防ぐかのように腕組をして壁に背中を預けていた。

「損傷は……ここだけね」

お湯はあつという間に血の臭いを漂わせ、真っ白だったはずのタオルも血の色に染まった。

汚れを拭き取られ、醜く背中を抉る傷がよく見えるようになった。誠は悲愴な顔をして女性を見守り、灰鴉はどこか彼方を見つめている。

「どうして、脈がすっかりしているのか……不思議なくらいだわ……心当たりは？」

「無い、です。でも、顔色が……それに呼吸も」

どれも瀕死を示していた。

「信じられないことばかり起こるわね」

処置の施しように困ったのか、莓飴は消毒液をガーゼに垂らし、丁寧に傷口の周りをなぞりだした。

部屋に充満する消毒液の香りに、誰もが無言になる。

女性は、微かな寝息を立てている。こんな状態でも、睡眠欲には勝てないのだろうか。

ガーゼが女性の背中から突き出る骨を撫ぜた。

ふるりと震える女性の体。グロテスクな背中から突き出たツバサの残骸。無音の部屋では、その残骸の立てる音が奇妙に反響した。

「莓飴さん」

「何、かしら？」

「すみません。限界で……す……」

誠は莓飴に断るその体を床へと落としたりした。

慌てて誠の側にしゃがんだ莓飴は、彼女に異状がないか調べたが、特にそれといったものはなく、肉体的、精神的疲労が重なったのだと診断し、徐々に莓飴たちを心配する声が出てきた廊下の方へと声を飛ばした。

「彼女を休ませたいの、手伝って」

莓飴の言葉に野次馬の中から次々と手が上がった。

「ありがとう。頼んだわよ」

莓飴に指名された男達は、自分の部屋から持ってきたのか、シーツを即席担架代わりにしてそつと運んでいった。

女にも、ある程度の処置を施し終えたところで、莓飴が長く息を吐く。

その場が安定したと思った野次馬達は、一人、また一人と散っていった。

散らばる野次馬達がそろそろいなくなる頃、莓飴が灰鴉を呼んだ。

「あなた、誰？」

「……巻き添え」

あまり多くの情報を与えるわけにもいかない灰鴉は、少し前を振り返り、適切な表現を口にした。

莓飴は複雑な表情をしながらどう返すかに迷った。

「そう。ありがとう、彼女達をここまで連れてきてくれて」

「礼を……言われるほどでもない」

「そうかしら？」

無言。灰鴉は相変わらず壁に背中を預けてどこか彼方を向いた。

「……まあいいわ。あなた、怪我はしていない？」

「いや」

明確に、拒むように言った尊飴はむっとしたようで足音荒く灰鴉の目の前にたつた。

遠くを先を見ていた灰鴉は、その本当に相手を見ているのか分からない眼差しを尊飴へと向ける。

「嘘をつくのはおよしなさい。ゆう、あき」

まだ残っていた野次馬の中から2人の男が出てきて灰鴉を拘束した。元より逃げる気が無かったのか、灰鴉はふうと息を吐いた。

「怪我をしていないと嘘を付く、拘束を簡単に払えるのに何もしない。矛盾してない？」

「……面倒ごとが、嫌いなだけだ……」

今度はそっぽを向いた灰鴉は、仕方ないとばかりにさっさと巻いていたマフラーを外した。

先の出来事で少し焦げたマフラーが、何の感情もなしに外されていく。

「あ……なたって人はっ！！」

ばかりと大きい音。

灰鴉を監視するゆつとあきと呼ばれた男たちですら驚いて後退ったというのに、灰鴉は微動だにせず、ただ緩慢な動作で平手を喰らった頬に触れた。

「……痛」

「痛くしたのよ！当たり前よ！！このお馬鹿！！」

息を荒くした苺飴は、深呼吸を一回すると労わるような手つきで優しく灰鴉の首に触れた。

擦れて赤くなつた傷と、軽く焼けて爛れた痕。

痛いはずだつたらう、誰にも言わなかつただらうと、苺飴はどこか物悲しく感じた。

わなわなと震えている苺飴だったが、再び深呼吸をするとガーゼやら包帯やら取ってくるようにあきに命じる。

座る場所が特に確保されてなかつたため、女性が乗ってもまだあまるベッドの上に軽く腰掛けるように言った。

「絶対にそこを動かない事、私は薬を持ってくるから、大人しくしていなさいね」

子供に言い聞かせるような口調に灰鴉は軽く俯き、笑みをこぼすと一言了承を示す声を上げた。

返答に満足したのか、苺飴の姿が部屋から消える。

苺飴が廊下へ出た途端にその場が騒がしくなった。ちらほらと苺飴へと声をかける人々の声が、苺飴が部屋から少し離れた後も、自分の間聞こえていた。

何が、どこで当てはまるのか、気付くのはいつだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9832b/>

大空を飛ぶ者

2010年10月28日08時02分発行